男爵は微笑う

謳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
男爵は微笑う

【Ｎコード】
Ｎ８３２２Ｕ

【作者名】
謳

【あらすじ】
怪盗”男爵”による純・美術館での事件から三か月。とある傷害事件の裁判を傍聴していたユリは、そこで蕪木了と再会する。
音沙汰のなかった了との突然の再会から、止まっていたあの事件が、再び動き出す…。

お恥ずかしながら、続編です。
恐らく、前作を読まないと全く話が通じません。
前作同様、推理ジャンルにしていますが、推理要素はさらにチープ

な感じになっています。
どちらかというと、恋愛…？

ゆるり、更新して行きます。
エルシとクレア、ユリと了の関係を終息させるための、話です。
ゆるり過ぎて、更新は遅いです。

※恋愛要素が高めな最近、一時ジャンルを恋愛に移します。

再会◆1

梅雨も世間の知らぬ間に明け、陽炎立ち上る真夏を迎えたある日、芳生(よしお)ユリはとある裁判の傍聴のため、東京地方裁判所を訪れていた。

被告人は三〇歳の男性。都内在住で元交際相手の三二歳の女性宅へ押し入り、致傷させたとして、強盗致死傷罪か過失致死傷罪かが問われている。

事件発生は先月の二日未明。友人と食事後、タクシーで帰宅した女性が自宅の鍵を開けた際、男性に侵入され、脅迫と拘束を受けた。男性は女性に復縁を迫ったが、女性が拒否をすると直ちに女性に危害を加え、全治三ヶ月の怪我を負わせた。その後、女性が上げた悲鳴を聞きつけた近隣住人が通報。駆け付けた警察官により、家宅侵入と致傷の罪で身柄を拘束された。

というのが当初の捜査経過であった。

が、事態は思わぬ方向へと展開する。

その後、海外逃亡中と思われていたあるスパイ容疑の指名手配犯と、この被疑者が同一人物である疑いが浮上。捜査は急遽、警視庁から専門機関へ受け渡されたのだった。

だが、公にはこのスパイ容疑については伏せられており、この法廷では、女性宅への家宅侵入、暴行、致死傷罪について争われる事となっているらしい。

争点は、強盗致死傷か、過失致死傷かというところで、これにより、その後行われるスパイ活動についての捜査に影響が出ると見られている、そうだ。

ここまでが、ユリが匠に聞かされた話であった。

ユリにはそこまで聞いても、未だ自分が何故この裁判の傍聴をしなければならないのか、理解出来なかった。

今日は大学時代からの親友であるマミコと二人で、東京駅グルメツアーをする予定であったのだが、マミコが家へ迎えに来た時、匠

にこの話を聞かされ、傍聴へ行くようにと言われた。ユリの抵抗はまるで効かず、匠はただ、行けと言うばかりだった。
結局マミコが「面白そうだし、行こうよ」と乗った事で、事態は収拾した。
開廷時間五分前。
被疑者の弁護人は既に席に着いているが、検察側は空席だった。
ユリが何気なく法廷内の時計に目をやると、検察側の通路へ繋がる扉が開き、薄グレーの細身のスリーピーススーツを着た若い男性が入って来た。
法廷の資料や証拠品であろうか、書類の束と頑丈そうなジュラルミンケースを持ち、足早に席に着くと、手際良く資料を並べて行く。
背が高く、程よく鍛えられたらしい体格をしていて、少し長めの髪をやや後ろに流している、容姿の良い男性だ。
男性が資料を並べ終えると、再び検察側の扉が開き、今度は品の良いベージュのスーツを着た、すらりとした若い女性が入って来た。女性もやはり大量の資料を抱えており、男性の隣に座るなり、それを広げ始めた。
女性が広げ終わった資料を、男性が指をさしながら女性に何か訊ねている。女性は男性の指が動くその都度、頷いたり首を振ったりしている。助手のように見えた。
やがて、男性は納得したのか小さくつまらなさそうに頷くと、傍聴席をちらりと見…、ユリを見て目を見開いた。
当のユリも、男性と目が合って驚いた。
「…あ…アイツ…っ。」
ユリが呟くと、マミコが不思議そうにユリを見て首を傾げた。
男性から目を離せないユリはそのまま硬直し、男性もまた硬直していた。
ユリと視線を交わらせている男性。
紛れもなく、蕪木（かぶらぎ）　了（とおる）だった。
あの”紅い泪事件”から三か月。とんと音沙汰ないと思っていた

ところでの再会であった。
「それでは…。」
呆然とするユリの耳に、しゃがれた男性の声が聞こえた。
目をやると、裁判官が一人、席を立って机の書類をペラペラとしながら話していた。
「これより、本法廷を開廷致します。
一同、ご起立下さい。」
裁判官の指示通り、検察、弁護人、被疑者及び被疑者を連行する看守、係官、傍聴者が起立をした。
「礼。」という声とともに、一同は一礼をし、着席をした。
しんと鎮まり返る法廷内で、ユリは了を気にしつつも、緊張して背筋を伸ばした。
了はというと、相変わらずの眠そうな目で、裁判官や弁護人、被疑者を観察している。
「では、検察側による冒頭陳述を。
蕪木検事。」
裁判官の言葉に、了がすくと立った。そして一束の資料を手に取ると、何故か空いている手を腰に宛て、偉そうに事件経緯について話し始めた。
話の内容は大凡匠から聞いた通りで特に目新しいものもなく、ユリは聞き流しながら、なんであんなに偉そうにするのかと了を見ていた。
「…以上の事から、本法廷に於いて、検察側は被疑者に対し、強盗致死傷罪を問うものとします。」
言い終わり、了が席に着くと、続いて弁護人と被疑者に対し、裁判官からの罪状認否と確認事項が始まった。
話を聞いても理解が出来ない、というのは後の言い訳で、ユリは話など聞かず、ひたすら了を見ていた。
了は自分が話さない間は、真っ直ぐに弁護人や被疑者を見、正確に言うと睨み付け、資料をとっかえ引っ返しては、何かメモを取っ

ていた。その姿は、三か月前、美術館で見ていた了とはまるで別人で、本当の了はここにいる了である事を、まざまざと見せ付けられているようだった。

「検事。」

裁判官が突然了を呼んだので、ぼうっとしていたユリが驚いてビクついた。

「尋問をどうぞ。」

裁判官の言葉に、了が立ち上がった。そして手ぶらで検察官席の前に立つと、机に腰をかけて被疑者を見ながら話し始める。

「女性とはどのような関係か、あなたの口からご説明願いたい。」

了が言うと、被疑者は落ち着いた表情で「昔、お付き合いをしていました」と述べた。

了の事ばかり気になっていたユリが、改めて被疑者を見ると、被疑者は女性のような華奢な風貌の、綺麗な顔立ちをした男だった。

凡そ、女性を脅すようなタイプには見えない。声も透き通っていて、口元に湛えた微笑が、どことなく西洋の天使像を思わせた。

「どのくらい前にお知り合いに？」

「七年くらい前でしょうか。」

「どのように？」

「街で、彼女から声をかけられました。

夜、友人と飲み歩いているうちに道に迷ってしまったので、駅まで案内して欲しいと。

そこで意気投合して、彼女の友人と三人で食事を。

結局朝まで飲み明かして、連絡先を交換して別れたのですが、後日彼女から会いたいと連絡を貰いました。

その後も、彼女から連絡を貰って、何度か会う内に、親密に。」

被疑者は淡々と、微笑を浮かべたまま語る。

「その後、彼女とのお付き合いはどのように？」

「どのように、と仰いますと？」

不明瞭な質問に対しても、堂々と冷静に問い返す。

弁護人は発言の多くを被疑者に任せているようで、余裕を見せていた。
が、了も特に動揺する様子もなく、淡々と質問を続けている。
「きちんと付き合おうという話が出てからは、度々結婚の話も出ていました。
二人とも前向きに検討をしていましたが…。」
「『が』？」
「彼女が突然、別れを切り出して来たのです。」
「何故？」
「解りません。ただ『もう会えない』と繰り返すばかりで。
一度は引き下がりましたが、どうしても納得出来ず、先日、彼女のアパートへ…。」
「ふぅん。
あなた、彼女のアパートへ向かう前に、彼女に電話をしているそうですね。」
了は後ろ手に資料を取り、ぺらりと捲った。見ずとも、どこに何を置いたか記憶しているような、自然な手つきだった。
「通話記録があります。携帯電話会社に確認しました。
彼女も留守電にせず、きちんと電話を取っている。
何を会話したか、大凡で結構、再現出来ますか？」
「はい。『今から会いたい。少しだけでいいから、話がしたい』と言ったと思います。
そうしたら、彼女が『いいわよ』と。
『家の前で待っているから』と言うと、彼女が電話を切って、暫くして、タクシーで彼女が帰宅しました。家の前で待っていた私にかの…。」
「まず、そこまでで結構。」
話を続ける被疑者を、了が止めた。
「なるほど、あなたはあの日も今日のように冷静だった訳だ。
それとも記憶力がいいだけですか？

一字一句、寸分の誤りもなく、その通りの通話記録が残っています。
彼女も用心深かったのでしょうね。携帯電話のボイスレコーダーにその時の記録が残っていました。」
「そうですか…。」
被疑者が、少し溜め息交じりに答えた。
その様子を見て、了が気だるそうに首を傾げた。
「さて、続きを伺いましょう。
あなたはタクシーで帰宅した彼女と、彼女の住むアパートの前で会った。それから？」
「はい。
彼女の部屋は一階で、彼女はちょっと待っててと言いながら鍵を開けて、家の中へ入れてくれました。
その後、お茶を出されて、暫くは、話を。」
「なるほど。」
「なんでしたら、その時の会話も覚えている範囲でお話ししますか？」
被疑者が言うと、了はにやりと笑った。
「そう言うのは結構。続きをどうぞ。」
了に促され、被疑者が一瞬黙った。
いつの間にか、被疑者の口元から微笑は消えていた。
「…はい。
落ち着いて話をしていた筈です。少なくとも私はそれまで、落ち付いていました。
話も途切れ途切れになり、やがて別れ話についての話になりました。
そこで、何度も納得が行かないと繰り返す私に、彼女が怒ったのです。
宥める私に彼女は刃物を取り出して突き付けて来て…。
揉み合いになった後、気付くと、彼女が倒れていました。そのあ

と、鍵をかけていなかった玄関から警察官が何人か入って来て、取り押さえられました。」
「間違いありませんか？」
「ええ。」
訊ねる了に、怪訝な顔をしつつ、被疑者が頷いた。
「有り難うございます。
被疑者ではなく、弁護人。
あなたの主張は、被疑者による家宅侵入はなかった。傷害は自己防衛だ、という事でよろしいですか？」
「間違いありません。先ほども申し上げましたが？」
了よりだいぶ年上の弁護人が、了の態度にあからさまな苛立ちを見せ、答えた。了はそれを、面白そうに見つめている。
「有り難うございます。
さて裁判官、ここで私に、この携帯電話を少し弄る許可を頂きたいのですが。」
そう言って、了がパールピンク色の携帯電話を取り出した。
「これは、被害者女性の私物の携帯電話です。」
「証拠品としての届けがあるものですから、どうぞ。」
先程から進行をしている裁判官が頷くと、了がスライド式携帯を操作し始めた。
「今から、ある音声を流します。
これは、先程、開廷直前に警察の鑑識から届いた情報で、弁護人はご存じないものの筈です。私たちも、つい先程知ったばかりです。
まず、こちら。」
そう言って、了は法廷内のスピーカーに繋がったマイクに携帯を近付けた。
『…もしもし。』
『俺だ。今から会いたい。少しだけでいいから、話がしたい。』
『……。
いいわよ。』

『家の前で待っているから。』
「これは、先程の証言にもあった、被疑者が被害者へかけた電話の通話内容です。
次に…。」
――バン。
――カツ、カツ。カツ、カツ。
『久しぶりね。どうしたの？』
『……は……。』
『そう。変な事しないなら、家に入れてあげるわ。』
『そ…な……。』
『…わかったわ。』
――カツ、カツ、カ…。
『あぐっ！！』
――ガチャンッ。ガッ。カタタ…。
『…まったく…。』
――シャラ…。
――ズ…。
――チャリ。
『……る部……すね…。』
――コツ、コツ。コツ、コツ。コツ、コツ。コツ、コツ。コツ…。
――ズズズ。ガチャ。キィ…。バタン。
――ゴトゴト。トン。ト、ト、ト、ト、ト、ト。
――ドン。ザラ…。ガサッ。
『…レロッシェ…ム、エ…シ。』
――ト、ト、ト、ト、ト、ト…。
――…。
――……。
――……。
――…バタバタバタバタッ！
――ドンドンドンドン！

『こんばんわー。…警察です。どうかしましたかー？　入りますよー！』
――ギ…、キィ。バタン。
『…ッ…。』
『…これは、あなたが…？』
『ええ。そうです。』
『こ、拘束しろ。現行犯。』
『ハイ。』
「ご清聴有難うございます。」
そう言って、了が携帯を片付けた。
「これは、この携帯端末のボイスレコーダーに記憶されていた音声です。
録音日時は、事件当時。
タクシーから下車後、被疑者に気が付いた被害者が、故意に録音したものだそうです。
この音声からすると、あなたの証言とは随分状況が異なるようですが…？」
弁護人や被疑者は、この録音に気付いていなかったのだろう。弁護人は呆然として、被疑者を見ていた。一方で、被疑者は涼しい顔をして、了を見ていた。
「被告人。これを、疑いますか？」
了が問うと、被疑者は愚問とでも言うように笑った。
「いいえ。そんなものがあったんですね…。」
「気付かなかったと？」
「ええ。気付いてたら…、落ちた携帯を拾った後、彼女のカバンに戻したりなんかしませんよ。」
「…認めますか？」
「…認めざるを得ないでしょう？」
「…。」
了と被疑者のやり取りに、弁護人はただ呆然と互いの顔を見比べ

ていた。
携帯電話は検察側の証拠品だ。弁護人がその詳細について知らなくても不思議はない。
そして被疑者がこれに気付いていなかったのであれば、結果的にお粗末な虚偽証言をしても、やはり何ら不思議はない。
ただ、ユリには気にかかる事があった。
それは了の表情である。
被疑者を見る了は、美術館で幾度となく浮かべた、あの笑みを浮かべている。
「以上です。」
了がくるりと踵を返し、席に着くと、進行役の裁判官が立ち上がり、弁護人を見た。
視線に気付いた弁護人が、進行役の裁判官の下へ歩み寄り、何やら小声で話を始める。暫くして、弁護人が席に戻ると、裁判官が立ち上がり、今度は中央にいる裁判長へ耳打ちをした。
裁判長はうんと一つ頷き、
「弁護側からの要請により、本法廷を閉廷致します。
検察側、弁護側には、後ほど明日以降について伝達をします。
以上。」
と言い、席を立った。
看守が被疑者に手錠をかけ、法廷を出て行く。弁護人もがさつに書類を片付けそれに続き、了と女性も足早に退廷した。
係官からの指示を受け、傍聴人もぞろぞろと出て行く。
ユリとマミコは最後まで待って、法廷を出た。
裁判所内の休憩スペースで、一息吐く事にし、自動販売機でコーヒーを買って、並んでベンチに座った。
何が起きたのかは理解していたが、あまりに呆気なく閉廷してしまったので、二人とも少し面食らっていた。
やがて、マミコが、
「やっぱゲームとは違うよね。」

などと言って笑った。
「まぁ…。派手なものじゃないわよね、裁判って…。」
ユリも苦笑した。
「ねえ、同期のナナコがこの間司法書士受かったって言ってたけど、こんな感じなのかな？」
「司法書士は弁護士とか検事とは違うわよ。裁判に出る事もないだろうし…。」
「えー、そっかー。」
気楽な会話を意識してくれているのか、マミコがはしゃいだ。
何故か気が重いので、正直マミコの態度は有り難い。
「ね、もう少し休んだら、歩いて東京駅まで行こうよ。早く終わったからまだ時間あるし！」
そう言って、マミコがユリを覗き込み、「あ」と声を出して止まった。マミコは廊下の向こうをじっと見ている。ユリもその方を向くと、薄グレーのスーツの男性がポケットに手を突っ込んで歩いて来た。
了だ。
了はユリをマミコを見止め、ユリに向かって肩を竦めた。
「久しぶり。」
ユリが声をかけると、マミコが驚いてユリを見た。
「知ってる人？　さっきの検事さんでしょ？」
「うん。ちょっとね。」
「ええー。知り合いなら早く教えてよ！」
「ごめん。まさかここで会うと思わなかったんだもん。」
「んもう…。」
何が不満なのか、マミコがむくれた。了はユリの目の前まで歩いて立ち止まると、マミコをちらりと見た後、ユリに視線を戻した。
ユリも座ったまま了を見上げる。
美術館で会った頃より、大分大人びて見えるのは、恐らく服装のせいだ。

赤いベルトなどしていないし、髪型もきちんと整えていた。
眠そうな目は変わらないが、若干痩せたように見える。
「このまま帰るのか？」
「うん。ああ、ちょっと遊んでからね。」
「そうか。」
了はポケットに突っ込んでいた手を抜き、ユリに差し出した。
ユリが手を添えると、その手の中に、何かをぽとりと落とす。
それは、白い小さな箱だった。
「匠さんに渡してくれ。頼まれてたものだと言えば、通じるから。」
「…うん。夜になっちゃうわよ？」
「構わない。」
「わかったわ。」
そう言って、ユリが箱をカバンに仕舞うと、了がネクタイを緩め、シャツのボタンまで外して服装を乱した。首元に、あのロケットがちらりと見えた。
それを見て、ユリは心なしか安心する。ロケットをまだ身に付けてくれていた事もそうだが、服装を乱した事で、知っている了に戻った気がしたからだった。
「ん？」
じっと見るユリに、了が首を傾げた。こんなところも、余り変わっていない。
「…ううん。」
特に何を話す事もなかったが、久しぶりなのでついじっと見てしまう。
そんな気持ちを汲んでか、了はふと微笑った。
「了！」
廊下の向こうで、了を呼ぶ声がした。
振り向くと、先程法廷で、了の隣にいた女性が小走りで近付いて来た。
「本部長が呼んでるの。すぐ戻って。」

女性はそう言うなり、ユリに気付いて「あら」と言った。
女性は暫しじっとユリを見た後、にこりと笑って、
「あなたがユリちゃんね。」
と言った。
「え…。はい。」と、ユリがおどおどと答えると、女性はちらりと了を見た後、
「了の秘書をしています、三笠と言います。よろしくね。」
と言い、手を差し出した。
「あ…。」
ユリは慌てて立ち上がり、ワンピースで手のひらを拭くと、三笠と名乗った女性の手を握った。
別に汚れていた訳ではないが、三笠が余りに美しかったので、より綺麗にしたかったのだった。
ほっそりとしつつメリハリのある体型に。長い手足、つるつるとした白い肌に、濃すぎず、地味過ぎないメイクを施した顔には、格好の良い鼻と、大きな目、小さな口が付いている。
手も、汚れ仕事などと無縁と思えるほどに細くしなやかな指と、きめ細やかな肌をしており、少しゴツゴツした手のユリは、恥ずかしくなる。
「…初めまして…。」
身を縮めて挨拶をするユリに、三笠がふふと笑った。笑顔すら、様になっている。
「ごめんなさいね。せっかく久しぶりに会えたんだから、ゆっくり出来ればいいのだけど、了も仕事が多くて。」
「いえ…。大丈夫です。」
「また遊びに来てね。」
「…はい。」
凡そ場違いなセリフではあるが、突っ込むのすら躊躇うほど、今ユリの周りは三笠の空気で満たされている。
三笠はユリから手を離すと、片手に持っていた書類を抱え直し、

了を見た。
「行きましょ。」
「ああ。」
了のやる気のない返事を聞き、三笠はユリにもう一度笑いかけると、「じゃあ」と言って歩き出した。
了は、三笠を見た後、横目でユリを見、「近々、連絡する」とだけ言って、三笠のあとを追って歩き出した。
三笠が一時止まって、了を振り返る。そして了と並んで歩き出した。
何かが過ぎ去った後のような呆然とした様子で二人の背中を見送るユリに、マミコがにじり寄った。
「かっこいいわねぇ。検事と秘書カップルかぁ。」
言われると、確かに並んで歩く姿は妙にバランスが取れている。距離も遠すぎず近すぎず、適度だ。弁えている大人、という印象を持つ。
何を期待していた訳でもないが、奇妙な寂しさを覚えた。
「…いこっか。」
ユリがマミコに言った。
「うん。お腹空いたね。」
「うん。空いた。」
ゴミ箱に近いマミコが、ユリと自分のカップを棄て、笑いながら言った。
「お肉食べようー！」
「肉ー！」
あっという間に気持ちを切り替えた二人は、鼻歌を歌うように裁判所を出た。

再会◆2

この辺りは、高層ビルは多いが日陰が少ない。
おまけに今日は晴天。気温も湿度も高く、灼熱地獄だった。
「あっつい…。」
「まったく、誰がこんなに暑くしていいって言ったのかしらね…。」
ぐずぐずと文句を言いながら、ユリとマミコは東京駅を目指していた。
拭いても拭いても吹き出てくる汗は、面倒なのでそのまま流しておく事にした。
裁判所から出て暫く歩くと、少し大きめの交差点に出る。真っ直ぐ行けば東京駅、右に曲がると検察庁だ。
ふと右を見ると、先程出て行ったばかりの了と三笠の後姿を見付けた。了は流石の暑さにジャケットを脱ぎ、脇に抱えている。
「ねえ、カブラギさんって言ったっけ、あの検事さん。」
マミコがユリを覗き込んだ。
「うん。そう。”カブラギ　トオル”。」
「年齢は？」
「え？　…うんと…。」
そういえば、結局きちんとした年齢は聞かなかった気がする。
「多分、八つか九つくらい違うはずよ。七年前に警察官になって、その前に大学院に行ってるって言ってたから、普通に計算すると、今三三歳くらい…？」
「三三歳かぁ…。」
「…なんで？」
「え？　だってー。カブラギって、そうある名前じゃないじゃない？
って事は、法務大臣の蕪木一穂と親類か何かでしょ？
あの一族は法曹界じゃ幅広く活躍してるらしいし、うまく行けば、玉の輿でしょ。」

「…は？」
「だからぁ。
狙わないの？」
ユリの理解力の乏しさ、というよりも、無欲な反応に、マミコが単刀直入に言う。
「何言ってんのよ！」
ユリが叱った。
そういうのでは、ない。
「そういうんじゃないわよ。ただの知り合い！」
「うそだー。
あの人、三笠とか言ったっけ、あの女の人とユリの態度、全然違ったもん。」
「何見てたのよ。おんなじだったでしょ。」
「まったくー。
ユリは鈍感すぎるわよ。」
マミコは了とユリが知り合った経緯を知らない。ユリの両親の事故の事は知っているが、この件に了が関わっている事も、当然だが、知らない。
「そりゃ、同僚と他人じゃ態度も変えるわよ…。」
「む…。そうかなぁ…。」
「そうよ。下らない事言ってないの。」
「もー。」
マミコが膨れた。
了が未だにユリに肩入れしている事は、あのロケットが証明したようなものだ。
ユリも理解をしていないわけではない。が、そこにあるのは明らかに、愛だの恋だのというものではないと思う。
同情に近い、と思っている。
だが、親身になってくれている事には変わりなく、特別ネガティブな印象は持たない。寧ろ有り難く、了の関与を受け入れた。

だから、ユリにとっても大事な人ではあるが、やはりそういう感情は絡まない。
ぼんやり考え事をしつつ、マミコと下らない話をしつつ、気付けば東京駅に着いていた。遠いようで、近い。
昼過ぎという時間故、お目当ての店はそれなりに混み合っていたが、二組ほど待てば席が空くと言うので待つ事にした。
待合用の椅子に座り、一息吐く。暑さのためかすっかり疲れていて、マミコも無言だ。ふと横に座っているサラリーマンを見る。手に持っている新聞の見出しが気になったのだ。
『中東シリング王国　王政崩壊寸前か』
あれから半年。事件直後に了から聞いた話に因れば、”男爵”の目的は王妃である自分の母の死の真相を探り、その遺品を収拾する事だった。その余波として、シリング王家の信用も大きく崩れ、今シリング国内は小さなデモや紛争が絶えないと言う。
自分が関わっていた盗難未遂事件の延長上に、一国の崩壊が繋がっていようとは、誰が予想するものか。そう拓き直る一方で、とてつもない罪悪感を感じる。
ユリの知る真相とはかけ離れ、シリング王国の崩壊は反政府派によるデモが発端とされていた。続く国内治安の悪さや、格差に対する鬱憤が溢れたのだと言う解説を多く聞いた。そして、シリング王国のニュースに”紅い泪”が取り上げられた事も殆どなかった。みな、崩壊の真相は知らないのだ。
単純に関連付けていないだけなのか、どこかで情報制限がかかっているのかは判らない。
「…ユリ聞いてる？」
「えっ？」
突然マミコが耳元で声をかけたので、ユリが飛び上がった。
「あ、ごめん。ぼうっとしてた。」
「もー。さっきすっごいカッコイイ人いたのにー。」
むくれるマミコに、ユリが呆れた。

「マミコ、そんなんばっかね…。」
「いいじゃなーい。うら若き乙女よ私は！」
「乙女が肉か。」
「いいじゃない、肉！　肉も必要よ！」
拳を作って堂々力説するマミコに、ユリが笑った。マミコに、様子がおかしいのを悟られていたのだろう。彼女は妙に、人の心を読むのが巧いのだ。
ケラケラと二人で笑っていると、目の前で二人の人陰が「あ」と言って立ち止まった。
マミコと同時に見上げると、また了がいた。ジャケットは置いてきたのだろうが、変わらずスーツ姿の了は後ろに、今度は三笠ではない、若い男性を連れていた。
「…。」
「…。」
ユリと了は複雑な表情を浮かべてお互いを見た。
マミコと、了の同伴の男性は、きょとんとしている。
「なんでこう…。」
了が呆れて溜め息混じりに言うと、ユリがばっと表情を変えて突っかかった。
「あ、何か文句言うつもりね。罰として奢って貰うわよ。」
「何の罰だ。」
「私に文句を言う罰よ！」
「お前は何様だ。」
「お待ちの芳生様ー。」
言い争っていると、店の店員がユリとマミコを見ながら呼んだ。
すると、何かを思いついたマミコがユリと了の間に割り込み、了を見上げて「お昼ですか？」と訊ねた。
「…ええ…。」
いきなりの問いに、了が少し身を引くと、マミコはにやりと笑って店員に向かい、

「あの、四人になっちゃったんですけど。」
と言った。
店員はにこりと笑ったまま、「大丈夫ですよ。四名様でよろしいですか？」と言った。
「はい。さ、行きましょ。カブラギさんたちも！」
マミコはそう言って、さっさと店に入ってしまった。
ユリと了は呆然とマミコを見、その後ろで、事態を把握した同伴男性は腹を抱えて笑った。
致し方なく店に入る。マミコは既に席についていた。気を遣ったのか、下座に座ってこちらを振り返り、手を振っている。
ユリが奥の席を指差し「そっちでいいよ」と言うと、「いいのいいの」と言ってユリを隣に座らせた。
続いてやはり仕方なく着いて来た了と男性は、了がユリの前、男性がマミコの前に座った。
男性は座るなり、「蕪木さんの負けですね」と言った。この言葉で、ユリとマミコは了と男性の上下関係を悟った。
「あ、私、ユリの友人の加藤真美子です。初めまして。」
マミコがしをらしく挨拶をすると、男性が人懐こい笑顔を浮かべて身を乗り出した。
「初めまして。ボク、渡部隆平（わたなべりゅうへい）と言います。こっちは上司の蕪木了です。」
「よろしくお願いしますね。
渡部さんも、蕪木さんと同じ…、検事、さんなんですか？」
マミコが”検事”だけを小さな声で言った。
検事や裁判官などは、良く、外部者との接触を好まないと聞くからだ。
「ええ。ボクは補佐ですけど。
しかし、”ユリちゃん”ときちんと会えるとは思わなかったなぁ。」
渡部はそう言って、ユリを見た。

了と睨み合っていたユリは、「え？」と驚いて渡部を見る。
「いや、だってカブ…。」
「渡部。」
何か話そうとした隆平の声を、了が遮った。了は渡部をちらりと睨み、腕組をしている。
「余計な事は言わなくていい。」
「えー、気になりますよ！」
「そうでしょうとも！　蕪木さんはほんと照れ屋なんだから！」
どうやらマミコと渡部はノリが同じな様で、口止めした了に二人で食ってかかった。
了も、渡部だけなら未だしも、マミコもとあっては強く出られず、たじろぐ。
そこへ、店員がオーダーを取りに来た。
「ご注文はお決まりですか？」
正直、誰もメニューを見ていなかった。が、了と渡部は手馴れた様子でさっさとランチを注文してしまう。ユリとマミコは顔を見合わせ、食べる予定のものはどれだっけと言いながら何とか注文を終えた。
忘れていたが、ここへはきちんと目当てを持って来たのだった。
店員が戻ると、メニューを片付けながら、
「で、蕪木さんが何なんですか？」
と、マミコが調子を戻して隆平を見る。
「そうそう。
蕪木さんが一日一回は必ず”ユリちゃん”の名前を…。」
「渡部！」
「いいじゃないですかー。」
さらに止めた了に、渡部が眉を顰めた。ここぞとばかりに弄っている様子だ。
「あ、三笠さんには言いませんよ。怒られちゃいますから。」
渡部が何の衒いもなく言った言葉に、ユリがちらりと反応した。

三笠。
出会ったばかりなのに、何故か異様に気になった。
「三笠さんって、さっき蕪木さんと一緒にいた女の人ですよね？
あの人綺麗ですね。蕪木さんの秘書さんなんでしょう？」
マミコが言うと、渡部が頷いた。
「そうですよ。
三笠さんは蕪木さんの幼馴染で、蕪木さんを追って司法試験を現役合格したような人なんですよ。」
「幼馴染…。」
「蕪木さんの事なら何でも知ってると言ってもいいくらいですね。
蕪木さんが何も言わなくても、三笠さんには解りますから。」
「へぇ…。オトナの恋愛って感じですねぇ。」
マミコが適当に頷く。ユリへの傾倒を期待していただけに、少し腹が立ったのもあった。
「…恋愛なんすかね？　蕪木さんは三笠さんに興味ないっぽいですけど。
ね、蕪木さん？」
「うるさいよ…。」
呆れる了に、渡部が頬杖を突いて説教を始める。
「駄目ですよ蕪木さん。若い女の子はこういう話大好きなんだから。
そんな事だからおじさんとか言われちゃうんですよ。」
最近おじさんと呼ばれる事があったらしい。
「おじさんなんですか？」
マミコが笑いながら訊ねると、了が苦笑した。
「おじさんだね。キミらに比べれば。」
「おいくつなんですか？」
「三三。」
「三三歳じゃおじさんじゃないですよ。ねぇ、ユリ？」
「ん？　ああ、うん。ね。」
不意に同意を求められ、ユリが適当に返事を返した。三人の話を

殆ど聞いていなかったユリは、ぼうっとしたまま口に水を含んだ。
水は冷たくて、体中を冷やしながら胃へ流れ込んでいった。
暑さのせいでぼうっとしていたのか、自分でも判らなかったが、いくらか頭がはっきりとした。それを見て取ったのか、了がユリを見て言った。
「匠さんに、言われて来たのか？」
「ん？」
一瞬きょとんとして、すぐに意味を理解した。
「ああ、うん、そう。どうしても行けって。
理由を言わないからずっと拒否してたんだけど。」
マミコが同意したから、というのは伏せた。了を弄るのに飽きたのか、マミコと渡部は二人で盛り上がっているようなので、そのままにして置きたかった。
「そうか。」
「何でかは、どうせ了も知ってるんでしょ？」
「…ああ。ここじゃ答えられないけどな。」
「”ここ”じゃ？」
「近々連絡するって言ったろ？　その話があったんだ。」
なるほど。と言う事は、匠にあの箱を渡す序でに、その話もしようと思っていたのだろう。先にユリが来たので、渡した。ただ、話については匠を交えなければならない、という事のようだ。
いずれにしても、また自分が知らない間に何かに巻き込まれて、という事ではなさそうだ。
「そう。いずれ聞けるのね。ならいいわ。」
ユリが納得すると、了は少しだけ神妙な顔をして、小さな声で呟いた。
「…それまで…。」
「ん？」
了に顔を近づけて覗き込むと、了はユリをじっと見つめて、
「それまでは、気をつけてくれ。」

と言った。
何に？とユリが首を傾げると、そのタイミングで料理が運ばれてきた。
「お待たせ致しました。ランチのＡとＢでございます。」
そう言って、店員が了と渡部の前に料理を置き、足早に去って行く。
「どうぞ、冷めない内に。」
とマミコが促すが、二人は揃うまで待つと言って箸をつけなかった。が、ユリとマミコの分もすぐに来た。
「お待たせ致しました。ご注文は以上でお揃いでしょうか？」
「はい。」
マミコが頷くと、店員は「ごゆっくり」と言って伝票を置き、去った。
「いただきます。」
「いただきまーす。」
マミコと渡部が揃って挨拶をして、食事が始まった。
「お二人はよくここに来るんですか？」
「たまーに。あまりゆっくり食事の時間は取れないので、いつも各自バラバラに取ってるんですけどね。今日は蕪木さんとボクの予定が合ったので、ここまで来ました。
普段は、職場の辺りで済ませてますよ。」
「へえ。じゃあ、帝都ホテルのロビーカフェとか。」
「ああ、そうですね。空いていれば。
あそこは、ホラ、優雅な奥様の憩いの場なので、席が中々空かないんですよね。」
そう言って渡部が笑った。
「お二人も、ここへは良く来るの？」
渡部が逆に尋ねると、マミコが首を振った。
「とんでもない。こんな高いところ。
普段は遊ぶ場所もこの辺りじゃなくて、都の端まで行っちゃうん

です。その方が色々あるし、安いし。」
「ね」とユリを見る。
「今日はこのお店に行こうって決めてここに来たんですよ。」
腹に物を入れたからか、若干余裕の戻って来たユリが答えた。
「お店一気に増えたので、まだ周ってないところいっぱいあって。」
東京駅は数年前から大改修を行っていて、レストランからアパレルショップ、土産売り場まで幅広く店が充実した。その割りに、それなりの金額を出さねばならない場所も多々あり、気軽に周るには少し敷居が高い。
なので、マミコと相談し、何かしか理由をつけて少しずつ周る事にしたのだった。
その後、ユリとマミコの新しい物探索の話でそれなりに盛り上がり、食事も終盤に差し掛かった辺りで、渡部が満足げに言った。
「やっぱり女の子だなー。流行り物とか新しい物とか好きなところ。」
マミコがふふと笑う。
「三笠さんとは大分違うし。」
「そうなんですか？」
「三笠さんはもう、達観しちゃってるというか…。
気に入ったものしか手にしない、みたいな安定期に入っちゃってますよね、蕪木さん。」
「ん？」
一足早く食事を終え、コーヒーを啜っていた了に、隆平が同意を求めた。了はまるで興味なしという顔をして、「知らん」と答えた。食事を始めて、初めての会話だった。
「チームメイトの観察くらいしましょうよ、蕪木さん。」
渡部が呆れて突っ込む。
「ボクだって蕪木さんの趣味くらい知ってますよ。」
「蕪木さんの趣味って、何ですか？」
マミコが興味深々に問うと、了が素っ気無く「仕事だね」と答え

る。
「またまたぁ。
ちゃんと趣味あるじゃないですか。
蕪木さんはね、馬に乗るんですよ。」
「へぇ！　カッコイイ！　乗馬するんですか！？」
マミコの感嘆に答えない了の変わりに、渡部が自慢話をする。
「そうなんですよ。この人、馬の事となると夢中になるんです。ボクも初めて見た時、びっくりしましたもん。
ちなみに、小笠原流の免許持ってるんですよ。」
「持ってないよ。なんだよ免許って…。」
「あれ？　免許制じゃないんですか？」
「違うよ。」
「小笠原流？」
「『弓術・馬術・礼法・軍陣故実』の流派ですよ。茶道にもありますよね。」
「あ、鎌倉とかでやってる『流鏑馬』の？」
「そそ。馬に乗って弓を射るやつですよ。」
「すごい、かっこいいじゃないですか！　自分の馬とか持ってるんですか？」
「持ってるんですか？」
マミコの問いに渡部が乗っかった。無粋にぶっきら棒を通すと地雷を踏みそうだったので、了は仕方なしと答える。
「一応いるけど。厩舎に預けて、時間があれば乗りに行ってる。
乗馬クラブを経営してる厩舎だから、馬が足りなくなったら、会員が乗ったりしてるみたいだけどね。滅多には乗らせないとは言ってたけど。」
「ええー！　馬持ってるなんて！
乗馬と言えば、言う事聞かないと鞭で叩くんでしょう？」
「鞭は使うけど、大抵の馬は鞭を見せるだけで言う事聞くよ。
馬は痛覚が鈍いから、叩いても痛みを感じる訳じゃないし、あれ

は気付け道具だから。言う事聞かせるためのものじゃなくて、だれてる馬に今から命令するって合図をするための道具。」
「すごいすごい」とはしゃぐマミコの隣で、ユリは呆然とする。
ただの生意気な検事ではなかった事に驚きだった。そんな特技を持っていたとは…。
「って事は、弓も？」
「一応は。」
「すごーい。生きてる世界が違う…。」
マミコの言うとおりだった。
あまりに違いすぎだ。
その後、結局了の趣味の話を、半ば強引にマミコと渡部が穿り返し、気付けば店に二時間ほど居座っていた。
了が合図に腕時計を見た。
「あ、ごめんなさい。
お仕事中なんですよね。
そろそろ出ましょうか。」
そうマミコが言うと、四人は「そうですね」と同時に立ち上がった。
入り口に近いマミコが真っ先にレジに向かい、ユリもマミコの後ろで会計に立ち会った。
「一三三〇〇円頂戴します。」
と店員が金額を言い、マミコとユリが財布に指を入れた時、ユリの後ろから手が伸び、銀色のマネートレイに黒い色のカードがカランと音を立てて落ちた。
マミコとユリが驚いて振り向くと、了が涼しい顔で店員を見ていた。
店員も「カードお預かりいたします」とさらりと言い、会計を始めてしまう。
「払いますよ、自分たちの分…。」
マミコが言うと、了は唇にそっと人差し指を当てて、

「いいよ。
でも内緒ね。
俺らは、誰かに奢るとか奢られるとか、思わぬところで揚げ足になっちゃうから。」
読み取りの終わったカードを店員が差し出した。了はそれを財布に戻し、さっさと店を出た。
レシートを受け取ってマミコとユリが追うと、一足先に店を出ていた隆平が、了ににんまりと笑って「ご馳走様でした」と言った。
「お前はあとで払え。」
眉間に皺を寄せて言う了に、ユリが歩み寄る。マミコも申し訳なさそうにユリの後ろに立っていた。元はと言えば、マミコが誘った訳なので、後ろめたさは半端がない。
「それじゃ尚更、払わなきゃ駄目じゃないの…？」
「ん？」
「いけないんでしょ？」
「いけない訳じゃないよ。何かあった時に、ムカツク事言われるだけ。」
「でも…。」
中々退かないマミコとユリに、隆平が笑ったまま、
「女の子は素直に奢られとくといいよ。」
と言い、了も無言で頷いた。
マミコとユリは暫し顔を見合わせた後、深々と頭を下げ、「ご馳走様でした」と礼を言った。
「どこか寄るのか？」
頭を上げたユリに、了が問うた。
「うん。ちょっと買い物してく。」
「そうか。」
「じゃあ、ボクたちはここで。」
渡部が片手を挙げた。
「はい、本当に有難うございました。」

もう一度二人で頭を下げると、今度は了も少しだけ笑って、「じゃあな」と言い、渡部とともに立ち去った。
二人を見送り、マミコとユリは同時に溜め息を吐いた。
マミコは満足感から、ユリは緊張感からだった。溜め息の出所が違うので、溜め息を吐いてから立ち直るまでに誤差が出た。
先に気分を切り替えたマミコがユリを見ると、ユリは真顔で、了の消えた方を見つめていた。
「いい人じゃない。」
「ん？　うん。いい人だよ。」
ユリは身動ぎもせず、答えた。いい人。優しい人。
了を語る言葉なら、山程知っている。つい三か月前だって…と、浸ろうとしたユリの耳に、
「あと、いい匂いしたよ？」
と言う少々その場、というかユリの内心にそぐわない言葉が聞こえた。
「は？」
がっかりとして、眉を顰めてマミコを見ると、マミコがにやけた。
「いい匂いしたってば。」
「何言ってんのよ。」
「うんとね…。
柑橘系とハニーと、ちょっとローズも入ってたかも。」
それは…。
ユリも知っている香りだ。
そう言えば、事件後に聞いた話で、バークレイが付けていた香水と同じものを作ったと言っていた気がする。
「多分、香水使ってる、と思うよ。」
「お洒落さんなのね。
あのスーツも、『ａｔｅｌｉｅｒ　ｓｕｂ』の新作だもん。」
「……。」
そんな観察をしていたのかと、ユリは呆れた。

「よくわかるわね…。」
「わかるわよー！　女の子だもん！」
マミコが威張った。
「ユリちょっと老けた？」
突然の言葉に、ユリがむっとした。
「え！？」
「老けたよ。食事の間に。」
面と向かって言われると、腹が立つより段々不安になって来る。
了と会った事で、少し気が滅入ったのは確かだ。
「マッサージいこっ！」
そう言うと、マミコはユリを引っ張って、東京駅の駅ビルへ走り込んだ。

再会◆3

それから二日後。

その日はカナエが久しぶりに友人と食事をするというので留守をしていて、匠も事務所の者も、事務員を除いて依頼の調査で外出してしまったので、二人の事務員に事務所を預け、ユリは自室で一人ぼうっとしていた。

三ヶ月前の一件から、匠はたまに調査に同行させてくれたり、事務仕事なども任せてくれるようになっていたが、正式に事務所に所属する許可はくれず、ユリは宙ぶらりんの立場のまま、事務所を出入りしていた。

探偵職では仕事があれば金は貰えたが、それ以外で実入りがないため、時折短期のバイトをしたりもしていたが、匠の事務所で働く事を諦めきれず、特に雇用情報を漁る事もしなかった。

カナエは、その辺りは匠に任せていたし、匠は匠で何も言わなかった。ユリも必要分の生活費は家に入れていたし、中途半端な立場こそあれ、後ろめたい気持ちは持たなかった。

ただ、瞬間的には焦りを覚える事もあり、司法の参考書や、大学在学中に学んだ経営学について勉強もしていた。

時間のあるときは、参考書を読み耽ったり、図書館や本屋に篭ったりもしている。

だが、今日は何故かそれらの事もやる気にならず、ユリは自宅をうろうろと彷徨った後、リビングのソファに寝転がって、無心で天井を眺めた。

そこへ、電話が鳴った。

居留守でも使おうと思ったが、カナエや匠だったらと思い、のそのそと起き上がり、テーブルの上に置かれた子機を手に取った。

「もしもし。」

日頃から、電話では自ら名乗るなと言われていたので、その通り

にする。
すると、「蕪木と申します」と相手が名乗った。
何の事はない、了であった。
「ああ、こんにちは。この間は有難う。ご馳走様。」
即座に挨拶と、奢ってもらった礼を言うと、了は一瞬黙った後、
「うはは」と妙な声で笑った。
「…？」
『すみません。笑ってしまった。
ユリさん…かな？』
さん付けで呼ばれ、居心地の悪さと疑問で戸惑う。
「…え？　え？」
『ああ、申し訳ない。
多分、了と勘違いをしているんだな。
僕、了の兄です。』
ユリが呆然となった。そして、途端に顔が熱くなる。
「あっ、ごっ、ごめんなさい！
てっきり、了と勘違いを…あっ、了”さん”ですね、ごめんなさい…。」
『いやいや。よく、声が似てるから間違えられるんですよ。お気になさらず。
で…、匠さんはいらっしゃいますか？』
「あの、ごめんなさい。今、仕事で外出をしています。
戻りの予定は、わからないって言っていました。」
『じゃあ、折り返し連絡を下さい。
ちょっと急ぎなので、必ず連絡くださいと伝えてください。
夜、何時でも構いません。』
「わかりました。」
『ごめんね。よろしくお願いします。
それじゃ。』
そう言って、了の兄は電話を切った。

ユリは切れた子機を呆けた顔で眺めながら、ソファに崩れるように座った。
兄…。
兄がいたのか。
相変わらず了について何も知らない。
家族は、兄の他にいるのだろうか。友人は。親戚は。
三か月前、彼女などいないなどと言ってはいたが、もしかすると、その後の間に結婚したかも知れない。既に子供だっているかも知れない。有り得ない話でもない。
何も知らないで、マミコとふざけ合ってしまった。
そう思うと、何だかとても恥ずかしくなる。
「ただいまー。」
玄関が開いて、カナエの声がした。
「おかえり。」
と蚊の鳴く様な声で応えて、しかし視線は子機から外せずにいた。
その様子に、リビングへ戻ったカナエが驚く。
「どうしたの？」
「うん…？」
視線をカナエに向けるが、視点が定まらない。
「ううん。早かったね…。」
「そうなのよ。行ったお店が凄く混んでて。店員さんに遠回しに追い出されちゃった。
その後、お友達の子供が熱出して学校から連絡来ちゃって。途中で解散したのよ。
ユリ、ご飯は？」
訊ねられて時計を見ると、午後の二時になろうというところだった。
「まだ…。
食べてない。」
「じゃあ、何か作るね。」

そう言いながら、カナエがキッチンへ入って行った。付いて行くと、今まで目に入らなかったが、何日分かと呆れるほどの食料品を詰め込んだ買い物袋をどさりと置いて、カナエが整理を始める。
「…叔父さん、いつ帰る？」
「ん？　どうして？」
「今、叔父さん宛てに電話があったの。
”蕪木さん”ってヒトから…。」
「あら、蕪木さんって、あの蕪木　了さん？」
「ううん。お兄さんだって…。」
気が抜けた様子で呆然と立ったまま言うユリに首を傾げつつ、”兄”と聞いたカナエがにこりと笑った。
「ああ、きっと駆（かける）さんね。」
「”カケル”さん？」
「うん。蕪木さん、お兄さんが四人いるのよ。みんな法律関係のお仕事をなさってて。駆さんは、弁護士さんなのよ。
この間、偶然…かどうかは判らないけど、うちの事務所にね、依頼人の調査をお願いしたいって連絡を下さったの。
あんまり大きな声で言うのもどうかと思うけど、今日もその調査で出かけてるのよ、匠さん。」
そうなのか…。
「で？　駆さん、何て？」
「ああ、うん。
急いで連絡取りたいから、夜何時でもいいから折り返し下さいって。」
「匠さんの携帯にかけた？」
「ううん、まだ。
今かかって来たばっかりだったから…。」
「あら、じゃあ、かけてあげてくれる？
メールでもいいけど。」
「…うん…。」

ぼんやりとしたまま、ユリは自分の携帯を取り出し、匠にメールを送った。思いの外、返事はすぐに来た。
『わかったよ、ありがとう。』
簡単な返事だが、これで用事も終わった。ユリはまだ手に持っていた子機をやっと手放し、キッチンに戻る。
「ねえ、カナエちゃん。」
「ん？」
やっと食材の半分の整理を終えたカナエが、こちらを振り向く事もなく返事をした。
了の事を聞こう。そうは思ったが、いざカナエに呼びかけると、その後どう訪ねていいのか解らなくなった。
「…ごめん。何でもない…。」
了の事をどのくらい知っているかとか、家族構成とか、そんな事をカナエに訊ねるのもどうかと思った。
「ご飯、いいや。夜まで待てる。」
「そう？　ならいいけど。
あ、そうだ。事務所にお菓子持ってってくれる？」
「うん。」
そろそろ三時の茶の時間だった。
カナエに手渡された菓子は、帝都ホテルのブリオッシュである。
「あ、いいなー…。」
「ユリの分はないわよ。」
「ちぇ…。」
言いながら、事務所へ向かった。
事務所は家の玄関を出て、階段を下りればすぐだ。
トントンと小気味好い音を立てて階段を下りると、事務所の前に一人の男がこちらに背を向けて立っていた。
「あ…。」
若干の違和感はあるが、了に似ていた。違和感は、スーツの所為かも知れなかった。妙に年寄りくさい灰色だったのだ。食事をした

時に着ていたスーツの印象と、大分異なる。
「…何してんの、了？」
声をかけると、男は肩を小さくびくつかせ、ゆっくりとユリを見た。
その顔に、ユリは今日二度目のパニックを起こす。
了ではなかったのだ。
「あっ、あっ、ごめんなさい！　人違いしました！」
慌てるユリを見て、見知らぬ男は面白いものを見るように肩を大きく揺らして笑った。
聞き覚えのある声だった。
「あ…。」
「こんにちは。ユリさん、だね？」
「はいっ。
あの…。もしかして…。」
多分、先ほどの電話の声だ。
「さっきは突然電話してしまって、驚かせてしまって申し訳なかったね。
兄の蕪木　駆と言います。」
そう言って駆が手を差し出した。おずおずユリが握り返すと、駆はぎゅっとユリの手を握った。了に似た大きな手だが、了の手のほうが冷たい記憶だ。
「こちらこそ、何度もすみません…。」
「匠さんに御用があってね。」
「え、叔父に…？　あ、でも今外出中じゃ…。」
「そうなの？　今し方、事務所にいるからって連絡を貰ったんだが…。」
駆がそう言っているところで、事務所の扉が開いた。
中から、きょとんとした表情で、匠が顔を覗かせた。
「おや、何をしているのかと思えば。ユリもいたのか。」
「う、うん…。」

電話で人違いをした無礼が匠の耳に入っているかと思い、ユリが肩を竦めた。が、匠は特に何も知らないようで、駆を事務所へ招き入れ、ユリに茶を出すよう言い付けた。
ユリが冷たい麦茶を入れて匠の使う所長室のドアを叩くと、奥から「どうぞ」と軽やかな匠の返事がした。
ドアを開けると、革張りのソファに駆、その前に、自身の事務机に腰掛ける匠の姿があった。
客を目の前に…、と呆れながら茶を出し、引き上げようとすると、駆がユリを呼び止めた。
「ユリさん。」
「はい。」
未だ体裁悪く遠慮がちに振り向くと、駆はにっこりと笑って、
「ぼちぼちお邪魔しますんで、よろしくね。
ユリちゃん。」
と言った。
強張った肩が、”ちゃん”付けで解れた。
ユリは頭を深く下げて挨拶をした後、家に戻った。
カナエに駆が来ていると告げると、カナエは大した事でもないように「そう」とだけ言って、夕食の支度をし始めた。確かに依頼人なのだから、事務所に来ているのは何ら不思議な事ではないが。
「ちゃんとご挨拶した？」
「した。握手までしたわ…。」
「そう。」
カナエは、声はかけるが夕飯の支度に夢中なようで、会話も途切れがちだった。
手伝おうかと訊ねるが、今日はいいというので、ユリは自室に戻る事にした。
部屋に入り、ベッドに倒れ込む。
ふと了を思い出す。
近々連絡をするからと言われて、まだ二日しか経っていないが、

もう大分経ってしまった気がした。
そう言えばあの日に、了から渡された小さな箱を匠に渡すと、匠は一瞬神妙な顔をした後、事務所に篭ってしまった。
あの箱も、一体何だったのか…。
手をごそごそと動かすと、硬い物が触れた。見ると、携帯電話だった。
あの後、マミコは半年間の住み込みのバイトをするのだと言ってカナダへ行ってしまい、暫く外で遊ぶ事も、携帯電話に連絡が入る事もなさそうだった。
だから、この二日と言うもの、殆ど携帯電話を見ていなかった。
今日も鳴る事はないだろう。
そう思って手に取った瞬間、着信音が鳴った。
思わず驚く。
そして慌ててディスプレイを見、さらに驚く。
了だ。
気になりはしていたが用事もなかったのですっかり忘れていた。
連絡先は結局交換したのだった。
「……。」
何故か、出るのを躊躇う。
着信メロディとともにバイブレーションで端末が震える。すでに五回目の振動を終え、六、七…と規則的に震える。
切れない。
ユリは一つだけ溜め息を吐いて、通話ボタンを押した。
「……。」
『……。』
無言で数秒、身構える。
やがて、
『何か言え。』
と、了の不機嫌な声が聞こえた。
「そっちからかけて来たんでしょうが…。」

呆れた。
が、このやり取りも、久しぶりとなると程なく心地好い。
『あ、箱、悪かったな。有難う。』
「うん。
ああ、そういえば…。あ、これ言っていいのかしら…。
いいわよね、別に…。」
『ん？』
「了のお兄さんって人が、叔父さんを訊ねて来たわ。」
『ああ。駆だろ？』
「うん…って、呼び捨て…？」
『本人を呼び捨てにはしないよ。
仕事を頼まれてくれる人を探してたから、オレが紹介したの。』
「あ、そうなんだ？
了とそっくりね。間違えちゃった。」
『…。』
照れくさかったのか何なのか、了が黙った。
そこで、ユリははたと思う。こんな世間話をするために了が電話などかけて来る訳がない、と。
「で、どうしたの？」
ユリが問うと、了が不可解に口篭った。
『…ああ、いや…。』
「？」
『……何となく。』
「は？」
…どういう風の吹き回しか。
「何？　そういう人だったっけ…？」
『失礼な。』
この反応で、ユリには何となく解った。
口では何事もないように言うが、恐らく何かしら理由があって電話をかけて来たのだろう。

その理由は解らないが、言わないと言う事は、”言えない”という状況である確率が高い。
「ま、いいわ。
職場近いんだから、たまにはうち来たら？」
早々に切り替えてユリが言うと、了がふふと小さく笑った後、黙り込んだ。
そしてゆっくりと、
『多分、近いうちに行くと思う。』
と、少し暗い声で呟いた。
「そう…。」
『ま、元気そうなんで安心した。』
「へ？」
突如言われたので何事かと訊ねようとすると、一息先に了が
『あ、すまん、呼ばれた。
んじゃ、また今度。』
「え、あ、うん。」
と、挨拶もそこそこに電話を切ってしまった。
夕方と言う時間帯、平日でもあるし、仕事中だったのだろうから仕方がないが、何か煮え切らない気持ちで、ユリは切れた携帯電話を見た。
”元気そうなんで”…。
つい二日前、会ったばかりではないか。
その時、元気がない素振りを見せたつもりはない。
何なのだろう…。
疑問に思えば思う程、確信が湧いて来る。
了が、動いている…。

再会◆4

三ヶ月前の事を思い返しながら、ゴロゴロとベッドの上を転がる。
あのあと、クレアは月に一、二通ほど手紙をくれる。ユリもクレアも機械は得意ではないのと、やはり直筆からのほうが気持ちが伝わるのだ。相手の様子も、字を見れば解る。英語が出来ないユリに、日本語を勉強して来たクレアが合わせてくれるからこそ出来るやり取りでもあった。
そういえば、そろそろクレアからの便りが来て良い頃だが、少し間が空いていた。
まぁ、必ず手紙を寄越さなければならないという事でもないし、クレアもあれから色々と厄介事に巻き込まれそうになったりと忙しそうだったので、手紙が遅れている事も気楽に構えていた。
「ユリー！　ごはん！」
夕飯に呼ぶカナエの声がした。
「はーい！」
返事をして、起き上がる。
天井ばかり見ていたので気が付かなかったが、部屋の中はすっかり暗くなっていた。
ユリはクッションに躓きながら部屋を出、リビングへ降りた。
ダイニングテーブルに、二人分の食事しか乗っていないのが見えた。
「あれ？　叔父さん、ご飯食べないの？」
「うん。蕪木…駆さんとお食事に行くんですって。」
「ふぅん…。」
生返事をし、キッチンを覗くと、目の前に米が盛られた茶碗が突き出された。
「はい。ユリの。」
「ありがと。」

茶碗を受け取り、カナエの分を持ってテーブルに戻る。茶を持ったカナエが、キッチンの電気を消して、席に着いた。
「食べましょ。」
「いただきまーす。」
暫く、無言で目の前の食事を咀嚼する。
食べながら、思考が、ぼんやりと了の事に移行していく。
何が起きるのだろう。
否、既に動いていると言う事は、何かが起きていると見た方がいいかも知れない。
無意識に眉間に皺を寄せたユリを見て、カナエがユリを覗き込んだ。
「味、ヘン？」
「えっ！？」
「ヘンな顔したから。」
「あ、ううん、いつも通り。大丈夫、美味しい。」
「そう。」
有らぬ心配をさせてしまったようだ。
ユリは考え事を止めた。
「ねぇ、カナエちゃん。」
「ん？」
「私、何の仕事が向いてると思う？」
「あんたは探偵以外向かないでしょうね。」
「…え…。」
「何を目指すのも構わないし、応援は出来るけど。
でも、あんたは公務員も、スーパーのパートも、何かのインストラクターも、向かないわね。」
「どれもやった事ないけど…。」
「やらなくて正解じゃないの？」
「どうして？」
「だって、そうやって育ってないもの。あんたほど自由に育てられ

た子も中々いないわよ。」
言われなくても、自由に育てて貰った事くらいは理解している。
「自由に育てられちゃったら、探偵にしかなれないの？」
「違うわよ。
あんたの場合は探偵しか出来ないのよ。」
「…？」
ユリが首を傾げると、カナエがふと笑った。
「だって、あんた探偵しか見た事ないじゃない。
そりゃ、了さんと会って検事さんがどういうお仕事かも知っただろうし、美術館の館長さんとか、大使さんとか、あとは…、ああ、そう、マミちゃんみたいに海外で仕事をする選択肢がある事も知ってるし、仕事自体は知ってるでしょうよ。
でも、そういうのを見ても、どうとも思わなかったでしょ？」
「…うん…。」
思いはしなかったが、それは、匠と一緒に仕事がしたかったからだ。あの時点で、ユリは探偵をやるつもりでいた。他の事など考えなかったからだ。
が、カナエはそんな気持ちを見透かしたように、ユリを見る。
「天職って、やってみて気付くって言うけど、私は違うと思うわ。
何も意識しなくても出来る仕事。それが天職だもの。
あんたは目敏いし、妙に勘も鋭いし、どんな仕事を見ても揺れ動かなかったし。
匠さんも、美術館の一件では、ユリは自然に体が動いてるみたいだって言ってたわ。
会社勤めするような育ち方はしてないし、ツメが甘い訳でもないし。でも型に填る環境では生きていけない。
だから、きっと、ユリは探偵が天職なのよ。」
そこまで聞いて、ユリが箸を置いた。
「…じゃあ、何で叔父さん、仕事させてくれないの？」
「仕事、ちゃんとさせてるじゃない。」

「…。」
「いきなり外回りとか、外部調査させられるほど探偵だって甘い商売じゃないわよ。
顔が広くなきゃ出来ない事もあるしね。
ユリにはまず、事務所に来るお客さんの応対をして貰って、ユリという人間がいる事を覚えて貰わないと。
探偵なんて、信用商売だからね。
一見さんもいるけど、大抵は同じ依頼主から繰り返し仕事を貰うのがうちの現状だし。」
「…了のお兄さんみたいな？」
「そう。うちはほら、高遠さんとのご縁もあって、調査室からの依頼も多いのよ。匠さん以外はそんな調査だと知らずに調べ周ってるけどね。
駆さんは今回が初めてだけど、弁護士さんからのご依頼もそれなりにあるのよ。」
「…そう、なんだ…。」
納得したらしたで、はっとする。
「私…、駆さんと了の事間違えたりしてるけど…。」
肩を竦めて言うと、カナエが大笑いした。
「そういうのは信用の有無じゃなくて、ただの早とちりでしょ。
それに、依頼人の事、別の依頼人に話してる訳でもないし、そこまで厳しくないわよ。
まぁ、早とちりは治すに越した事ないから、治して欲しいけど。」
「うぅ…。」
散々見に覚えがあるのでユリが小さくなると、さっさと食べ終わったカナエが自分の茶碗を重ね始めた。
「食べるの早くない？」
「ユリが遅いだけよ。
…ユリ、ちょっと痩せたんじゃないの？」
「…そんな事ないと思うけど…。」

そう言いながら、ユリは自分の体を見回すと、カナエが意味深に笑った。
「ははん…。」
「え、何よ気持ち悪い。」
怪訝な顔をするユリに、カナエはもう一度にやりと笑って、何か思い出したのか手を叩いた。
「ああ、そうそう。
ユリ、明日、家にいてね。」
「え、あ、うん。」
ユリが頷くと、カナエが茶を淹れ直しに席を立った。
「ねぇ、カナエちゃん。」
「ん？」
「駆さんって、どういう人？」
「駆さん？　なんで？」
「ううん、さっき、依頼人の人と接した方がいいって言ってたから。
一度は会ってるし、どんな人か解っておいたほうがいいかなって。」
再び箸を持ち、食事を始めながらユリが言うと、カナエが茶を汲み終えて戻って来た。
「駆さんは、了さんのお兄さんで、弁護士さん。
東京弁護士会のちょっと上の方の人ね。
有罪の依頼人も無罪の依頼人も、自分が請け負うべきだと思えば区別なく請け負う人って言われてるけど、最近は、有罪確定の容疑者の弁護を持たされる事はないみたい。
弁護士と捜査機関は対立する事が多々あるけど、この人はそういうのを凄く嫌う人って聞いたけどね。
きっと、ご兄弟もお父様もみんなが法律に携わってるから、立場だけで法を扱うのが嫌いなんだと思うけど。」
「お父さん…？」
「あら、知らないの？

てっきり、了さんに聞いたんだと思ったけど。
駆さんと了さんのお父様は、蕪木法務大臣なのよ。」
「…っ。」
ユリが箸で摘み上げていた米を落とした。
二日前、マミコが何気なく言った言葉を思い出した。
”親族か何かに違いない”。
「法務…大臣の息子なの…？」
「そうよ、本当に知らなかったの？」
「し、知らない。家族の事なんて気にしなかったし、了も言わなかったし…。」
「そりゃ、聞かれない限り言わないでしょうよ。」
「あ、う…。」
そう言った境遇の子供ならば、聞かれず言うのでは自慢と取られる事もあっただろう。
「駆さんは蕪木兄弟の次男で、長男と駆さんが双子、三男と四男も双子で、了さんが五男だったかしら。
お歳は一〇違うって言ってたから、駆さんは四三歳よね。
結婚はしてらして、確か三つになる息子さんがいた筈よ。
了さんのご兄弟の子供の中で一番小さいって言ってたかしら。」
ユリの喉元が絞まった。口に入れていた食べ物を無理矢理飲み込んで、先ほど聞けなかった事を聞いてみる。
「…了も、結婚してるの？」
「了さんは独身よ。
今までも仕事に夢中だったし。暫く彼女もいないんじゃない？
あの様子だと。」
「でも、同じ職場に幼馴染の女の人いるんでしょ？　凄く仲いいって…。」
渡辺が言っていた気がしないでもない。
「ああ、秘書の人でしょ？　彼女とは違うんじゃない？」
「…そうなの…？」

並んで歩く姿は、様になっていた気もする。
「あんた、そんな事、了さんに聞いたら怒られるわよ。」
「え、なんで？」
「だって、了さん、その秘書さんとの事、そう聞かれるの辟易してるって言ってたもの。」
「…そう…なの…。」
安堵してよいのか、何なのか、微妙な気持ちが込み上げた。
「ま、知りたければ聞けば答えてくれるんじゃない？
明日、了さんいらっしゃるしね。」
「えっ！？」
もしや、さっきの電話は…。
「あら、さっき連絡したって、匠さんに連絡が来たらしいけど、言ってなかったの？」
カナエがきょとんと言うと、ユリが首を大きく振った。
「なんにも。
近いうちに行くとは言ってたけど…。」
「そう。何にしても、明日、いらっしゃるから。
だから、家にいて欲しいのよ。」
「うん。」
ユリは頷き、タイミングよく終わった食事の片付けを始めると、カナエがじんわりと笑顔を消した。
そして、言い難そうに俯いて、手元の布巾を指先で弄り始めた。
カナエが何かを躊躇うなど、滅多にない事だった。
「…あのね、ユリ。」
「うん？」
「明日、了さんがいらっしゃるのは、それほど良い事じゃないのよ。
詳しくは、明日、了さんと匠さんが揃ってから、きちんとお話があるから、そこで聞いて欲しいんだけど。」
「…何か、あったの…？」
「…うん…。私からは話せないけどね。」

なるほど。それで先ほどの了の言葉にも合点がいった。
自分が話をする前に、ユリの耳にその事が入っていないかを心配したのだ。
そして、言い方から察するに、それはユリにとって、衝撃を伴う事のようだ。
「変に気落ちする必要はないと思うけど、でも、あっけらかんとしてると、ショックは大きいかも知れないわ。
それだけ、覚えておいて頂戴。」
「…わかった…。」
ユリが頷くと、カナエはふと哀しそうに笑って、食器を片付け始めた。
カナエがキッチンで洗い物をしている音に耳を傾けながら、ユリは湯飲みを傾け、飲み残した茶を揺らした。
カナエが忠告をするなど、普段はない事だ。だから余程の話を、明日聞かされるのだろう。
何があったというのだろう。
雨戸の付いていないリビングの窓を見ると、都心の夜景がきらきらと輝いていた。
あの灯りのどこかにいる了が、明日ここへ持って来るらしい”良くない事”に、少し身構える。
何が、起きるというのだろう…。

再会◆5（前書き）

この話数書き終えた直後に誤ってブラウザバックして3時間をチャラにしたショックから立ち直るのに丸1日かかりましたという愚痴。

再会◆5

翌日。
いつも通りの時間に起き、いつも通りに匠と事務所を開け、いつも通りの庶務を手伝い、いつも通りに昼食の時間を迎えた。
事務所員たっての希望で、昼食は大抵、カナエの手作り料理が用意され、みなで事務所のリフレッシュスペースでテーブルを囲う。今日もいつも通り、握り飯に汁物、簡単な煮物とデザートというメニューだ。
外回りに出ている所員を除き、面々は一通り食事を追え、早々に席に戻ったのを見送り、カナエとユリで後片付けを始めると、そこへ外出していた匠が帰って来た。
「食事は終わったかい？」
「うん。叔父さんまだなの？」
ユリが訊ねると、匠は「いや、僕はいいよ」と言い、カナエを見た。
「じゃあ、そろそろ話でも始めようか。」
匠が言うと、カナエがユリの持っている盆を取り上げ、家に戻るよう言った。
ユリは首を傾げつつ、昨夜カナエが言っていた話の事だろうと予想を付け、匠に続いて家に引き上げた。
リビングへ行くと、了がいた。
ユリを小さく振り返った了は、三ヶ月前と何ら変わらぬグレーを基調としたシンプルな服装で、数日前のスーツ姿とは別人のようだった。髪も、整っているのだかいないのだか解らない。
ただ、数日前と同様、若干痩せたように見えた。
「待たせて悪いね。」
言いながら、匠が了に座るよう促した。
三ヶ月前、了がここへ食事に訪れたときと同じ座席に各々座る。

「さて、誰が話そうか。」
「…ボクが、話します…。」
如何にも気が乗らないという風に了がぼそりと呟き、匠も仕方がない事のように「そうだね」と俯いた。
了は椅子に深々と座り直し、暫し弛緩した。
気持ちを整えているのだろうか。了の横に座るユリは、了をじっと見た。
やがて、了が小さく深呼吸をし、俯きがちにユリを横目で見た。
「…最近、クレアから手紙が来ないんじゃないか？」
了の言葉に、ユリがどきりとする。
「え、何で知ってるの？」
家にいるのだから、手紙のやり取りをしている事自体は、匠もカナエも知っているし、別に隠している事ではない。頻繁にやり取りをしている訳でもないので、ニ、三週間空く事も当たり前だ。だから、”最近来ない”という感覚はユリ個人の感覚だったし、これは誰にも話した事がなかったので、驚いたのだった。
ユリの反応も予想通りとでも言うように、了は身動ぎもせず深く息を吸い込んだ。
「…二週間ほど前、エルシの話を聞かせてくれたシリングの医者から、俺に連絡があった。
『クレアを日本で預かってくれないか』と。」
「…え…？」
「今、シリングは民主改革派と王政継続派で国が二つに別れて小競り合いをしている。
民主派は一般国民が組織するデモ組織が主体、王制派は主に軍幹部や政治家、資産家が主体だが、三週間前を境に、王制派の一部の権力者が民主派に鞍替えする動きが見られるようになった。
切欠は…、クレアだった…。」
「な…。クレアに何かあったの…？」
溜まらず、ユリが了の袖を掴んだ。

了はその手を見つめながら、続ける。
「報道規制が敷かれているのか何なのかは不明瞭だが…、日本では全く報じられないが、三週間前、現国王とシリシの秘密が、シリング国内のマスコミに流された。
報道を受けた民主派にとって、クレアは瞬く間に悲劇のヒロインとして祀り上げられた。
その時点で当のクレアの耳には、まだ何の情報も入っていなかったが、デモ組織のリーダーがクレアを広告塔として祀り上げた事で、クレアの耳に入った。
その時、何の手違いか、意図的か、菅野の疑惑の件もクレアの耳に入った。
クレアの様子がおかしくなったのは、その時からだったらしい。」
「…誰が…、そんな事を…？」
「…確かな情報はないが、シリングのマスコミへは、”男爵”名義で情報が流れたらしい。」
「どうして！？
だって、クレアのお兄さんは、クレアを守りたかった筈でしょ…！？」
ユリが、了の袖を掴む手に力を入れた。袖を引っ張られるようになった了の手が、だらりとユリの膝に零れた。この状況で手を引っ込めるのも躊躇われ、了はユリの手を握りる事にした。ユリが気持ちを取り乱すのを抑えたかった。
「正確な情報は、俺の手元にない。
だから、聞いた話しか出来ない。
ただ、シリング国内では、”男爵”によるものだと報じられていると、医者は言ってた。」
「…。」
念押しでユリの手をぎゅっと握ると、ユリは眉間に深い皺を刻んだまま、弛緩してしまった。
クレアは菅野からの疑惑については何も知らなかった筈だ。

あれだけ懐いていた菅野の真実を知れば、深く傷付くに違いなかった。
シリシの事だってそうだ。
仮令事故死が嘘だったとして、それを受け入れたとしても、その先にある真実は自死という重いものだ。
「シリング国内の治安も、報じられているより遥かに悪い。
身の危険と、精神の危険とを鑑みて、クレアの身は医者の依頼通り、駆と高遠さんが入国管理局に掛け合って、本人の同意を得ぬまに、日本へ入国、保護する事にした。
今、東京郊外の療養施設にいる。」
「会いに行く！」
そう言って立ち上がろうとしたユリの手を、了がさらに握って制した。
「まだ話は終わってない。」
「…え…？」
立ち上がる事を止められ、前のめりの妙な姿勢で、ユリが了を見た。
「後で、クレアの元へは連れて行く。
ただ、今日来たのは、本来はクレアの件のためではない。」
「…どういう…事…？」
「話の続きがある。」
了が、匠を見た。匠もその視線を受け、小さく頷いてテーブルの上に何かを取り出した。
見覚えのある、箱だ。
数日前、匠に渡すよう了から預かった、あの箱。
「あ…。」
「開けてみ。」
短く言って、了がユリの手を離した。
ユリは了と匠を見た後、おずおずと箱を手に取り、ゆっくりと開けた。

中には、紅く輝く宝石が入っていた。
これは…。
「…”紅い泪”…。」
ユリが呟くと、了が頷いた。
「”男爵”の事件の時、美術館から持ち出され、所在不明となっていた、”紅い泪”だ。」
「え？」
ユリが驚いた。
あの事件の後、”紅い泪”は菅野が倒れていた美術館の敷地内の茂みの中で発見された筈だ。
「”紅い泪”には、対となる同じ姿の宝石が存在する。
名を”紅い心”。
この二つは、夫婦だった頃のアレン・バークレイとシリシ・バークレイの発注によって一つの巨大なカーネリアンから作られた宝飾品で、元は”二つの想い”と言う二つで一つの作品だった。
アレンとシリシが将来、一つをエルシに、もう一つをクレアに受け継がせるつもりで作ったものらしい。
その後、あの一件でシリシの手元にあったものと、アレンの手元にあったものは別れ別れになり、シリシは石の小瓶に隠していた毒を呷って自殺。それが美術館へ搬入された。
だが、事件後回収され、警視庁に保管されていたそれについて、指紋採取の一環として科学捜査班が調べたところ、毒物は検出されなかった。
シリシが服毒自殺に使用した毒は、六〇度以上でないと気化しないもので、通常の室温保管でも十年は保存容器に付着して残っていると言われるものだった。
だから、一切検出されなかった以上、”物が摩り替わった”と見るのが正しい。
元々あの美術館の事件は、”盗難未遂事件”であって、アレン殺害についても”紅い泪”は関連性がなかった事から、毒物やシリシ

の一件については警察も把握していない。これと毒物について関連付けているのは、”男爵”の捜査をしている特別調査室だけで、警視庁を始めとする捜査機関には一切この情報も開示していない。
だから、警視庁内部では、未だに警視庁で保管しているのは”美術館から盗まれた紅い泪”なんだが、特調の行った科学捜査により、これから毒物が検出された。
つまり、ここにあるものが”本物の紅い泪”、警視庁で保管されているものは”紅い心”だと言う事になる。」
「それが…どうしてここに…？」
「俺はそれを、『クレアが持っていた』と言って、医者から預かった。」
「…えっ！？」
ユリは目を見開く様子を、匠は静かに眺めていた。
匠はクレアを見送った日に気付いていた。だが、高遠に相談すると、これについては口止めをするよう言われ、この事実を知っているのは、了を含む特別調査室の一同と匠だけという事になったのだった。
「何で？　なんでクレアが…？」
「…それについては…、クレアに聴くしかないと思っている。
でも、肝心のクレアは、今そんな話が出来る状態にない。
そして…。」
「そして…？」
「クレアを日本に保護し、これが俺の手元に来た二週間前から、あの事件と関わった事のある人物が立て続けに襲われている。」
「！？」
「統計的に見て、俺たちが勝手に”事件と関わりのある人物”と捕らえているだけで、本当は別の条件で襲われているのかも知れないが、今の時点で、菅野と飛澤さんが被害に遭っている。
飛澤さんは軽傷で済んだが、菅野については傷が深く、現在集中治療室に収容され、意識もない。」

「そんな…。誰が…？」
「解らない。飛澤さんも、菅野も、自宅にいるところを狙われたらしい。どちらのマンションの防犯カメラにも、不審と思われる人物は映っていなかった。」
襲撃後、飛澤については自力で救急車を呼び、菅野については玄関で血を流して倒れていたところを、近所の住人が発見、搬送されたらしい。
「……。」
ユリがすっかり黙り込んだ。が、了が見る限り、肝心な事には気が付いていないようだったので、了はユリを向いて座り直し、肩を窄めて縮こまるユリの手を力いっぱい握った。
「次は、ユリが狙われるかも知れない。」
「ッ！」
ユリが、ばっと了を見上げた。
「俺も、匠さんもカナエさんも、その可能性は高い。」
「…。」
発言すべき言葉が見当たらず、ユリは口を動かしかけて、そのまま噤んでしまった。
そこへ、匠が静かに言った。
「僕もカナエも、自分の身は自分で守れるけど、ユリは違う。そこで、ユリの身を暫く、蕪木クンに預けたいと思うんだ。」
「え…。」
何故、自分だけが…？
「保護という形を取るつもりでいる。暫くは、この家から離れて、俺の目の届く範囲にいて貰う。俺が止むを得ず離れなければならない時は、調査室の誰かが君を護衛する。」
「家を離れるの…？」
「暫くな。」
「だって、自分の身を守れたって、叔父さんもカナエちゃんも危険

には違いないんでしょ？」
「…。」
「なのに、どうして私だけなの？」
「……。」
黙り込む了と匠の顔を、ユリが交互に見た。
「なんで、私だけなの？」
尚、黙ったままの二人の態度で、ユリには大方の予想が付いた。
「…本当は、私が狙われてるんでしょ…？
飛澤さん、菅野館長、私…。
あの事件で、この三人に共通するのはただ一つよね…。」
”男爵”と、直接やり取りをした事がある人間だ。
「了も勿論、狙われてるんでしょ？
だから、残りの私と一緒にいれば、狙われる機会は少なくて済む。
…そうでしょ…？」
了の顔を覗き込むと、了が手の力を緩めた。咄嗟に、ユリは了の手を握り返した。
これで、確信した。
ふと、東京駅でばったり会ったあの日を思い出した。
あれは、偶然ではないのだろう。きっと、ユリを心配した了が、後を付けたに違いない。
「…わかった。
その方が都合がいいなら、その通りにする。」
ユリが頷くと、了が険しい顔をして詫びた。
「すまん。」
「仕方ないじゃない…。
私がここにいない方が、叔父さんもカナエちゃんも危険は少なくなるんでしょ？
その方が、いいわ。」
そう言って、ユリが立ち上がった。
「家出る準備、した方がいいでしょ？

何がどのくらい必要？」
荷造りをしなければならない。出て行くなら、早い方がいいだろう。
が、了はその切り替えに呆気に取られて何も答えられずにいた。
一方で大凡この展開を予測していた匠は、にやにやと笑っている。
「蕪木クン、取り合えず三日分の着替えくらいでいいよね？」
「え…、あ、はい。
ちょっと、旅行に行くような荷物でいいと思う。必要なものがあれば、あとで買うか届けて貰えばいい。行き先はここでは言えないが、洗濯は出来る環境ではある。」
「そ。なら、三日分用意するわ。
ちょっと待ってて。」
そう言うと、ユリはぱっと了の手を離し、四階の自室へバタバタと走り出した。
未だ呆気に取られている了は、ゆっくりと匠を見た。
その様子が面白くて、匠はテーブルに頬杖を突いて了をからかった。
「面白いだろ、ユリは。」
匠の暢気な口調に、やっと気を持ち直した了が、苦笑した。
「参りました。
やっぱり強いな…。」
了は、ユリの感覚の残る手をまじまじと見つめて、そう呟いた。
それを聞いて、匠は満足げに笑った。

再会◆6

何が必要か必要でないか、考えても解らない。
ヘアケアとスキンケアグッズは長期用のボトルを選んだ以外、ユリは本当に三泊の旅行をするつもりになって、荷造りを始めた。
靴だけは何があってもいいよう、スニーカーとパンプスと両方を大き目のボストンバッグの底に詰め込んだ。下着と簡単な普段着は三日分用意し、あと数着、それなりの衣装を丁寧に折りたたんで入れた。携帯電話の充電コードと、気まぐれに、普段使っている手帳を入れた。
「こんなもんでいっか…。」
必要なものは、買うなり持って来て貰うなりは出来るようだから、先々の事を心配しすぎても無駄に思えた。
ユリはバッグを閉め、立ち上がると、部屋を見回した。
暫く、さよならだ。
いつもはしないが、朝起きたまま荒れたベッドを整える。
何だか、妙に寂しい気分だ。
「…帰って来られない訳じゃあるまいし…。」
そう呟いて、机の上に置いた両親と三人で撮った写真を手に取る。あの、了に預けたロケットに入っている写真と、同じものだ。
あの後、父の手帳が見付かり、ぱらぱらと捲っていた時、挟まっているのを見付けたのだった。
日に当たらなかったからか、それほど色褪せもしておらず、状態も良かったのでそのままフレームに入れた。
「行って来るね。了が一緒だから、大丈夫だよ。」
ユリはそう言うと、写真を丁寧に机に戻し、バッグを持ち上げて部屋を後にした。
階段を下りると、玄関にユリの戻りを待っていた了と匠がいた。
「いいか？」

了が訊ねると、ユリが頷いた。
「うん。大丈夫。
じゃあ、叔父さん、行って来るね。」
緊張感も何もない挨拶に、匠が笑った。が、流石にすぐに笑うのをやめ、ユリの頭をぐいぐいと撫で回した。
「早めに連絡が出来るように、手配するから。」
「うん。」
匠の手が離れると、ユリはバッグを床にどさりと置き、靴を履いた。了と匠は無言でユリを見る。
ユリが顔を上げると、了が「車を出してきます」と言って走って行った。
その後に、匠が玄関の外を見回し、ユリに続くよう目配せをして階段を下りた。事務所の前にはカナエがいて、階段を降りるユリを見て、目を細めた。
暫くは、カナエの料理も食べられないのか。そう思うと、少し切ない。
「行って来るね。」
にこやかを装って笑うユリに、カナエは無言で頷き、匠がしたように頭をぐいぐいと撫で回した。
きっと、何か言うと、恥ずかしさが込み上げてしまうのだろう。それはユリも同じだった。
そこへ、了の車が到着した。
了が運転席から助手席を開けると、匠がユリを助手席まで誘導した。
了と匠がとても慎重になっているのが良く解る。
助手席まで行くと、ユリの荷物を見て、了が座席を倒した。トランクでは手間取るので、後部座席に荷物を置けという事だった。ユリは黙ってそれに従い、席を戻して乗り込んだ。
匠がドアを閉め、窓の外から了に声をかける。
「すまないね。暫くよろしくお願いします。」

「お預かりします。」
そのやり取りに、ユリが眉間に皺を寄せた。
「なんか、仰々しい。
すぐ帰って来るんだから。」
そう言って、頬を膨らませた。
解っている。この二人が慎重になるのだ、ユリが予想しているよりずっと、自分の身は危険に晒されているのだろう。
だが、そんなところで、ユリまで気落ちしている訳に行かない。
この先、クレアにも会わねばならないし、何日続くか解らない身を隠す生活が待っているのだ。
今から鬱々としては、身が保たなさそうだ。
膨れるユリを見て、心情を察したのか了も匠も苦笑した。
「はしゃいでご迷惑かけないでくれよ。」
「なによそれ、失礼ね！」
ユリがキっと匠を見ると、匠がにやりと笑った。
それを合図に、了が車を発進させた。
ユリが後ろを振り返り、満面の笑みで手を振る。匠とカナエはそれを見て、あの日の両親みたいに、仕方なしと苦笑して手を振り返してくれた。
「シートベルト。」
事務所前の路地を大通りで曲がる手前で、了が言った。
「ああ、ごめん。」
慌ててシートベルトを締める。
「って言っても、目下行き先は検察庁舎だけどな。
俺の仕事が終わるまで、そこで待機。」
「えっ。検察庁に入れるの！？」
ユリが興奮気味に言うと、了が少少呆れた。
「中では大人しくして貰うぞ。
調査室以外は、原則立ち入り禁止。」
「勿論そうでしょうよ。

でも、大丈夫なの？
一般人を入れちゃって。」
「別に、入れる事自体は然程問題じゃない。
一応、特別待遇処置にはなってるがな。」
「ふぅん…。」
そんな事を話している間に、検察庁舎が見えて来た。事務所から徒歩でも三〇分ほどの距離だ。
車は検察庁舎の正門を入り、駐車場案内に従って庁舎を左へ回り込むように進んだ。
緩やかに下り坂になり、やがて駐車スペースへのトンネルが現れる。すいと吸い込まれるように入っていくと、駐車スペースには疎らに車が止まっていた。いずれもセダンタイプで、色は余り派手なものがない。その中で、了の車は目立つだろうと思った。
「車出勤少ないのね。」
「昼間だからな。出てるだけだろ。
普段は半分は埋まってるよ。」
了は手馴れた手付きで車を『Z』と書かれたエリアへ停めた。庁舎内へ通じる階段やエレベータからは愚か、駐車場の入り口にも遠く、決して良い場所とは言えなかった。
『Z』エリアには、運転席側にもう一台、黒いセダンが停まっていた。
「降りていいぞ。」
エンジンを切ってキーを抜きながら、了が言った。助手席側は壁になっていて、ユリはそっとドアを開けて車を降りた。
了も車を降りながら、
「一応教えておくけど、調査室（ウチ）の専用駐車エリアは『Z』。もし駐車場で待ち合わせと言われたら、ここに来い。」
と言った。
ユリが「わかったわ」と返事をすると、了はさらに隣の黒い車を指差して、

「これが高遠さんの。その隣が、この間一緒に飯食った渡部の。その隣が三笠。一番端が、日下部（くさかべ）ってやつの場所。」
と順番に教えていく。
「五人なの？」
「そう。」
ユリの問いに、了は短く返事をして、通用階段へと歩き始めた。
ユリも付いて行く。
「意外。もっと大きな部署だと思った。」
「別に、全部の仕事を五人だけでやってる訳じゃないけどな。この間みたいに、警視庁と連携する事もあれば、別の捜査部と合流する事もあるし。」
「ふぅん。」
階段を昇ると、小奇麗な場所に出た。二人がけのソファと灰皿があるので、一見すると小さな休憩室と言う感じだが、警備室と書かれたプレートのかかったドアや、小さな窓があり、突き当りには綺麗に磨かれたガラスの自動扉がある。脇にはカードリーダが備わっていて、了はそこへ胸ポケットから取り出したカードを通した。
すると、ピ、と音がして、自動ドアが音もなく開いた。
了は少しだけ振り返ってユリに付いて来るよう目配せをし、歩き始めた。
ドアの向こうは少し長い廊下になっていて、途中に扉などはなく、また突き当たりに自動ドアが現れた。このドアにもカードリーダが備わっていて、了は同じようにカードを通し、ドアを開けた。
ドアの向こうには、今度は広々とした明るいロビーが見え、ぱりっとスーツで身を固めた人間が、数名往来していた。受付と思しきカウンターには、意外にもデパートガールのような制服の女性が二名立っており、行き来する者たちに挨拶をしていた。
了はそのカウンターをユリを見ながら指差し、歩み寄るなり女性の一人にカードを差し出した。
「おかえりなさいませ。蕪木さん。」

女性たちは何故か頬を少し赤らめながらそう言い、一人がカードを受け取ると、カウンターの陰になっている手元で何やらし始めた。時折、ピ、という電子音が聞こえる。
「届出出てる？」
了が訊ねると、女性はにこやかに笑いながら、
「はい、出ています。カードの発行も完了していますよ。」
と言い、了にカードを返し、隣の女性が別のカードを取り出した。
「カードの受け取り書類を、ご本人様に書いていただきたいのです。」
女性に言われ、了は無言で頷くと、ユリを振り返った。
「ユリ。」
「うん。」
言われてカウンターに近付くと、女性がにこりと笑ってペンを差し出した。そして、カウンターの上に置いた書類を指差しながら、記入欄の説明を始めた。氏名、現住所、電話番号を書くようだ。
「事務所のでいいの？」
了に訊ねると、「いいよ」と了が頷く。
ユリはペンを受け取り、なるべく丁寧に文字を書いていった。
書き終わると、女性が了を見て、
「受け取り証明は、蕪木さんで構いません。」
と言い、了はそれを受けてユリからペンを取り上げると、書類の後半部分を埋めた。覗き込んでみると、意外なほど随分と几帳面で綺麗な字を綴っている。
ほぅと感心をしていると、了はペンと紙を女性に手渡した。
「ありがとうございます。
芳生さん。そのカードはくれぐれも失くさない様にお願いします。失くしてしまった場合は、速やかにこのカウンターか、蕪木さんの部署の方に申告して下さい。
それと、そのカードでは入れない場所があります。エレベータもカードを通す事になっていますので、一人で乗っていた場合は、停

まれないフロアもありますので、注意して下さい。」
女性は、噛み砕いた表現でユリに幾つかカードの取り扱いの説明をし、最後に了を見て、
「返却は無期限になっていますが、カード記録に明らかな不審点が認められた場合は、調査室への報告を待たずにカードを停止する事がありますので、ご注意下さい。」
「わかった。ありがとう。」
了は素っ気無く言い、ユリに目配せをして奥へと歩いて行った。
ユリは女性たちにぺこりと頭を下げると、小走りに了を追いかけた。
追い付くと、了は改札機のような機械の前でユリを振り返った。
「出入りは常にこの機械にカードを翳す。ここ以外にここから先への通り道はないので、カードを失くしたら出入りが出来なくなる。」
そう言って、了は手本のようにゆっくりとカードを読み取り板に翳した。
ピ、という先ほどと同じ電子音が鳴った。
ユリも真似をし、付いて行く。
エレベータもカードリーダー式と言っていたが、ロビーには特にそれらしきものはなかった。普通に昇降ボタンを押し、来たエレベータに乗り込むと、内部にはカードリーダーが付いていた。幸い一緒に乗る人間もいなかったので、了が説明をし始める。
「カードを通すまでは、ボタンは何を押しても反応しない。
カードを通せばボタンが光る。光っているボタンしか押せない。
試しに、ユリのカードを通してみ。」
了がカードリーダを指差す。言われたとおりに受け取ったカードを通すと、『一三』のみが光った。
了が光らないボタンを幾つか押すが、何も反応しなかった。
「これは、停まらないから降りれないという事だが、例えば二階でエレベータのボタンが押されていたら、当然停まるので、ユリも下りる事が出来る。ただし、フロアには入れるが、どの部屋も基本的にカードリーダなしにはロック解除が出来ないから、結局はロビー

からどこへも行けない。
　ちなみに、非常階段はあるが、階段側からドアを開けるにはカードを翳す必要がある。」
「うんうん。」
「ユリのカードと違って、俺のカードはほとんど制限がない。」
　了がカードを通すと、停止フロアのボタンがすべて光った。
　了は一三階のボタンを押しながら、
「ま、大抵は、ユリは一三階以外に用はないだろうし、一人で移動する事もないから、何も気にする必要はないだろうけどな。」
　と言い、エレベータを動かす。エレベータは軽くモーター音を鳴らして昇って行く。メンテナンスがしっかりされているのもあるだろうが、揺れもなく上昇スピードも速いので、恐らく新しい機種なのだろう。
　あっという間に一三階に着き、ドアが開いた。
　一階のロビーとは大分印象が違い、明るくはあるし綺麗でもあるのだが、どこか無機質だった。人気がないのもあるかも知れない。
　調査室は東の突き当たりらしく、途中に幾つか曇りガラスの扉があるが、中は暗闇だった。明らかに使っていないようなのでそれを訊ねると、『一三』という数字を嫌って、どの部署もこのフロアに入る事を拒んだため、調査室のみがこのフロアを使っているのだと教えてくれた。
　突き当たりに辿り着くと、了が立ち止まり、ユリを振り返った。
　そして、両開きのドアの脇にあるカードリーダーを指差す。
「これが、ドアロック。お前のカードでも開く。
　ここにカードを読ませないと、ドアは開かないようになってる。
　どこのカードリーダーもそうだが、基本、カードを通せば検察庁のセキュリティデータベースに記録される。どこでどのカードが使われたか逐一チェックされているから、妙な場所でユリがカードを使うと、瞬時に解り、即刻不審者扱いになるから、注意な。」
「うろつかなきゃいいのね…。」

流石に公的庁舎内で不審者扱いされては今後の人生に関わるので、ユリは大人しくする事に全力を注ぐつもりでいる。
「そうだな。うろうろするにも、このフロア内だけにしてくれ。フロアの説明は、後で誰かにやらせるから。」
と言い、了がカードリーダーにカードを通そうとし、「あ」と言ってまた振り返った。
「念のために言っておくが…。」
「？」
「高遠さん。お前が思ってるよりずっと『偉い人』だからな。失礼のないようにしろよ。」
「なっ。失礼ね！偉い人かどうかなんか関係ないわよ。なるべく失礼のないように、大人しくしてるつもりなんだから…。」
ユリがむくれると、了が苦笑してカードを通した。

再会◆7

ピ、という軽やかな音が鳴り、ドアからカチャ、と音がした。
了がドアを引くと、ひやりと冷たい風が廊下に溢れた。了はそのままドアを大きく開け、ユリを少し振り返ってオフィスへ入った。ユリも続く。
オフィスは予想以上に広い。入り口の目の前は八畳ほどの空間があるが、壁際にコーヒーメーカーだの紙コップだのと言った雑貨が載った背の低いキャビネットが置かれている以外、特に何もない。ただ、このエリアだけは窓が全面張りになっていて、清清しい眺めと日当たりで、何もないのが勿体無いくらいだった。
オフィスはそのまま左手方向へ広がっていて、角部屋なのか、内ニ面は全面ガラス張りになっている。ちょうどオフィスの中央には応接用かリフレッシュ用か妙にカジュアルなソファセットと観葉植物が置かれ、それを囲うように、窓辺に三台のデスクが鉤型に並んでいる。デスク個々の間も、有り余る広さ故か異様なほどに隙間が空いている。
窓に面していない壁際はロフトのような造りになっていて、白く塗装された階段で行き来するようになっている。下には何やら資料やファイルがきつきつに詰め込まれたスライド式のキャビネットが並び、上には何台かのパソコンやディスプレイが見えた。そこには男性が二人いたが、まだこちらには気付いていない様で、二人でディスプレイを指差しながら何か話していた。
「ただいま。」
了が声をかけると、二人は「お帰りなさい」と言った後にこちらを見た。
そのうちの一人が、「高遠さん、出てますよ」と言ったあとユリを見つけ、にこりと笑った。
「ユリちゃん。」

渡部だ。
「あ、こんにちは。」
「いらっしゃい。」
まるで親戚の子でも遊びに来たかのように気楽にユリを出迎えた渡部は、もう一人が持っていた資料を「ちょい」と言って取り、早々と鉤型の角に配置されたデスクに着いた了の元へ走った。
「三笠さんは総務部に行ってます。
高遠さんは、二十階に…。」
渡部の説明に、了は「ふぅん」とつまらなさそうに答え、デスクに詰まれた郵便物の封を開けていった。
「あと、この間の件の調査経過です。」
渡部が持って来た資料を了に差し出した。了はそれを無言で受け取ると、ぱらぱらと捲りながら「…何か言ってたか？」と訊ねた。
「はい。
事件の事は、特にこれと言って何も話さないそうですが、蕪木さんは来ないのかと、しきりに気にしているようですよ。
あと、面会の許可は取ってあるので、何時でも行っていいそうです。」
「わかった。」
了はその間、一通り資料に目を通したようで、それを渡部に返し、「日下部」と、ロフトにいる男を呼んだ。ユリが見上げると、男はにこにこしながら足早に階段を降りて来た。駐車場でも言っていた、あれが日下部なのか。
日下部が了のデスクに辿り着くと、了は立ち上がって、ユリに手招きした。ユリが近寄ると、日下部を指差し、「日下部」と簡素に紹介した。
日下部は苦笑して、「酷いなぁ、蕪木さん…」と言い、ユリに向き直ると、
「日下部（くさかべ）　直人（なおと）です。」
とにこりと笑った。

「芳生　ユリです。よろしくお願いします。」
ユリがぺこりと頭を下げると、日下部は一層笑みを湛えて了を見た。が、にやにやと笑ったまま何も言わないので、何かを察した了が不機嫌な顔をする。
「なんだ？」
「別に。
ああ、そうだ。さっき、この間の研修会に来たって子がここへ来ましたよ。
蕪木さんに、レポートの添削を依頼したいって。」
「俺の講義のレポートを俺が添削してどうする。」
「そんなの知りませんよ…。」
やや苛ついて了が言うと、日下部はにやにやと笑ったまま眉だけを下げた。どうやら、日下部も匠と同じように、元々笑い顔の様だった。表情の判別は、眉は目元のようだ。
そこへ、「お、来てるね？」と突然声がかかった。
振り向くと、鼻の下に調った髭を生やした小奇麗な中年男性が立っていた。
「おかえりなさい。」
素早く了が言うと、男性はにこにこと笑ってオフィスの一番奥のデスクに鞄を置いた。鞄も服も、一見して気の遣われたものと解る。着こなしもスマート、というよりチャーミングだが、実に品が好い。
男性が「ただいま」と言うと、了はユリに目配せをして、男性のデスクの前に立った。
「芳生ユリを連れて来ました。」
「ご苦労様。」
少少女性っぽいニュアンスで言い、男性は了の斜め後ろに着いたユリを見た。了もユリを振り返る。
「高遠さん。」
その言葉に、ユリが息をゆっくり吸い込んだ。そして、高遠を見る。

高遠。
何度その名を耳にしただろう。
両親が出会う切欠になった人物。
目の前の高遠は、柔らかな印象だ。
そんな高遠はユリと目が合うなり、まるで愛しい者でも見るように目を細めて微笑んだ。
「高遠です。
すまないね、ユリちゃん。大変な事に巻き込んでしまって。」
「い、いえっ。」
ユリが思わず背筋を伸ばすと、高遠はさらに微笑んだ。
そして、了を見る。
「さて、とーるちゃん。報告大会でもしようか。」
「はい。」
笑顔を絶やさない高遠と対照的に、了の顔に笑顔はない。それを、高遠がいじった。
「なによ、とーるちゃん。
いつも通りしなさいよ。」
まるでオカマのように言い、高遠は少しだけ背の高い了を悪戯気に見上げた。了は了で、一瞬罰の悪そうな顔をし、すぐに腰に手を当てて仁王立ちの姿勢になった。
「いつも通りですよ。」
そんな了に、高遠は「そう？」とも言いたげに含み笑いを浮かべ、「まぁいっか」と言いながら席に着いた。そしてユリを見て、
「立ってるのも疲れるでしょ？
あそこのソファは自由に使っていいからね。
あとで暇潰しでも用意させましょ。」
と言ってソファを指差した。ユリは、「はい」とだけ言って早々にソファへ向かった。恐らく仕事の話か、少し聞かせ辛い話があるのだろう、その前にユリを遠ざけたかった様子を汲み取ったのだ。
ソファに座ると、渡部が白いプラスチックのカップを持って来た。

手に取ると、冷たい赤茶の液体が入っていた。アイスティだ。
「ここの人、無糖派でねー。
甘い飲み物ないんだよ。ごめんね。」
「いえ。大丈夫です。私もお砂糖あんまり使わないし。」
そう言って、一口啜る。
緊張していたのか、液体を口に入れると、途端に口が渇いていた事に気付いた。無糖と言うが、大分甘く感じる。若干疲れているのだろうか。
「じゃあ、僕まだやる事あるんで。何かあったら、そこの階段昇って声かけてね。」
「有難うございます。」
ユリが言うと、渡部はにこりと笑ってロフトを登って行った。上には既に日下部が戻っていたようで、二人でこそこそとやり始める。
「…だし、そこんとこはとーるちゃんも理解してるだろうから、基本的には指揮権は今までどおりこちらに委ねて貰える事には、なった。」
アイスティを二口目、口に含んだとき、高遠の声が聞こえた。声はかなり絞ってはいるが、基本的に静かな場所だ。聞こえてしまうのは仕方がない。
ユリは、いけないと思いつつ、耳を澄ます。
「ただね…。」
「はい。」
「警視庁にもメンツがあるでしょ？
ここのところ、首相の旗色も悪いしね。次期委員会長に大純系法人の津々見恒太郎が候補に上がってるんで、野党の動きも激しくなって来てる。これに便乗して、不信任案提出まで漕ぎ付けられると面倒でね。
下々のご機嫌を取ってみようかって話になったらしいの。」
「一穂は同意していないんでしょ、どうせ？」
了の声がやんわりと不機嫌になった。『一穂』とは、恐らく了の

父親である蕪木一穂の事だろう…。
「してないね。
まったく、あの人は強気よね。後ろ暗いところも、相変わらずないしね。
とーるちゃんの採用の時は、ちょっとゴタついたけど、それ以外は、特に揚げ足になるところもないからね。
この話が出た時も、渋々承知したとか言ってたよ。
で、結果としてどうするかと言うと、ウチで得た情報の一切を、国家公安委員会と東京公安委員会の双方に報告する。」
「そんな無茶な。」
「うん。流石にこれではウチがある理由がなくなるんで、生贄を立てる事になった。」
「誰です？」
「官房長官。」
さらりと高遠が言うと、それまで苛立ちを醸し出していた了の背中が、緊張した。
「…野外（のや）　紘向（ひろむ）ですか…。」
「うん。打って付けでしょ？
歴代五人の首相を補佐し、蕪木一穂に次いで誇るクリーンイメージと、『鷹の目（ホークアイ）』と呼ばれた鋭い眼で、裏の総理とまで言われて来た野外さん。
…大臣の、親友だっけね…。」
そう言って、高遠の声が少し切なげな声に変わった。
「何かバレたら、即座に『この人が隠してました』って、全員で指を指すの。
公開処刑みたいよね…。
でも、この人が罪人だとさ、野党もそう騒ぎ立てないんじゃないかって。
立候補してくれたそうだよ。」
「…。」

視線を二人に向けていないから、二人がどういう表情をしているのか見る事は出来ない。だが、その胸の内はひしひしと伝わって来る。
口を噤んでしまった了は、きっと野外に少なからず好意的な感情を持っていたのだろうし、高遠も心を痛めているようだ。
「本件、何としても片を付けなければならないよ、とーるちゃん。ラストチャンスと思ってね。」
「はい。」
了が返事をすると、ちょうどそこへドアが開いて、また一人やって来た。
振り向くと、三笠だった。
三笠はユリを見るなりふふと笑い、手を小さく振ると、そのまま高遠の席へ向かった。
「本部長、再審手続き終わりました。」
「ご苦労様。
とーるちゃん、続きはよろしくね。」
三笠を笑顔で出迎え、高遠が言った。相変わらず、どこか女性のようだ。
そんな事を思いながら、もう一口、アイスティを啜ると、了がユリを呼んだ。
「ユリ。」
「うん？」
目だけを了に向けると、了が手招きをしていた。ユリがカップをテーブルに置き、了に歩み寄ると、了が今度は三笠を見た。
「三笠。フロアの案内をしておいてくれ。
終わったら、喫茶ルームに置いておいてくれ。
俺は今から少し出る。ユリは後で迎えに行く。」
「わかったわ。」
三笠は頷き、ユリに微笑んだ。数日前の印象から何ら変わらず、綺麗だ。

「行きましょうか。ユリちゃん。」
「はい。」
ユリが頷くと、了も高遠を見て、「出て来ます」と言った。
「いっといでー。」
満面の笑顔の高遠に見送られ、出て行く了に付いてオフィスを出る。
了は先ほど言っていた通り、二時間ほど外出の予定があるそうで、その間、オフィスではなく検察庁の一八階にある喫茶ルームで時間を潰しているよう言われた。
調査室にいてもいいが、誰も相手が出来ないので、せめて気晴らしに、という事だった。
足早にエレベータに乗り込む了を見送ると、三笠がフロアを案内してくれた。
フロアには、到着時に聞いたとおり、使っていないオフィスが三つと、トイレ、小さな喫煙ルームがあるだけだった。喫煙ルームも、調査室内で煙草が吸える事から、余り使われていないようだ。備え付けの自販機は、少し年代を感じる品揃えだった。
「このフロア内なら、自由にうろうろしていいからね。
オフィスには味気ないものしか用意してないから、こっちの自販機の方が気晴らしになるかも知れないわ。」
三笠が笑いながら言った。
そして、エレベータホールへ向かい、一八階へ向かう。
エレベータには、数名同乗者がいた。既に一八階が押されていたので、そのまま壁際に立つ。
同乗者はみな違う部の人間なのか、誰も一言も口を聞かないので、重苦しいほどにしんと静まり返っている。
やがて、一八階に着くと、疎らに人が降りた。三笠とユリも降りる。
一八階はフリーフロアと呼ばれ、ユリのカードでも来る事が出来る、と三笠が言った。

見回すと、綺麗に掃除された床が、窓からの光を反射し、フロア全体が輝いているように明るかった。照明が多いせいもあるだろうか。デパートのレストランフロアよりも明るく、元々利用者が少ないのか人気は少ないが、雰囲気はフラットで居心地も良さそうだった。

ウェイトレスも、紺地に白の縁取りの、派手ではないが可愛らしい印象の制服に身を包み、ここが検察庁内部だという事を一時忘れるほどだ。

このフロアには、喫茶ルームともう一件レストランが入っているらしい。レストランは重厚な色合いの扉が閉められて中は見えなかったが、扉の前にいるホストの雰囲気からも、それなりのワードローブを必要とするレストランのようだ。

三笠が喫茶ルームのウェイトレスに声をかけると、ウェイトレスは窓際の角にある二人席に案内してくれた。

二人が席に着くと、手拭きを置き終えたウェイトレスが「お決まりの頃にお伺いします」と言って立ち去った。

メニューは席に置いてあって、価格も余り高くなかった。

「ああ、そうそう。お金の心配はしなくていいからね。

護衛中は、ユリちゃんは一銭もお金出さなくていいから。」

三笠が少し小声で言った。

「え…。でも…。」

「大丈夫。経費で落ちるし、こちらの心配は要らないわ。」

そう言いながら、悪戯っぽく笑ってメニューを覗き込む三笠を、ユリが呆と眺めた。

一々、動作が綺麗だ。

「何食べる？」

そんな風に聞く声ですら、如何にも女性らしく、絵に描いたように愛らしい。

「あ、まだお昼からそんなに経ってないもんね。お腹空いてないか。

でも、ケーキだったら食べられる？」

メニューを覗きながら上目遣いに見上げる三笠に、ユリは思わず照れる。
「あ…。はい…。」
おどおどと返事をするユリを見て、三笠がふと笑顔を消した。
「ごめんね。気軽には振舞えないわね…。」
どうやら誤解をしたらしく、ユリが慌てる。
「いっ、いえ！　違いますよ。
ちょっと…、見惚れちゃって…。」
「見惚れる？」
「はい…。」
ユリは頷き、縮こまった。
「三笠さん、綺麗だから…。」
ユリの言葉に、三笠が「まっ」と言って笑った。
「お世辞要らないわよ？」
「お世辞じゃないですよ！」
ユリが精一杯否定をすると、三笠はふふと笑った。
「ありがと。
で、どうする？
オススメはねぇ、タルトかなー…。
ここのベリータルトは、私はどこより好きよ。」
三笠が言うなら、間違いない気がする。
「じゃあ、それにしてみます。」
「うん。
それじゃ、私はオレンジタルトにする。」
そう言って、三笠がウェイトレスを呼ぶ。ウェイトレスは、若干愛想が悪く、オーダーを聞くなり言葉少なくさっさと行ってしまった。
「あのカードねぇ。」
「はい。」
「この庁舎内ではクレジットカードみたいな役割もあるの。」

「へぇ…。」
「例えば、今みたいにちょっとお茶した後、レジでカード渡すだけで支払いが済んじゃうのよ。
ユリちゃんが持ってるカードは、完全に来客用カードだから、全部申請部署の経費として処理される。
私や了みたいに、庁舎に勤めてる人間のカードは、各自の銀行口座から引き落とされたり、カード請求になったり。経費として処理したい場合は、専用の経理ソフトで申請をするだけで、経費扱いになるの。
だから、ちょっと食事とか休憩程度だったら、お財布持たなくていいから便利よ。」
「凄いですね…。」
「大きな企業じゃ、割とよくやってるらしいんだけど、システム構築とか管理が大変だから、採用している企業は決して多くないみたいだけどね。」
「そうなんですね。」
「そういえば、ユリちゃんは叔父さんの探偵事務所のお手伝いしてるんでしょ？」
「はい。」
「どう？　探偵さんって、大変？」
三笠が興味津々な目でユリを見た。
ユリは、大変とか大変じゃないとか、そんな判断が出来るほど、探偵として働いた事はないから、どう答えて良いか口篭った。
「そう…ですね…。でも、外回りとか、ちゃんと手伝った事ないから、良く解らないです…。」
「そっか。」
そう答えるのが恥ずかしくて、縮こまるユリに、三笠は何も気にしていない風にあっけらかんと頷き、話題を次々に変えて行った。
大抵は、ユリの事、三ヶ月前の”男爵”の事件の事だったが、緊張気味のユリを三笠がすかさずフォローしてくれるので、あっとい

う間に一時間、雑談で時間が過ぎた。
ふと、三笠が時計を見る。
「あっ、と。そろそろ私、戻るわね。
了が迎えに来るそうだから、ちょっと独りになっちゃうけど、ここで待っててね。お腹空いたら、遠慮しないで頼んでもいいから。」
言いながら、三笠が立ち上がった。
「はい。
忙しいのに、有難うございました。」
「気にしないでね。」
ユリが本心から恐縮したので、三笠は笑ってユリに手を振り、レジへ歩いて行った。
レジでは、ウェイトレスと一言二言会話をし、カードを手渡した。会計の事だろう。やり取りが済むと、三笠が再度、ユリを見て手を振った。
ユリが手を振り返すと、三笠は足早に喫茶ルームを後にした。
三笠が見えなくなるまで見送り、ユリは小さく溜め息を吐いた。
厭に緊張をしたので、体が強張っていた。だらんと弛緩すると、体中の血の巡りが一気によくなった。
せっかく窓辺の席だと言うのに、結局話に集中して、風景を見ていなかった。窓の外には、皇居の堀や、東京駅まで続く大通り、所狭しと建ち並ぶ高層ビルの風景が広がる。大抵どのビルも同じ高さであるため、見渡すには不便はあるが、空が近いのは中々に清清しい光景だ。
喫茶ルームの時計を見ると、そろそろ三時になろうとしていた。了が来るのは、夕方くらいだろうか。
テーブルの上には、食べかけのベリータルトがある。三笠の言うとおり、とても美味しかった。話を優先していたので食べるのが遅く、ユリにしては珍しく、まだ半分も残っている。
ユリはタルトにフォークを刺し、小さく切って口に入れた。
甘酸っぱいブルーベリーとラズベリーのコンフォートと、甘った

るいカスタードクリーム、少し塩気の聞いたタルト生地の味が口いっぱいに広がる。
改めて美味しいと感じ、少しずつ口に運ぶ。
添えのミルクティがなくなったので、ユリはウェイトレスを呼んで追加で注文し、来るまでの間、フォークを置く。
一息吐いて、三笠が座っていた席を見る。
三笠　美香。
了の幼馴染と言ったか。
見かけも仕草も実に優美で、切れもよく、それでいて女性らしい。
ユリとは正反対だ。
そう思うと、並ぶのが、少し恥ずかしい。
今まで、自分が誰より劣っているとか、優れているとか、そんな風に誰かと自分を比べる事はなかった気がする。だが、何の心境の変化か、三笠を見ると、無意識に自分と比べてしまう。
優越という程ではないが、羨ましいとか、それに近い感情ではある。
ふぅと溜め息を吐き、再び窓の外に目をやると、きゃいきゃいと甲高い笑い声が聞こえた。目をやると、女性が二人、喫茶ルームへ入って来た。ウェイトレスに案内され、ユリとは反対側の、窓側角の席に着いた。
同時に、追加していたミルクティが来たので、一口啜ってタルトにフォークを突き刺した。
暇なので、何となしに女性たちの話に耳を傾けてしまう。
「レポート突っ返されたんだって？」
「え、違うよ、本人がいないから受け取れないって言われたの。」
「えー、渡してくれればいいじゃん！　なんだっけ、渡部だっけ？　気が利かないよねー、あの人！」
どこかで聞いた覚えのある話だと思いつつ、タルトを口に入れる。
「そう言えば！　今日受付のリッコに聞いたんだけど、妙な女の子連れてたらしいよ！」

「女の子？」
「そう。女の子の事、呼び捨てで呼んでたって。」
「えー！？　いいなぁ…。どういう関係なんだろ…。」
「親戚の子じゃない？」
「そうかなぁ…。」
「親戚の子なら、愛想振りまいといたら賄賂になるかしらね？」
「えー…、姑息じゃない？」
「何言ってんのよ！　これから先、あんな好条件の人見付かる確率低いんだから、頑張って狙っとかないとさー。」
「そうだけど…。」
「でも、まさかここに入って蕪木家のご子息と会えると思わなかったわよねー。」
　やはりその話かと思いながら、ユリはタルトのベリーを弄った。自分の噂でもあるので、いい気分ではない。女性二人の会話はまだ続く。
「あの人が来てから玉の輿狙い増えたし！　敵が多すぎるわ！」
「周りに沢山いい人いるのにね。
　やっぱり蕪木さん狙っちゃうんだよなぁ…。」
「だって格が違うわよ！　あの蕪木の息子よ！？」
　女性の一人が興奮して思わず大声になった。すると、もう一人が慌てて制した。何かと思い、ユリが顔を上げると、とてつもなく不機嫌な顔をした了が喫茶ルームの入り口に現れた。
　恐らく、彼女らの話し声は聞こえていただろう…。不機嫌な理由は安易に知れた。
　了は入り口に近い席にいる二人には目もくれず、ユリの席まで歩いて来た。
　そして向かいの席にどかりと座ると、横柄に足を組んだ。何の厭味か、足が長いからとでも言いたげに、若干斜めに座っている。
　了は片手を挙げてウェイトレスを呼ぶと、ブレンドとだけ言って組んだ膝に頬杖を突いた。

了の向こうでは、女性が二人、思いっきり罰の悪そうな顔でこちらを窺っている。
「おかえり。」
自分から話そうとは思っていなさそうだったので、仕方なくユリから声をかけると、了はユリを見て、つんとした顔をしながら小さく頷いた。
「早かったわね。」
「予定より早く終わった。」
「もう戻る？」
「いいよ。まだ食べてて。」
「うん。」
了の了承を得て、ユリは切り分けたタルトを口に入れた。
独りで食べているときと、少し味が違って思えた。何となく、笑みが零れる。
その様子に、了が苦笑した。
やっと、機嫌が直ったか。
「三笠は？」
「戻ったわよ。どのくらい前だろ…？」
「いや、いい。いなければ。」
了はそう言うと、窓の外を見てしまった。
居ては都合が悪いとも取れるような言い回しだ。
「三笠さん。綺麗な人ね。」
「…そうか？」
ユリの言葉に、何の興味もなさそうに了が答える。
「うん。お人形さんみたい。」
子供の頃流行った、ジェニーやバービーのようだ。綺麗な衣装に身を包み、いつもキラキラとした髪をした、すらりとした女の子。
そんな印象だ。
あどけない表情で言うユリを、了は暫し見つめた後、さらに乗ったユリのタルトを見て呟いた。

「…まぁ、人形のようではあるな…。」
「でしょ？」
「人形って言うか…。」
了はまだ突いている頬杖にめいっぱい上半身を預け、視線だけを窓の外にやった。
「蝋人形。」
「え、ええ！？」
仲が良さそうには確かに見えないが、同僚であり幼馴染だ。並んで歩けば様になるし、悪くは思っていないだろうと思っていたユリには、驚く発言だ。
「そ、そうかなぁ…。」
「あいつ、無機質だろ。
感情が篭ってないって言うか、化けの皮被ってるっていうか…。」
「そんな風には…、見えなかったけど…。」
つい数十分前の三笠を思い出す。
ユリには、少女のように笑い、ぱりっとした男性らしさもある、妙に艶やかな女性という印象なので、了の言葉が理解出来ない。
「ま、別に何でもいいけどな。」
そういう了の前に、注文していたブレンドコーヒーが置かれた。
了はそれを何も入れずに一口含むと、静かにカップを置いてユリを見る。
「もう少しサボって、下で打ち合わせを終えたら、クレアのいる療養所に行こう。」
「！　会えるの！？」
「ああ。
面会するには、事前許可が必要な療養所でな。あんまり頻繁には行けないが。
今日は許可を貰った。」
クレア。
ここへ向かう前に了に聞いた話だと、様子がおかしいという事だ

った。
色々なショックを受けたのだろうから理解は出来るが、どんな様子かが一番気になるところだ。
気落ちしている程度ならよいのだが。
そう思うと、不安が顔に出た。
ユリが肩を竦めて俯くと、ピンと鼻先を弾かれた。驚いて顔を上げると、了の指先が目の前にあった。了の表情は、真面目だ。
「…痛い。」
文句を言うと、了は真顔のまま指を引っ込めた。
「気落ちしてる場合じゃない。
全部終わってから落ち込んでくれ。」
「…。」
言葉はきついが、了なりの気遣いだ。何より、自分の身が危険だと知らされて了と一緒にここへ来たのだ。確かに気落ちしている場合ではない。
ユリは了に膨れて見せ、残りのタルトを一口で頬張った。

再会◆8

夕方過ぎ。
了と喫茶ルームで一時間ばかり何でもない話をした後、一三階へ戻った。
喫茶ルームを出た後、ホールでエレベータを待っていた時、了の噂話をしていた二人のうち、大声の女性を制した方の女性が走り寄って来て、了に大きな茶封筒を差し出した。
「あのッ！　この間の講義、有難うございました！
あの講義のレポートの添削をお願いしたいんですけど…！」
息も切れ切れ言う女性を、了は一瞥して「済まないけど」とだけ言い、拒否をした。
理由を述べなかったのは、言う程の事ではないのか、言わなくても解れと言う遠回しな皮肉なのかは判らなかったが、女性のあまりに哀しそうな顔と、了のとてつもない不機嫌な顔が印象的な数秒間であった。
「あんな言い方しなくても良くない？」
態度をエレベータの中で問い詰めると、了は意外なほど謙虚な言い訳を始めたのだった。
「そうだな。」
「そうだな、って…。」
「俺はさ…、元々講義自体やる立場にないんだよ。それをどういう訳か、二級以下の検事相手に講義を開いて欲しいって依頼が頻繁に来る。
俺自身は法曹の現場で叩かれ上がって来た訳じゃないし、元はそもそも畑違いな刑事だからな。
突然検事になった人間が突然偉そうにするのは、おかしいだろ…。
あの子のレポートにしたって、俺が評価を下すべきものじゃない。きちんとした検事の現場を積み重ねて来た人間に頼んでこそ、意味

がある事だろうに。」
「…。」
だったら何故、そう言ってやらないのだろう。そう思い、無言で了を見据えていると、了は視線を汲み取って、少し笑った。
「あの子の目的が、接触だからだよ。
拒否をしなければ、接触自体を諦めないだろうから。」
ポン、と、少し篭った電子音が鳴って、エレベータの扉が開いた。
一三階。
日が暮れ始めたからか、先程より少し暗い廊下を、調査室へ向かいながら、前を歩く了の背中を見上げる。
「真面目なのね。」
ぼそっと呟くと、了は首だけでユリを振り返って、
「今頃気付いたか。」
とにやりと笑った。
「…かわいくない。」
「可愛く思われなくていい。」
そう言って、辿り着いた廊下の突き当たりのカードリーダにカードを通し、ドアを開ける。
「ただいま。」
「おかえりー。」
高遠が奥の席から手を振った。
「とーるちゃん、すぐ出る？」
「いえ。」
「打ち合わせ、美香ちゃんと直ちゃんが急用で出ちゃったんで、中止になったんだけど。」
「ああ、そうなんですか…。どうしようか…。」
「もう向かっちゃったら？　結構遠いしね。またこっち戻って来るんでしょお？」
高遠がお気楽なオカマのように言うと、了は顎に手を当てて数秒悩み、「じゃあ」と言って頷いた。

「早めに行って、早めに戻って来ます。」
「うん。いっといで。」
「じゃあ、ユリ。」
了がユリに振り向いた。
「今日はもう、オフィス(ここ)には戻って来ないけど、忘れ物はないよな？」
「うん。」
渡されたカードはワンピースのポケットに入っているし、ここへは手ぶらで来たから、忘れ物はない。ユリが頷くと、了は高遠をちらりと見、「行ってきます」と言って入り口へ引き返した。
ユリも了について戻りながら、高遠を振り返る。すると、高遠が手を振ってくれた。
ユリは思わず手を挙げ…、あわわと慌てながら後ろ歩きになって深々と頭を下げた。
それを見て笑う高遠の声に見送られながら、廊下に出る。
「療養所って、どこにあるの？」
ユリが訊ねると、了が口篭った。
「ん？　うん…。」
「？」
「…特殊な療養所でな…。
場所は言えないけど、ここから車で三時間はかかる。」
そういえば、家で話をしていたとき、東京の郊外にあると言っていた。さらにここから三時間と言う事は、相模湖あたりなのではなかろうか…。
推測してみるが、了が言わないと言う事は、無暗に知ってはいけない事なのだと思われたので、特に確認はしなかった。
無言になってしまった了について、エレベータで一階へ降り、エントランスを横切ると、先程応対した受付カウンターの女性二人が「いってらっしゃいませ」と見送ってくれた。
駐車場への通路を抜け、駐車場へ出る。来た時より、もう少しだ

け車が増えていた。そんな事を思いながら、『Z』エリアへ向かう。来た時は五台とも停まっていた調査室のメンバーの車は、三笠と渡部のものがなくなっていた。高遠の言っていた急用とやらで外出中なのだろう。

そう思いながら、了の車に乗り込む。

指摘をされる前にシートベルトを締め、いつでもどうぞと言わんばかりに気合を入れて背筋を伸ばすと、少し遅れて運転席に座った了が訝しげな表情を浮かべてユリを見た。

「なんだそれ…。」

「何があっても驚かないように。」

ユリが前を見たまま言うと、了は一瞬苦笑して、さっさと乗り込みエンジンをかけて車を発進させた。

シートベルトは、『Z』から入り口までくるくると左右へうねる駐車場を、鈍速とは言えハンドルを切りながら片手で器用に締める。

真っ暗でひんやりとした駐車場から、じりと夕日に焼ける外界へ出ると、一気に視界が白んだ。目を細めながら横目で了を見ると、了の目元が黒く見えたのできちんと横を向くと、了はいつの間にか少し薄い色のサングラスをかけていた。

「…なにそれ…。」

ユリが声をかけると、了が庁舎前の道に出るため左右確認をする序でにユリを見た。

「サングラス。」

「見ればわかるわよ。何でかけてるのって。」

「眩しいから。」

「しょっちゅうそんなもんかけてるの？」

「たまに。」

受け答えしながらも運転に余念のない了の横顔を、ユリはまじまじと眺める。サングラスは、レンズがブルーがかったグレーをしていて、横に細長い。フレームは太くも細くもないが、艶のないマットな黒なので、今日の服装でもある襟と袖に白いラインの入った黒

いポロシャツと、妙にバランスが取れていた。
しかも、相変わらず整っているのだかいないのだか解らない長い髪と、この生意気なスポーツカーが相俟って、とても柄が悪そうに見える。こうしていてもその筋の人間と扱われないのは、立てた襟が足りないくらい無駄に長い首と、異様に整った真っ直ぐな背筋と背格好のせいだ。勘違いされて精々、モデルと言ったところだろう。
眩しいからと言う答えで気が付いたが、今の時間、太陽を目の前にして走っていると言う事は、西へ向かっているという事だ。療養所が相模湖付近だろうという予想は、ほぼ当たっていそうだ。
方向を確認して、再び了を見る。
黙っていれば、それなりに見えるというのに、わざと変な方向へ自分を持って行っている様に見える。
「了って…。」
「ん？」
「モテるのね。」
今日、庁舎に来て短時間で、少なくとも四人は了を見て態度を変えたのだ。一日あそこにいたら、もっと態度を変える女性を見られたに違いない。
「そうか？」
一方で、当の本人はこの反応だ。「色話には興味がないみたいだから」と言ったカナエを思い出した。
「モテてるうちには入らないだろ。」
「そう？　狙ってる人、随分いるじゃない。」
そう言うと、了が一瞬口を噤んだ。
「…立場が欲しいだけだろ…。
『蕪木家の息子と付き合ってる自分』って立場に立って、羨ましがられたいんだろ。」
「そうなのかなぁ…？」
ユリには、そう言った事に興味がないから解らない。マミコなら解るだろうか…？

しかし、随分はっきりと言うものだ。身に覚えがあるように見える。
「今までの彼女もそうだった訳？」
「……。」
了が黙ったので、ユリが言い得ぬ居心地の悪さから思わず「…まさか、いなかったとか言わないわよね？」と言うと、偶然赤信号で車が停まった。了は、窓縁に頬杖を突いて苦笑すると、
「流石にそうは言わないが。
別れた相手の事なんか、一々覚えてないだろ。」
と言った。
「でも、ここ数年言い寄ってくるヤツは、大抵そんなだな。」
「そうやって言って来るの？」
「まさか。
でもそういうのは、見てればわかるよ。」
「そういうもの？」
「そういうもの。」
信号が、青になる。
「厭な思いして来たのね…。」
ユリも窓縁に頬杖を突き、鼻で溜め息を吐いた。
自分が求められている訳ではないというのは、辛いものかも知れない。
「了もいっぱいいいとこあるのにね。」
ぼそりと呟くと、了がふふと鼻で笑った。
「なによ？」
突っかかると、いつの間にか頬杖をやめていた了は、前方を見たままにやけていた。
「いや。」
「なんなのよ。
私に褒められても嬉しくないとか言うんじゃないでしょうね？」
「…いや。」

さらに突っかかるユリを、了は含み笑いをしながら流した。
その後も一言二言突っついたが了は取り合わなかったので、ユリは仕方なしに話を変えた。無言でいても良かったのだが、気を紛らわせたかった。
取り繕ってはいるが、早くクレアに会いたい思いで気持ちが急いていた。
了もそれには気付いているのだろうが、調子を併せてくれるので、何とか平静を保っている。
が、長時間のドライブでは、話も尽きる。
一時間半ばかりぼそぼそと話した後、とうとう無言になってしまった。
座りっぱなしなのと、庁舎にいたたった一時間強の間、無意識に気を張ったり緩めたりしていたのか、自分でも意識していないほどに疲れていたようで、ユリは窓に凭れて虚ろな目で外をぼんやり眺めた。
外はいつの間にか高いビルがなくなり、車は住宅地を通ったり、妙に横幅の広い道を抜けたりを繰り返していた。
時折、横目で了を見るが、そろそろ陽も落ちてサングラスを外した以外、特に何も変わらず運転をしている。
視線を外に戻して、ゆっくり息を吐く。それが溜め息に聞こえたのか、了が「疲れたら寝ていいぞ」と言った。
「うん。そうじゃないんだけどね…。」
「…お前、免許持ってるか？」
「？」
突然、訊ねられた。
「持ってるけど。ペーパー…。」
そう答えると、了は「じゃあ駄目だなぁ」と一人で話を終えてしまった。
「何？」
「暇潰しに運転させようかと思って。」

「冗談やめてよ…！」
たまらず、ユリが身を乗り出す。
了は手軽に乗っているが、ユリにとっては高級車である。教習所以来、車は愚かバイクすら運転もしていない状況なのに、そんな車を動かせる訳がない。そりゃ、運転するだけなら出来るだろうが、傷をつけない保証など出来ない。
「そこまでムキになる事でもないだろ。」
了が笑った。
「なる事よ！　免許取ってから一度も運転した事ないのよ！？　こんな高い車、運転出来る訳ないじゃない！」
「言う程、高くもないぞ、コレ。」
「簡単に言うわねー。」
そんなやり取りをしていると、外の景色に段々と緑が多くなって来た。
改めて窓の外を見ると、切り開いた山や丘に、綺麗なマンションが建ち並ぶ地域に入っていた。有名なデパートや海外資本の大型ホームセンター、輸入雑貨ばかりを扱うスーパー、大型シネプレックスにショッピングモールをセットにして、街をテーマパークのようにしてしまった地域だ。
ここから少し山を越えると、また大きな市街地に入る。が、ここから先は大凡、山しかない。
「山に入るの？」
「ああ。」
「…相模湖の方…？」
「…まぁ、そんなところだな。」
やはり、詳しくは答えたくないようで、遠回しに了が答える。
「これから行く療養所は、特殊でな。
一般人には解放されていない施設なんだ。
一口で言えば、要人専用施設ってところだな。だから知ってる人も殆どいない。

マスコミや不審者の不法侵入を防ぐために、その存在も公にされていないし。まぁ、マスコミにとっては不可侵領域って扱いになってて、ここは取材しないって暗黙の了解みたいなものが成立しているようだけど。

法務省の管理施設で、認可がないと施設に入所する事も出来ない。」

そんな場所に、クレアがいると言うのか…。

「ただし、普通の施設ではないので、警備はしっかりしている。

医療スタッフも選りすぐりの人材が集まっている。

何があっても、大抵は施設内で対応出来るよう、設備も整っているし。

スタッフには出勤、退勤のたびにX線検査と身体検査、荷物検査が義務付けられていて、拒否権はない。

侵入者、不審物の出入りはまずないと言っていいし、何かあれば真っ先に法務省へ通報が来る事になっている。」

つまり、了たちが見張っていなくても、クレアの安全は保証されていると言いたいのだろう。

菅野と飛澤、やがての自分の事もある。

「クレア、良くなってないの…？」

「…そうみたいだな…。

こっちへ来た時と、殆ど変わらないらしい。」

「そう…。」

身の安全は保証されていても、精神的な回復がないならどんな言葉も気休めにしか聞こえなかった。

”様子がおかしい”。

そんな曖昧な表現でしかクレアについては説明を受けていないが、それで十分だった。

早く会いたい。

山間の土地特有の細いアスファルトのでこぼこした道路と、一階建ての平屋が目立つようになって来た。

小さな診療所や個人商店が疎らに建ち、生活の匂いが感じられる。道は徐々に登って行き、雲が近くなった。
再び無言になって一時間。
すっかり夜になり、山間の小路に不規則に並ぶ電灯が不気味なほどに深く山へ入った頃、木々の間にぼうっと明るい灯りが見えた。
「あそこ？」
「ああ。」
視界の先には、山中特有の真っ暗闇の中、柔らかいオレンジ色の外灯を灯した建物が建っていた。
北欧家屋のような出で立ちで、灯りのせいかクリーム色の壁と、濃い緑色の梁で縁取られている。四階建ての鉤型になっていて、奥行きもあり、相当に大きな建物のようだ。
手前には、両開きの背の高い鉄柵の門が建っており、片側だけが開いていた。しかし、片側の隙間だけでも車一台十分に通れる。ただ、敷地内の駐車スペースは、精々三台停めるのが限界のような狭さだった。
了は駐車スペースのど真ん中に堂々と車を停めると、エンジンを切って座席に凭れた。俯き、小さく溜め息を吐くので、疲れたのかと「お疲れ様」と声をかけると、了は横目でユリを見て苦笑した後、すぐに真顔に戻ってしまった。
そして、ゆっくりと口を開く。
「…さっきも言ったが…。」
「うん。」
「今日は特別に面会許可を貰った。
ここは本当に特殊な場所で、特殊な人間ばかりがいる。
だから、入寮者にも来訪者にも特殊な対応が必要な場所だ。
畏まったり、暴力的な事だったり、そういう意味じゃなく。
中に入ったら、すれ違う人、隣の部屋の人間、辺りにいる人間、働いている人間。
その誰の詮索もしないでくれ。

顔を見る事も、声をかける事も、眺める事も。
ここにいる人間は、そういうものの一切を嫌う。
用がない限り、『そこに誰もいない』くらいでいい。」
不要な接触をしない。それがルールのようだ。
「…わかったわ。」
ユリが返事をすると、了はきちんとユリの顔を見、車を降りた。
ユリもついて車を降りる。
入り口は木の扉で出来た自動ドアで、中に入ると、すっかり灯りが落ち、間接照明だけになっていた。雰囲気は大きなロッジや別荘と言った感じで、一階の殆どはロビーのようだった。入り口の前に並んだ観葉植物の向こうにはカウンターのようなものがあって、薄ピンクの看護衣を着た従業員らしき女性が座って何かをしている。脇には十人がけの大きなソファセットと何インチかやはり大きな液晶テレビがある。
人はいる筈なのに物音は殆どなく、耳鳴りがする程に静かだ。
きょろきょろしている間に、了はカウンターに歩み寄って、女性に話しかけている。
「お電話をしました。」
そう言いながら、ポロシャツの胸ポケットから何かを取り出して見せた。女性はそれを見てこくりと頷き、「どうぞ」と静かに言った。それ以上のやり取りも案内もなく、了も一つ頷いてさっさと行ってしまう。ユリが足音を殺して小走りで追いかけると、女性は無感情な表情でちらりとユリを見て、再び手元に視線を落としてしまった。
不要な接触。ユリは、なるほどと理解した。

再会◆9

了は無言のまま奥にあるエレベータに乗り込んだ。ユリも乗り込むと、すぐに扉を閉め、四階を押す。

静寂の中で、少し古いエレベータのモーター音は大きく、後ろめたい気持ちになる。

四階へ着くと、廊下が左右へ鉤型に折れて伸びている。廊下の天井に並ぶ照明は一つおきにしか点いていない。

了は左の廊下を進んで行く。

一つ、二つ…。扉を数える。扉の一つ一つは良い具合に離れていた。一部屋一部屋、かなりの大きさがあるようだ。五つ扉を過ぎ、最後の六つ目の扉を、了が小さくノックする。

「はい。」

篭った、小さな声がした。女性の声だが、聞き覚えがある。だが、クレアではなかった。

了は返事を待って、すぐに扉を開けた。が、部屋の中には入ろうとしなかった。ユリが了の後ろから覗き込むと、灯りも満足につけないままの薄暗い部屋には、二つの人陰があった。そのうちの一つが、こちらを見て立ち上がる。

「早かったのね。」

声の主の顔が弱い照明に照らされ浮かび上がった。三笠だった。

三笠はそう言うと、了に歩み寄って苦笑した。

「相変わらずよ。」

「そうか。」

了は素っ気無く言うと、三笠に出るよう目で合図をし、ユリを振り返った。そして、ユリが通れるよう、一歩だけ部屋に入ると、扉の脇に寄った。

ユリも一歩、部屋に入る。

部屋は広く、壁際の中央に置かれたベッドは大きく、来客用か二

人用のソファセットまである。角部屋なので二面に大きな窓があり、月明かりに照らされた樹木が見える。その景色を、人陰が一人、微動だにしないままこちらに背を向けて座り、眺めていた。
見覚えのある、綺麗なウェーブのかかったブロンドの長い髪。折れそうなほどに華奢な体…。
ユリは突然怖くなって、了を見上げた。
了はユリをただじっと見るだけで、何も言わない。
ただ、目付きだけは優しく、哀しげだった。
了の視線に押され、ユリがさらに一歩踏み出す。もう一歩…。次々ゆっくりと人陰に歩み寄る。
やがて、人陰を遠巻きに見る位置に立った。覗き込むように、人陰に注視する。
顔を確認しなければ。
ユリは二歩、近付いた。
「…クレア…。」
陰は紛れもなく、クレア・バークレイだった。
クレアは呆っと窓の外を見ているだけで、瞬きをするのも稀で、目は虚ろで、まるで生きていないようだった。
暗闇のせいではなく、顔色は明らかに蒼白で、記憶にあるよりずっと痩せ細っていた。
ユリは拳を握り、一気にクレアに近付いた。そして足元に膝間付くと、クレアを見上げる。
ユリが近付いて尚、クレアは動じなかった。
ユリは言葉が出なかった。
クレアの様子は、見覚えのあるものだった。
あの日の自分のような。
『様子がおかしい』。
確かに、それ以外に表現方法が見当たらぬほど、否、表現する事を躊躇うほどに、生きる事を投げてしまった顔…。
こうなる前に、何か出来なかったのだろうか。

あのままシリングへ帰すのではなく、日本に留めておけばよかったのではないか。
後悔は、留まるところを知らない。
一方で、了も扉の前でただ、苦悶の表情でクレアを見上げるユリを見つめた。
ユリが今、クレアを目の前に何を思っているかは手に取るように解る。
致し方ない状況に諦めつつ、何も出来なかった自分を悔やみ、蔑み、そしてただ、哀しい。
あの日の自分のような。
了が見つめる先で、ユリがそっと、クレアの頭を撫でた。
それが、不本意に了の胸を抉った。了は溜まらず目を逸らし、扉を静かに閉めると、廊下の壁に凭れて天井を見上げた。
ユリが傷付いた…。
あの日、シリングの医師から連絡を受けたあの日から、こうなる事は覚悟していた筈だった。
なのに、いざそれを目の前にすると、耐えられなかった。
了に非はない。今だって、あの日だって。
だが、了はそれを背負い込んでしまった。
あの日、自分とユリが負った傷は、今まで生きて来た中で何よりも深く、大きかったから。あの日から、ユリは我が身、我が心も同然のような存在だった。
護り、二度と傷付けまいと。
そのために走った六年は、あと少しで七年を迎えようとしている。
――ラストチャンスだと思ってね。
高遠の言葉が耳に木霊した。
ふと顔を上げると、脇に立っていた三笠が、了の気を察していない様子でクレアの様子を話し始めた。
「検査はギリギリ異常なし、ですって。食事は、人が見ていなければするみたい。ただ、徐々に摂取量は減っているみたい。最悪、点

滴になるだろうって…。」
「そうか…。」
「彼女、元々病弱ではないようなんだけど、普通の子よりは弱いそうよ。
若干の遺伝的な色素欠損が見られるんですって。」
「…そうか…。」
二度目の返事で、了の心がここにない事に気付いた三笠が、肩で溜め息を吐いた。
「報告は、明日するわね。
私は一旦調査室に戻って、そのあと明日の午前中まで出張だから、報告は、午後に。」
「ああ。」
三笠は了の生返事を聞き、くるりと踵を返して行ってしまった。
了はその足音で我に返り、三笠の後姿を見る。
蝋人形…。
ユリに言った言葉を、脳裏で反芻する。
幼馴染ではあるが、殆どプライベートを知らない。
単に実家が近所だったと言うだけで、一緒に遊んだ記憶もそれほど多くはなかった。ただ何かにつけ、一緒に行動させられていた事は記憶に残っている。
不本意ながら、幼少の頃は『了くんと美香ちゃん』は常に一緒にあると思い込まれていた。
いつだっただろう。
そんな『美香ちゃん』との間に、許婚関係の話が持ち上がったのは…。
確か、三笠の父親から持ち出された話だった。
何の気もない相手であった事と、父の一穂が異様なまでに拒否をした事で、再三家を訪れた三笠の父親も諦めざるを得ず、納得出来ぬという表情を浮かべたまま帰って行ったのを覚えている。
了は急にどっと疲れ、廊下のソファに腰を下ろした。膝に肘を乗

せ、項垂れる。
扉は開く気配もない。
ユリはまだ、クレアの頭を撫でているのだろうか。
クレアの様子を見せたら、取り敢えず今日のところはさっさと戻ろうと考えていた。
ユリに会わせたところで、クレアが元に戻る可能性は低い事は解っていたし、気楽に構えているがユリは愚か了自身も狙われている身だ。夜が更ければ更けるほど、狙われ易くもなる。
この事については、ユリの推測どおり、今のところ”男爵”の顔を見た、或いは接触した事のある人物が狙われているのが現状だ。
匠は運良く、”男爵”に扮したエルシとも、警備員に扮したエルシとも、一切接する事がなかったそうだ。故に、声も解らなければ、そもそもそんな人物すら認識していない。
それは逆に言うとエルシも同じ事で、遠巻きに匠を見る事はあっても、自分との接触はなかったのでターゲットにしていない可能性は高かった。
ただ、飽く迄も可能性であるから、匠には秘密裏に、高遠の要請に因って渡部と日下部を交互に護衛に付けてある。
エルシの足取りが掴めない以上は、どこにいても危険だ。ならば、なるべく人が多い場所にいた方がいい。
幾ら法務省管轄の施設といえど、所詮人里離れた山奥の療養所だ。狙う側に有利な条件ばかりが揃う。
だが、ユリを急かすのも躊躇われた。
出来る限り、満足行くまでクレアの傍にいさせてやりたい。
了は背筋を伸ばし、壁に凭れた。
天井を見上げて溜め息を吐くと、扉を見つめた。
その扉の向こうでは、ユリがずっとクレアの髪を撫でていた。
こんな事しか出来ない自分が悔しくて、手が止まらなかった。
だが、クレアがその間、こちらを見る事もなく、そしてユリを意識もしていない事が解ると、ここにいる事がクレアのためにならな

いのではないかと思い始めた。
ユリは撫でる手を止めると、ゆっくり立ち上がった。
ずっとしゃがんでいたので、少し足が痺れていた。
ユリはクレアを見下ろすと、暫し見つめた。
あの日のユリも、カナエや匠の存在は意識していなかった。
こうなってしまうと、自分がいる世界には、”何もない”のだ。
だから話しかけられても通じないし、どんな言葉も伝わらない。
自分が取り込もうと思ったものと、それが合致しなければ、何をしても無意味に消えてしまう。
今のクレアには、ユリは必要ないのだ。
クレアが元に戻るために何が必要か、髪を撫でながらずっと考えていたが、間違っていた。
クレアが必要なものと自分が合致するのを、待つしかないのだ。
ユリはきゅっと唇を噛み締めると、クレアから一歩離れた。
「また、来るからね。」
そう言って、泣きそうになった。
泣いてはいけない。
ユリは息を大きく吸い込み、拳を握り締めると、部屋を出た。
廊下では、疲れた老人のようにソファに座り込む了がいた。出てきたユリを見て、心配そうな顔をする。
「…いいのか？」
「うん。ごめんね、待たせて。」
ユリはそう言うと、淡く笑って見せた。
きっと了は何もかも見透かしているだろうが、それでも、堪えていないと主張しておきたかったのだ。
案の定、了は少し眉間の皺を深くして、そのあと俯いた。
が、ユリの気を汲んでくれたのか、すぐに顔を上げて苦笑した。
「行くか。」
「うん。」
短く返事をし、歩き出した了に続いて、一階へ戻る。

相変わらず暗いエントランスのカウンター前にいる女性に小さく礼を言い、外に出る。
車に向かう数歩の間に、風が吹いた。無意識に、体が武者震いをする。
山中の夜はやはり冷える。腕を擦ると、鳥肌が立っていた。
了も寒いようで、ジーンズのポケットに手を入れ、肩を竦めて縮まっている。
寒さから足取りは速くなり、最後には小走りで車に乗り込むと、二人揃って溜め息を吐く。
「こんなに寒いと思わなかったな…。」
了が呟くと、ユリもシートベルトを締めながらこくりと頷く。
「こんなに気温が違うのね。
で、戻るの？」
ユリが問うと、了が車のエンジンをかけながら「ああ」と言った。
「取り敢えず、都心まで戻る。
庁舎の近くまでな。」
「どこ？」
「それは行ってのお楽しみ。」
そう言って、了は意味ありげに笑うと、車を発進させた。
行きよりさらに暗くなっている気がする道を、ヘッドライトと時折過ぎる外灯の灯りだけを頼りに走る。
道のカーブも緩やかだが、暗さ故にスピードも落としがちになる。が、住宅地へ出、道の舗装が整って来るなり、了はスピードを上げた。法定速度ギリギリの速度で、出来る限り無駄なく走ろうとしているようだ。
ふと車内の時計を見ると、夜の九時を過ぎていた。もっと遅い時間だと思っていたのは、山の闇のせいだったのだろうか。
だが、ここから凡そ二時間半。庁舎付近に戻る頃には、真夜中だ。
療養所を出てから、二人は言葉少なかった。
長距離の運転で疲れているのであろう了と、クレアの事がすっか

り堪えてしまったユリのどちらも、口を開ける事自体に気力が必要な状態だった。
堪らず窓に凭れると、了が「寝ててもいいぞ」と言った。今日二度目だ。
それまで眠気は感じなかったが、言われると何だか眠くなって来た。
「うん。」
そう返事をすると、ユリは目を閉じた。すると、体がずんと重くなった。思っていた以上に疲れているようだ。ユリはそのまま眠る事にした。
やがて、ユリの小さな寝息が聞こえ始めて、了がちらりとユリを見た。
窓に凭れ、無垢な寝顔を浮かべている。
その表情に、ふと笑みが零れた。
せめて眠る時くらい、安らかな気持ちでいて欲しかった。
了はほっと安堵の息を漏らすと、運転に集中した。
道が徐々に混み始めた。家も徐々に多くなり、建物の高さも高くなり始めた。
山の中とは正反対に、いくら走っても賑やかだ。
九時という時間は未だ、この辺りの人間には昼間のようだ。
前方車両のテールランプと、すれ違う対向車両のヘッドライトと、ネオンの灯りで夜の闇も感じない。
ここから都心までは、ずっとこんな感じだ。
了は音量を極力下げてラジオを点けた。チャンネルを回していくと、学生の頃に流行っていた番組が流れた。だが、その当時のレギュラーＤＪは既に別のメンツに変わってしまっていて、不思議に思って暫く聴いていると、どうやら一週間だけ復活して放送しているようだった。今流れているのは、学生時代に聴いていた当時のレギュラーの中でも、一番好感を持っていた女性歌手の声だ。
『この時間だと、残業帰りか、平日有休とって、彼女と遅くまでデ

ートな人かな？　聴いてるの。長距離の運転手さんもいるか。運転、お疲れ様。
私も四十過ぎたけど、この時間は駄目だね、疲れちゃって。
とか言って、これ収録なんだけど。』
そう言って、女性歌手が笑った。
当時からこの女性歌手は、しゃがれた低い声でゆったりと話す。それは今も何も変わらず、女性はしゃがれた声でふふふと笑っている。
『厭な事件多いね、相変わらず。
ついこの間も、うちの近所のマンションで人が襲われたらしいんだ。頭を殴られて、そのあとどうなったんだろう？
その人、家の玄関に倒れてたらしいのよ。
マンションも防犯カメラ点いてるけど、所詮点いてるだけだからさ、その時はいくらでも侵入出来るよね。
私はその日から、チェーンかけるようになったんだよ。
それまで鍵だけだったけど。』
話を聞いていると、飛澤や菅野の事件ではないかと思ってしまう。
否、ここ暫く、都内のマンション敷地内で頭を殴打される事件はなかった筈だ。いつの収録かはわからないが、恐らくは、飛澤か菅野のどちらかの事件の事だろう。
了は鼻で溜め息を吐いて、指先をラジオのボタンの前で一瞬遊ばせ、別のチャンネルに切り替えた。
女性歌手の声は聴いていたかったが、話自体は聞きたくなかった。
勿論、この女性歌手がずっと事件の話をする事など有り得ないだろうが、何となく、出始めに聞いてしまった事で、意気消沈したのだ。
この間に、車の混雑も若干和らいだので、了は少しスピードを上げた。
時計を見と、十時手前だった。
この時間になると、了でも幾らか眠気を感じるようになる。

普段は明け方まで起きている事もザラではあるが、決して眠くならない訳ではない。寝ずに仕事が出来ている現状が、周りは愚か了本人にすら驚くべき事なのだ。
了は念の為と途中のコンビニに寄り、ユリを起こさぬよう静かに車を降りると、小さめのペットボトル飲料を何種類か買った。眠気覚ましと、目的地に着く前にユリが起きた時のためだ。
車に戻り、エンジンをかける。エンジンをかける時が一番大きな音がするのだが、ユリはそれでも起きなかった。余程深く眠っているようだ。少しだけ、罪悪感を感じる。
了は飲み物をドリンクホルダーに挿すと、シートベルトに手をかけた。その時、携帯電話が震えた。
「はい。」
『とーるちゃん？　ボク。』
高遠だった。
「お疲れ様です。」
『もう帰り中かな？』
「はい。」
『そう。療養所で何か変わった事、なかったかい？』
「変わった事…？　いえ…。
ああ、そういえば、三笠がいました。」
『美香ちゃんが？』
「はい。急用って、なんだったんです？」
『うーん？　美香ちゃんが療養所に行くとは聞いてないよ。
急用は、ボクが出したんだけど。そっち方面への用事だったから、序でに寄ってくれたのかな…？
ま、いっか、明日聞いてみよう。
そのほかは、特に変わりなしかな？』
「はい。」
『そっかそっか。
ユリちゃんは元気かな？』

問われて、了がちらりとユリを見た。変わらず、すやすやと眠っている。
「…寝てます。」
了が言うと、高遠がむふふと笑った。
『そっかそっか。
わかった。じゃあ、明日またよろしくね。』
「はい。」
そう言うと、高遠が電話を切った。
了はシートベルトを締め、車を動かす。
道に出、赤信号で停まると、高遠の言葉を思い返す。
――美香ちゃんが療養所に行くとは聞いてないよ。
――そっち方面への用事だったから、序でに寄ってくれたのかな…？
三笠は、調査室で唯一の女性という事もあるが、割と気の利く女性ではあった。頭の回転が速いのだろう、人への気遣いや、序での用事をこなす事が巧かった。
療養所に三笠がいた時、何故とは思ったがそれ以上の疑問は沸かなかった。
ただ、これはただの勘ではあるのだが、ユリに三笠を近付けたくはなかった。
ユリは、何となしに三笠を意識しているようだし、その所為で気疲れを起こされても困る。三笠の口から、在らぬ話、ユリに無用な話をされそうで、怖いというのもある。
だから、仕方のない時を除いて、なるべくユリと三笠を近付けないようにしたい。
信号が青になり、車が流れ始める。思いの外空いているのと、行きには使えない近道があるので、予定より早く着きそうだった。
今日の目的地。
ユリには言っていないが、知れば少しは喜んでくれるだろう。出来れば、目的地までは眠っていて欲しい。そう思うと、一々ユリを

気にする気配がユリを起こしてしまいそうに思えた。
了は窓辺に頬杖を突いて、到着まで無心になる事にした。

再会◆１０（前書き）

映画のモチーフ（というかまんま）は『Ｔｈｅ　Ｆａｌｌ　落下の王国』という『ザ・セル』などを手がけたターセム・シンの映画です。

美しい映像と、可愛らしい少女カティンカ・アンタルーちゃんが絶品の映画です。

再会◆１０

ガタン、と体が揺れて、目が覚めた。
目を開けると、知っているが見慣れない場所が、窓の外に見える。
もぞもぞと動くと、「起きたか」と了の声がした。
窓に寄りかかったままの体を起こし、きちんと座り直すと、改めて窓の外を見る。だが、何やら地下に入ってしまったようで、コンクリートの壁と、やけに高級な風貌の車ばかりの風景になってしまった。時折、コンクリート製の太い柱に『１８』や『２５』と言った数字が書かれている。どうやら、駐車場のようだ。
了は『２９』という数字の書かれた柱と『３０』と書かれた柱の間にある八つの駐車スペースに車を停めると、「着いた」と言ってエンジンを切り、さっさと降りてしまった。数字は、駐車エリアのようだ。
ユリも慌てて下りると、了はトランクからユリの鞄を取り出していた。
トランクを閉め車に鍵をかけると、鍵を持った手で「あっち」と前方を指差し、歩き出した。
「ここは…？」
後ろから追いながら問いかけると、了が振り向いてにやりと笑った。
「もうちょっとのお楽しみ。」
「？」
ユリは首を傾げながら了に着いて行く。
了が向かった先にはエレベータがあって、昇りのボタンが脇にあった。了がボタンを押す。
見回してみると、駐車場のコンクリート壁は、普段見る地下の雑多なものとは違い、照明に照らされて艶やかに光っていた。若干白い色をしていて、パイプなども見えない事から、利用者にかなり気

を遣って作られた駐車場だという事が解る。
よくよく見ると、柱の数字はシンプルな額に入って、柱にかけられているようだった。
ポンと軽やかな音がして、エレベータの扉が開いた。
了が乗り込む。ユリも続いて階数ボタンを見るが、何故か『1』『B1』『B2』しかなかった。
「…？」
眉を顰めるユリの横で、当たり前のように了が『1』を押す。
扉が閉まってすぐにエレベータは動き、『B1』を通り越して『1』のところで扉が開く。
出ると、全面ガラス張りのフロアに出た。狭い中にやや金色かかった銀色の小さな扉の付いた箱が沢山並んでいる。小さなダイヤルと数字のプレートが付いているので、ポストだろうと思った。エレベータのある背後の壁も銀色で、左側にある角に自動ドアらしき扉がある。その脇には見慣れぬ機械がある。
細く、小さな筋があるので、どうやらカードを通すようだが、前面にパネルのようなものがあって、何か印が映っている。
了はポスト群の中の一つを開けると、中から幾つか封筒を取り出し、真っ直ぐに機械に歩み寄ると、カードを通してパネルを覗き込んだ。パネルに薄緑色のラインが一瞬過ぎり、ピ、という小さな電子音が鳴っると、銀色の扉が左右にスライドして開いた。
「先に入れ。」
言われて、先に扉を潜ると、中は検察庁のロビーなど比べ物にならないほど広々とした空間になっていて、シンプルながら高級感のある金色のランプが天井から何本も下がり、空間を煌々と照らしていた。右手には四人がけのソファセットがニセット並んで置かれていて、下には控え目な色合いの絨毯が敷かれている。ソファもテーブルも一見するとシンプルだが、気の遣われたデザインだ。観葉植物は青々と葉を広げ、人の導線を邪魔しないよう配置されている。
正面の奥にはエレベータが二基並んでいて、扉はポストなどと同

じ銀色をしている。
左手にはカウンターがあって、男性が一人、立っていた。男性は俯いて手元の何かを弄っている。
ぼんやり突っ立っているユリの脇を、了が追い越してカウンターへと歩いて行った。ユリが着いて行くと、カウンターの男性がにこりと笑った。
「おかえりなさいませ、蕪木様。」
「ただいま。来客があるので、お知らせに来ました。」
「有難うございます。来客用カードはご入用ですか？」
「要りません。一人では出入りしませんので。」
「畏まりました。」
「ただ、彼女宛の来客は、すべて断って下さい。」
「承知致しました。」
無駄のない、簡単なやり取りをして男性に会釈をすると、了は奥にあるエレベータへ向かった。ユリも会釈をして、了を追いかけるために体の向きを変えたが、横に流れる視界の中、男性の後ろの壁に文字が見えた。歩きながら見、ユリは目を見開いた。
”ＬＡＤＹＡＳＨ　ＴＯＷＥＲ　ＭＡＮＳＩＯＮ”…。
驚いて了の背中を見る。
レディアッシュタワーマンション。
了の住むマンションではないか…。
「…ちょっと…。」
ユリがやっと出した声で了を呼ぶと、了はエレベータのボタンを押しながらユリに振り返った。
「ここ…、あのマンションじゃない…。」
「そうだよ。俺が住んでたの忘れたか？」
「忘れてないわよ…！　でも…、いいの？」
「何が？」
「…入っても…。」
「俺が入れてるんだから、いいんだろう。」

「え、まぁ、そうなんだけど…。」
しどろもどろに問うユリを面白そうに笑った後、了は真顔に戻って、
「ここしか安全な場所が思いつかなかったんだよ。」
と言った。エレベータのいるフロアを表示するディスプレイを見上げる。エレベータは最上階にいたようで、途中で止まる事無く下へと降りて来ている。
「庁舎に寝泊りさせる訳に行かないしな。ホテルは案外と人の出入りには無頓着だし。取り敢えず、俺んちにいて貰う事にした。」
エレベータが到着した。乗り込んだところで、了に鞄を持たせっぱなしだと気付き、「鞄、ごめん」と持とうとして「いいよ」と言われる。
了が『29』のボタンを押して、扉を閉めた。なるほど、駐車場の柱の数字は階数だったのだ。
「このマンション、意外と人の出入りには厳しくてね。
来客拒否をすると、インターフォンをカウンターに切り替えられて、居留守の応答をしてくれたり、勝手がいいんだ。入るには絶対にカードと網膜認証が必要だから、知らない人間は入れない。清掃も、基本的には住人が行う事になっているし、修繕の時くらいだな、その辺りが緩くなるのは。
明日は、俺があちこち行かなきゃいけないところがあって、ほとんど調査室にいられないのと、高遠さんも渡部も日下部も外出の用が入ってるんで、誰もユリを護衛出来ないから、一日俺んちにいて貰う事になってる。」
「え…。」
ユリが声を漏らすと「嫌か？」と了が振り返った。
そういう訳ではないので慌てて首を振る。
「そうじゃなくて…。」
「別に盗まれて困るものはないぞ。」
「盗まないわよ！」

ユリがムキになると、了が笑った。
「ここにいて貰った方が、俺が安心出来る。
連れて周る訳に行かないし、ここは、何かあればすぐに対応してくれるから。」
よほど、管理会社を信用しているようだ。
「その方がいいなら、それでいいけど…。」
そう言いながら、ユリは壁に凭れ、ふふと笑った。三ヶ月前のあの日から、気になっていたのだ。
了も、傍目でその様子を見、ユリに悟られぬよう満足げに息を吸い込んだ。
エレベータはあっという間に二九階に着き、ポンと音を鳴らしながら扉が開いた。
エレベータ前は少し長い廊下になっていて、すぐに開けた空間に出る。真四角の空間の中央には大きな葉の観葉植物があり、エレベータの左右に二つずつ扉がある。玄関だろう。と言う事は、やはりいつぞや見たチラシどおり、一フロアに四世帯が入っているようだ。扉はそれぞれ少し窪んだ壁の奥にあって、玄関から隣の玄関を覗く事は出来ない。
了は左手の二つのうちの右側の扉に立って、ジーンズのポケットから鍵の束を取り出すと、一つ選んで鍵穴に差し込んだ。ガチャリとやや重たい音がして、扉が開いた。了がその扉を大きく開けて、先に入った。
ユリが続くと、鞄を置いた了が振り向いて鍵とチェーンをかけた。
そして、「どうぞ」と言って素早く靴を脱ぎ、さっさと行ってしまう。
「お邪魔します…。」
ユリは小声で言うと、きょろきょろしながら靴を脱いだ。
玄関は広々としていて、真っ白い壁に濃いこげ茶の家具がよく映えている。大きな鏡と添え付けのシューズボックスがあり、上は小さなカウンターのようになっているが、灰皿のような銀色の小さな

器があるだけで、物はほとんど置かれていない。靴は何足か出ているが、恐らくきちんとしまわれているのだろう、散らかっている印象は皆無だ。
シューズボックスの脇には、見慣れぬ道具が並べて壁に立てかけてあった。
黒いボディプロテクターのようなものと、硬そうな帽子、先に針金のようなもので作ったケバケバとした毛玉のついた細長いもの、そして、ブーツにグローブだ。
微かにケモノの臭いがしたので、はたと思い出した。
（乗馬道具か…。）
よく見ると、ブーツのつま先に少しだけ泥が付いていた。
靴を脱ぎ、自分のを整える序でに了の靴も整え、廊下を進む。廊下は五メートルほどだが、ユリの家よりずっと長くて広い。左の壁沿いに引き戸が一つと扉が二つ。引き戸は恐らくバスルームだろう。扉のどちらかはトイレかと思った。右沿いの壁には扉が一つで、少しだけ開いていた。中は真っ暗だったが、廊下から差し込む光が届く範囲は薄ぼんやりと見る事が出来た。スーツが何着かと、大きなスーツケースが見える。クローゼット代わりに使っているのだろうか。
さらに進むと、突き当たりに縦長の窓のついた扉があり、中へ入ると、ユリの家の一フロアよりも広い部屋に出た。
右手に大きな窓があり、中央付近にこれまた大きなベッドがある。目隠しか、薄手のレースのような布が天井から垂れ下がっている。部屋の角にはソファと小さなテーブル、大きなテレビがある。左手にはバーのようなカウンターがあり、その奥はキッチンのようになっていた。
この部屋だけを単純に例えるなら、ミニキッチン付きワンルームなのだが、何もかもが大きかった。冷蔵庫すらユリの家のものと同じくらいの大きさがある。
ただ、確かに面積は広いのだが、それを助長しているのは紛れも

なく、家具や生活雑貨の少なさだ。
必要最低限のものしかない、という印象だ。
しかも、男性臭さは皆無だ。
「綺麗だけど…、随分殺風景ね…。」
ユリが言うと、了が鼻で笑った。
「必要ないからな。家には寝に帰って来てるだけみたいなもんだし。」
了の手元で、ぱちんと何かが弾けた。目をやると、電気ケトルが沸騰したようだった。了は大き目のマグカップを二つ食器棚から出すと、珈琲のドリッパーと、有名な海外ブランドの紅茶のティパック缶を両手に持って、ユリに見せた。どちらがいいか、という事のようだ。
「…紅茶…。」
と言うと、了が片方のカップに珈琲を、もう片方に紅茶をセットして湯を注いだ。
手持ち無沙汰で、ユリは窓に歩み寄った。窓には薄手のカーテンだけがかかって、厚手のカーテンは脇に寄せられたままだった。ニ九階の高さでは、滅多な事では家の中を覗かれたりはしないのだろうから、開けっ放しでも問題なさそうだった。
窓の外は、眼下で夜景がキラキラと煌いていた。
「少しだったら、出てもいいぞ。」
了が背後で言った。
「ほんと？」
言いながら、ユリは窓の鍵を開け、ベランダに出た。ベランダも広々として、こまめに掃除をしているのか、綺麗だった。窓の脇にベランダ用の外履きがあったので拝借し、出る。
びゅっと一瞬強い風が吹いた。
ユリは身構えて目を瞑ったが、その拍子にバランスを崩してしまった。後ろによろめくと、背中を支えられた。振り返ると、両手にカップを持った了が立っていた。

「ん。」
と言って、了がカップを差し出した。ほんのり、紅茶の香りがしてくる。白濁色だったので、ミルクを入れてくれたのだろう。
「ありがと。」
そう言って口に含むと、甘いダージリンとミルクの味が口いっぱいに広がった。濃いダージリンとミルクの配分は完璧と言っていい。大袈裟だが、今まで飲んだ中で、一番美味しいミルクティかも知れないと思った。
ユリは外側の窓に凭れて、了は内側の窓に凭れて、暫し無言で夜景を眺めた。
「…いい暮らししてるじゃない…。」
つんとして言うと、了が笑った。
「眺める暇もないよ。」
「そんな忙しいの？」
「…忙しいというか…。」
「心の余裕がね…」と言って、了が珈琲を啜った。
「今、こんな景色だっけ、と思ってる。」
そう呟いて、了が笑った。
ユリはその様子を見て、複雑な心境になった。
元はと言えば、ユリの事件を追うために検事になったのだ。理由はそれだけではないかも知れないが、その一端にユリの事件がある以上、妙な話だが、責任を感じる。
だがそんな事を口にすれば、絶対了に怒られるだろう。だから言わない。
その代わり、一緒にいる間は、楽しくなるようにしようと思う。
「検事さんって、お給料いいんだ？」
「そんな良くないな。刑事ん時よりはまだマシだが。」
「そんな良くない人は、こんなとこ住めないでしょ！
ここ、チラシだと、最下階でも月の家賃三〇万って書いてあったもん！

三〇万よ！？　フツーのサラリーマンの一ヶ月のお給料よ！」
ユリが若干興奮すると、了がにやりと笑った。
「俺、ここのオーナーと知り合いなの。だから格安で借りてる。
月十万くらいかな…。」
「は！？」
ユリが食いかかった。夜中なので、一応声は殺したのだが、お蔭で妙な声になってしまった。
了は、ユリの反応に含み笑いをしながら、またカップに口をつけた。
「その家賃だろ？
いくら金持ちって言ったって、そこまで金額出すくらいなら、別の場所に買っちゃった方が得だからな。賃貸契約も順調には行かなかったんだよ。
その上、立地はいいけど地代が高くて、生活に必要な施設が作れないから近くにないしな。
住むには向いてないんだ。
匠さんのビルみたいに、事務所兼自宅にしても、あのくらいの規模のビルじゃないと割に合わない。
地代が高いから、賃貸にしても分譲にしても、採算が合わないんだ。」
「じゃあ、何で建てたの？」
「広告のためだよ。
ここの建設会社と、管理会社のね。景気よく見せたいんだ。
ま、実際、ここの住人の中には、本当に正規の賃貸料払ってる住人もいるから、大きな声じゃ言えないが。」
「何その美味しい話…。」
ユリが呆れると、また風が吹いた。空には月が見えるが、少し雲がかかっている。風の所為か、体も少し冷えて来た。沸かしたての湯で作ったミルクティも、あっという間に冷めている。
「入るか。風邪ひく。」

「うん。」
そう言って部屋に入ると、外履きを元に戻し、窓を閉めて振り返ると、了が廊下に出て行こうとしていた。
「風呂、入るよな？」
「え、あ、うん。借り…ます。」
ユリが答えると、了が手招きをした。
着いて行くと、了は廊下の引き戸を開けて中に入って行く。中を覗くと、これまた綺麗に整頓されたバスルームだった。大きな洗面台もあるが、鏡も台もぴかぴかに磨かれている。
「何であんたんち、こんなに綺麗なの？」
「ほとんど家にいないからだろ。」
ユリの問いにそう答えながら、了は一頻りバスルームの説明をした。
「洗濯は、したければ明日すればいい。俺いないし。」
「うん。」
「あと、着替え持って来たよな…？」
「うん。…あ。」
ユリが止まった。着替えは確かにあるが、日中の心配しかしていなかった。部屋着の代わりになりそうなものはあるから、あれで凌ぐか…。などと考えていると、了が向かいのクローゼット代わりにしている様子の部屋から、Tシャツと短めのパンツを持って来た。袋に入っているので、新品のようだ。
「ん。」
「ありがと。ごめん。」
「ま、あとは適当に使って構わないから。」
「うん。ありがとう。」
ユリが礼を言うと、了は静かに戸を閉めて部屋に戻った。
ユリは念のため引き戸の鍵を閉め、服を脱ぎ始める。別に何を意識している訳ではないのだが、つい音を潜めてしまう。脱ぎ終わった服を丁寧に畳んで、バスルームに入り戸を閉めると、むわんと湯

気が体を包んだ。湯も張ってくれたようだ。
他人の家に泊まるなど、ここ数年しなかったので、妙な緊張をしていた。
取り敢えずシャワーで体を流し、持って来たソープ類で一通りを洗うと、やっと緊張が解れた。
改めて見回すと、ユリの家の倍の広さがある。
何もかもが大きい。
泡がすべて流れたのを確認して、湯船を見つめた。何となく、浸かるのを躊躇う。了を嫌悪しているとかそういう事ではなく、綺麗過ぎて汚してしまうのが嫌なのだ。
が、そんな事を考えても仕方ないので、思い切って浸かる事にした。
（お風呂が大きいと、落ち着かないものね…。）
そんな事を思いながら、内心満更でもなく、手足をうんと伸ばした。
どこもかしこも綺麗なのは不自然だ。
きっと、ユリが来るからと気を遣ってくれたに違いない。
湯船の縁に顎を乗せ、天井を見上げる。湯気で曇った天井には、四角いお洒落なランプがぶら下がっている。
まさかここへ来て、こんなにあれこれと了のプライベートを見るとは思わなかった。
三ヶ月ぶりに再会して、一週間経たぬうちの今日だ。
スパンとしては決して長くはないが、再会まで、偉く時間がかかったという気分だった。
それほど会いたかったのか、印象的だったのかは解らない。もう少し再会までに時間がかかっていたら、大して何とも思わなかったかも知れない。
ちょうど、会いたくなる時期なのだ。
きっと。
ユリは静かに立ち上がり、用意して貰ったタオルを手に取った。

タオルはふかふかで、柔らかかった。これも、新しいものに違いない。
申し訳なさしか出て来ない。もっと雑多に扱われていたら、気分も楽だっただろうか。
否、違う。雑多だったら、今頃心が折れていたに違いない。
そんな事も見越されているようで、三ヶ月前に匠に言われた一言を思い出す。
――そのうち蕪木クンに頭が上がらなくなる。
その通りだった。
体の水気を取って、渡されたシャツとパンツを身に付ける。流石にこれらは自分のものらしく、サイズはかなり大きい。こんな大きな体だったかと思う程だ。パンツは長すぎるので、三回ほど折ってショートパンツの丈にした。
髪がまだ濡れているのでタオルは持って行く事にして、脱いだ着替えを丸めて鞄に入れると、部屋に戻る。
部屋では了が、カウンターに書類を広げているところだった。
「お借りしました。」
と言うと、了は「はいはい」と言いながらユリにカップを差し出した。手に取って覗くと、少し黄色い、温い液体が入っていた。柑橘類の皮のようなものが浮いている。飲むと、甘い柚子の香りがした。
「適当にその辺座っていいぞ。眠いなら寝てもいいし。」
了は資料をこれでもかと広げて、ユリを見ずに言った。
言われると眠いのだが、もう少し話がしたかったので、ユリはカウンターの空いている席に腰をかけた。
「腹減ってるなら何か用意するぞ？」
「ううん。いい。あんまり空いてない。
これから仕事するの？」
「ああ。明日までに目を通さないといけないからな。」
時計を見ると、もう夜中の一時を過ぎていた。広げている資料は

膨大だ。これにすべて目を通すのに、ユリなら確実に丸一日かかる。
「…邪魔？」
「いいや。」
そうは言うが、了はユリを見ない。すでに仕事モードのようだ。
傍にいないほうが、いいだろう。
「…寝るね。」
そう言うと、了がやっとユリを見て、ベッドを指差した。
「使っていいぞ。」
「え、でも…。」
「俺は適当にその辺で寝るから。」
了が手元に視線を戻しながら言う。
「…。」
様子から、どうせ、これ以上何を言ってもベッドで寝ろと言うに違いないと思った。
ユリは素直にベッドに向かうと、ゆっくりと腰を下ろした。
自慢ではないが、男友達は皆無だ。
彼氏が出来た事はあるが、実は高校まではずっと女子高だったから、ほとんど男性と交流を持った事もない。
だから、飽く迄も聞いた話や作り話でしか知識がないが、男性のベッドはもっと乱雑に荒れているものだと思っていた。仮令今回のように来客があって、少しは整頓したにしても、限界というものがあろう。
そんな事を思ってしまうほど、了のベッドは綺麗だった。
腰を下ろした事で出来てしまったシーツの皺がとても気になる。
誰かに頼まないと、ここまで綺麗には出来ないのではないだろうか。そう思うと、ヘルパーのような者がいるのかもしれない。
ただ、訊ねるのは憚られ、ユリはもう一口柚子茶を飲むと、きょろきょろと部屋を見回した。
「電気消したいなら、ベッドの上にリモコンあるから消していいぞ。退屈ならテレビ点けるなり、ＤＶＤ観るなり好きにしてていいから。

」
了は相変わらず、こちらを見ずに言う。
確かに退屈はしていたので、ユリはテレビの横にあるクラシカルなデザインの背の低い本棚に歩み寄った。ハードカバーの書籍が何冊かと、洋画を中心としたＤＶＤが何本か。あとは参考書や、六法全書のような法律関連の分厚い本が並んでいる。ところどころ空洞になっているが、ソファの上や、了のいるカウンター上にちらほら本が見える事から、それらが入っていたのだろうと思う。
ユリは並ぶＤＶＤを左から順番になぞって行った。
ＤＶＤは三〇本ほどあるだろうか。聞いた事がある有名な映画から、全く聞いた事のない海外ドラマまであり、ジャンルも比較的幅広く揃っている。
その中で、昔マミコが面白いと騒いでいた映画を見付けた。
『落ちる王国』と言う、何かにつけて落ちる描写がある映画だと言っていた。こう言ってしまうと身も蓋もないのだが、ロケ地がすべて世界遺産であり、元々自然光の取り入れ方に定評のある映画監督で、映像レベルの高さは申し分ないという事だ。ストーリーは一見在り来たりな冒険物だが、ちょっと変わっているらしい。
ユリはこのＤＶＤに決めて、テレビの下にしゃがみ込むと、ＤＶＤをセットして再生ボタンを押した。
ベッドに戻って、少し考え…、拓き直って寛ぐ事にした。
大きくて弾力性があり、尚且つふわりとしているクッションや枕の位置を少し変えて、よっかかって座って脚まで伸ばす。
ベッドは、ユリ独りでは大きすぎ、贅沢すぎる。
ちらりと了を見ると、赤ペンを片手に資料を嘗め回していた。ユリはまずテレビの音量を小さくし、部屋の電気も消した。
了の手元は、カウンターに置いてある球体の間接照明がオレンジ色に照らしている。
一方でテレビから漏れる青い光が、暗闇の中で踊る。
ユリが入浴している間に締めたのであろうカーテンは、外の光の

一切を遮光して、部屋の中は完全に闇と青とオレンジの光だけの空間になった。
ＤＶＤは配給会社のフライヤーから始まって、同時期発売のＤＶＤのプロモーションや、注意書きが素早く流れた。その後、ふと暗転して、白い字幕が浮かび上がる。
『お話を聞かせてあげるよ。』
『聞かせて！』
『でも、交換条件がある。』
『なぁに？』
『一階の薬置き場にある茶色い小瓶を取ってきて欲しいんだ。夜、眠れなくてね。』
『お話聞き終わってからでいいでしょ？』
『ああ、いいさ。』
『いいわ。約束ね！』
『ありがとう。では、始めよう。これは、とある騎士と、王女と、少女の物語だ…。』
小さな声で、男性と少女の声が聞こえる。
映画は、売れない俳優をしている男性が、映画の撮影中に落下事故で両足に回復見込みのない重傷を負い、搬送先の病院で少女と出会ったところから始まる。何気ない日常のシーンが延々続くのだが、不思議とユリは映画に釘付けになった。
外見はいいがどこかぱっとしない主人公の男性と、あっという間に仲良くなった人懐こい可愛らしい少女の友情と、男性が時折見せる絶望の眼差し、純粋なまでに男性を信じる少女の明るさの対比が、心の中をぐつぐつと煮出すのだ。
だが、面白いのだが眠気も襲って来た。話の流れからすると、あと半分くらいだろうか。そう思いつつ、知らず知らず抱きかかえたクッションに蹲って、必死に眠気と戦う。
ストーリーの奥底に渦巻く感情はとてつもなく激しいのに、映像は優雅で優美でなだらかで。その映像に、眠気を誘う効果がありそ

うだ。
観たい。観たい…。
そう思い、しょぼしょぼと閉じようとする瞼を上げるが、その抵抗も虚しく、やっと終盤というところで、ユリの記憶が一旦途切れた。
が、ふと目が開いた。
体が、クッションを抱いたまま横に倒れている。視界には、カウンターに向かって資料をとっかえひっかえする了が見える。テレビからは音が聴こえない。ＤＶＤはとっくに終わったのだろう。加えて、テレビ側から光を感じない事から、了が消したのかも知れなかった。
何時だろうと思い、ベッドの脇にある半透明のアクリルで出来たデジタル時計を見ると、四時になったところだった。
体を起こすが、了がこちらに気付く気配がない。若干肌寒さを感じ、畳んで置いてあった薄手のタオルケットを頭から被って、暫く了を観察する。
赤ペンで何かをメモしたり、一つ資料を眺めながら、手探りで別の資料を探し、手にしたかと思えばそちらを注視し。印代わりか、時折クリップを資料にかけ、何やら書いた付箋をそこに貼る。カップを口に運ぶ最中ですら、視線は資料に注がれたままだ。
忙しい。
風呂に入ったのか、帰って来た時と服が変わっていた。白いＴシャツに、膝丈の黒いパンツを穿いている。カウンターの椅子は脚が長いので、ユリが座っても足が床に届かなかったのだが、了は平然と足を床につけ、座っている。ただ、ちゃんと座り続けるのが辛いのか、椅子の脚の段に置いた左足が、床に付いたり段に上がったり、カウンターに突っかけたりしている。
眠らないのだろうか。
顔はかなり眠そうだが、手元はてきぱきと動いて余念がない。
こんな生活を、続けているのだろうか。だとすれば、痩せたと思

ったのは気の所為ではないと思った。夜な夜なこんな時間まで起き、日中はあちこち出て周っていれば、痩せもするだろう。
ユリは堪らずベッドから下り、タオルケットで体を包んだまま、了に歩み寄った。足音は極力殺した。
了の右横少し後方に立って、数十秒。
ふと右手にある資料に目をやった了が、やっと人の気配に気付いた。目を見開いてユリを見上げる。よほど驚いたらしい。
了は一瞬ユリを見上げて止まった後、溜め息を漏らしながら苦笑した。
「…起こしちゃったか？」
ユリは無言で首を横に振った。そのままユリが何も言わないので、了も少し心配そうにユリを見上げたまま手を止めた。
「寝ないの？」
寝起きだからか、しゃがれた声でユリが問うと、了は俯いて小さく笑った。
「うん。もうちょっとかかるな。」
了の答えに、ユリが黙った。ユリは、少し不貞腐れたような、哀しそうな顔で了を見下ろす。
灯りが邪魔で眠れないのかと思った了が、「少し暗くしようか？」と訊ねるが、それにも黙って首を横に振って、ユリはただ、了を見下ろした。
暫く二人でただ見つめ合っていたが、了が溜め息を吐いてペンを置くと、ユリに向いて言った。
「寝ないと、疲れるぞ。」
その言葉に、ユリが微かに頬を膨らませた。それは、ユリこそが言いたいセリフなのだ。
「了が寝るまで寝ない。」
「…。」
依怙地のような顔で言うユリに、了は困惑した表情を見せ、広げた資料に視線を戻した。了としては、そう言われても、という気分

なのだろうが、ユリは譲る気はなかった。
了もそんな気がしたので、名残惜しそうに資料を眺めた後、苦笑しながら溜め息を吐いて、すくと立ち上がった。
そして、球体の照明を消すと、真っ暗闇の中、ユリの目の前に立った。
「…？」
ユリが首を傾げる…、そんな暇もなく、了はユリを抱きかかえた。
「！」
ユリが慌てると、了の腕から体がずり落ちそうになったので、慌てて了の首に腕を回した。突然の事ですっかり動揺してしまったユリの心臓が高鳴る。
了は動じもせずに、まっすぐベッドに向かっている。真っ暗になると、カーテンの隙間から少しだけ光が差し込む。その灯りで、ほんのりと照らされた了の顔には、微かな、穏やかな笑みが浮かんでいた。
了は、静かにベッドにユリを降ろすと、脇に座って脚を組み、膝の上で頬杖を突いてユリを面白そうに眺めた。
「…何よ。」
まだどきどきと止まらない鼓動で震える手を隠しながらユリが言うと、了は「ユリが寝るまで寝ない」と言ってふふと笑った。
「…む…。」
仕返しされ、ユリが本気で膨れた。不貞腐れて勢いよく横になり、目を閉じると、了がくすくすと笑ったのが聞こえた。
なんだかその声が、とてもくすぐったくて、甘くて、優しくて、ユリは自然と眠りについた。

再会◆11

翌朝。
パタパタと足音に気を遣いながらも走り回る音で、ユリは目を醒ました。
目脂がこびり付いた瞼をゆっくりと開けると、了が何やら慌てている。
カウンターの椅子には、三ヶ月前に見たあの皮の鞄が乗せてあり、了自身は法廷で見た時とは違うスリーピースのスーツを着ていた。ただ、ジャケットは羽織っていないのと、時間がないのかネクタイもしていなかった。
さらに目を擦って目脂を一通り剥がし、もぞもぞと動くと、了が気付いた。ベッドまで歩み寄って膝を付き、ユリを見る。
「じゃあ、出かけて来るから。
何かあったら、カウンターの上にメモ置いておいたから、そこに連絡しろ。」
「うん…。」
若干寝ぼけている上、何故か喉が枯れていて、声が巧く出なかった。
「一応、昼に一度連絡をするから。
あと、食事は、来客拒否をしてあるから、なるべく自分で作ってくれ。どうしても駄目なら、その電話使っていい。一応何件か店の広告は置いておいた。」
「…ありがと。」
「家の中は好きに使っていいからな。」
そう言うなり、了はさっさと立ち上がって鞄を持ち、小走りで部屋を出た。
が、玄関でも何やらガタガタとやっているので、流石に気になり、ユリはタオルケットを頭に被ったまま玄関まで見送りに出た。

玄関では、了が先程の鞄と違う鞄にジャケットを投げ置き、靴を履き終えていた。
すぐさま慌ててドアを開けた了だが、はたと何か思い出したようで振り返った。そこにユリがいたので、ちょうどよかったようだ。
「俺が出たら、鍵をかける事。チェーンもな。誰が来ても絶対に開けない事。」
「はい。」
先程より出て来た声で返事をすると、了は微笑んで「じゃ」と言いドアを大きく開けた。
その時、ユリは思い付いて了を呼び止めた。
「了！」
「ん？」
振り向いた了に、ユリは悪戯気に笑ったあと、飛び切りの笑顔で「いってらっしゃい」と言ってやる。
了の驚く反応を期待しての事だったが…、意外にも了は素直に「いってきます」と言って行ってしまったのだった。
少し拍子抜けしたユリは、不満そうに唇を尖らすと、玄関の鍵をかけ、チェーンもかけた。
部屋に戻ると、カウンターは愚か、床も大分散らかっていた。
それを見て、本当は、普段からこのくらいの部屋なのだろうと思う。
ユリはくすくすと笑うと、すっかり醒めてしまった眠気が戻らないうちに顔を洗い、片付けを始めた。
とは言え、他人の家だ。勝手にあれこれと触る訳にいかないので、物をまとめて脇に置くだけの作業だ。床はほとんど汚れていなかったが、念のため、埃だけ取っておいた。
洗濯機を回し、部屋に戻ってシンクに置き去りにされたままのカップを洗う。洗濯物は、天気も好かったのでベランダに干した。時計を見ると、十一時を過ぎていた。冷蔵庫を開けると、無難な食材が綺麗に並べてあった。意外だったのは、若干使いかけのものがあ

った事だ。
（料理するのかしら…。）
昨夜のミルクティの巧さを思い出す。見かけによらず、料理は巧いのかも知れない。
キッチンは新品同様にぴかぴかだったので汚すのも偲びなく、ユリは豚肉と葉物を少しだけ拝借して、簡易的な冷しゃぶを用意した。カウンターに着き、食事を始める。腹も減っていなかったので、少しの量で満腹になってしまった。
食後、一息吐いて片付けついでに紅茶を用意しようと立ち上がると、カウンター脇に置かれた電話の子機が鳴った。
取っていいかどうか躊躇する。
「…どうしよう…。」
そう言いながら、数えていた呼び鈴は次で十一回目が鳴る。思い切って出てみる。
「…はい。」
慎重に出る。緊張しすぎて、声がほとんど出なかった。が、この緊張は、次の瞬間に、不要のものとなる。
『お、出たな。』
了だった。
「…なんだ…。」
思わず安堵の溜め息を漏らす。
『…？』
「なんでもない。お疲れ様。」
『おう。大丈夫か？　何か変わった事はないか？』
「ううん。大丈夫。あ、色々借りちゃった。」
『ああ、それは構わない。好きに使ってろ。何か食べたか？』
「うん。今食べ終わったところ。」
『そうか。夕方には戻れると思うから。』
「うん。」
『それから…。』

了がそう言って、一瞬だけ黙った。
「うん？」
『三笠が、行くと思う。』
「ここに？」
『ああ。』
何故だ？
職場は一緒だし、ここから庁舎も近い。ここへ来るくらいなら、職場へ戻ればいいではないか…。
『三笠は鍵持ってるんで、玄関までは来る筈だ。』
「…え？」
ユリの思考が止まった。
…鍵を持っている…？
その理由は、単純明快な気がする。
ただの同僚に、自分の家の鍵など渡さない。
『でも、開けなくていいからな。出なくてもいい。居留守にしてくれ。』
何故だ…？
実は三笠は、ユリがここにいると知らなくて、それを知られたくないのか…？
ただ、何故と問うていい事ではない気がする。
ユリはやっと声を出し、「わかった」と答えると、やる事があるからと言って電話を切った。了もそれ以上の用はなかったようで、すんなりと了承した。
子機をカウンターに置き、ふらふらとソファに歩き腰を下ろす。
部屋を見回す。
綺麗に片付けられている理由は、三笠が出入りしているなら納得が出来た。
居た堪れなくなった。
致し方ないとは言え、本当なら、ここにいない方がいいのだろうと思った。

勘繰り過ぎなのだろうか…。こんな事を想像する事自体、無粋な事ではないか。
仮に事実だとしても、了には了の暮らしがある。自分が何かを思ったり、況してや何か言う義務も権利もない。
自分がここにいるのは、了の仕事のためだ。
そうだ、そうなのだ…。
ユリは、ゆっくりと鼻から息を吸い込んで、ゆっくりと口から吐き出した。
自分が動揺すべき事ではない。ここにいるにも、出て行くにも、了の言葉を待てばいい。
ユリは、どっと疲れた体をソファに横たえた。
窓からは、空に近いというのに柔らかく心地好い陽が差し込む。少し窓を開けているので、時折風がふわりと入り込んで来る。
ゴォと、飛行機が飛ぶ音がする。警視庁が近いから、パトカーの音も聴こえる。自宅でも、この辺りの物音はよく聴こえていた。だが、自宅よりは大分官庁区域に近いから、色々な音がよりはっきり聴こえる。
一転、防音設備が整っているのか、隣の物音は全くしない。平日の昼間だから、いないのかも知れない。
ぼうっと、静寂と遠くの雑踏に耳を傾ける。
不意に、インターフォンが鳴った。驚いて、顔だけ上げる。そして、了の電話を思い出す。
『三笠が、行くと思う』。
三笠か…？
了に言われたとおり、じっと様子を伺う。なんだか物音を立ててしまいそうで、姿勢もそのままだ。
二度、インターフォンが鳴った後、暫くして、ガチャガチャと音がした。鍵を開けているようだ。
続いて、カチャリという音の直後、ガンという音とチャリという音が混ざって響いた。ドアをある程度の勢いで開けたのだろう。チ

ェーンがかかっているので、勢いが余ったようだ。
小さく、ふぅ、という溜め息が聞こえた。
そして、ドアが閉まる音がし、そのまま物音がしなくなった。
ユリは数秒、固まったまま様子を伺い、のそのそと起き上がった。
本当にこれでよかったのか…。
あの三笠に居留守をする事は、ユリには躊躇いがあった。が、了の言葉には従順に従う義務があるように思える。
だから言うとおりにしたのだが、この先、この件が終わるまでは、三笠と何度も顔を合わせるだろう。どんな顔をすればいいのだろう。
ソファに座り直し、肩を抱えて蹲った。真夏だと言うのに、体の末端が冷え切っていた。
突然、室内のどこかでブルブルと何かが小刻みに震える音がした。床か、カウンターか、固い場所で固いものが震えている。一定時間を置いて、何度も何度も震える音を聴きながら、物音の方向を探る。そして、ベッド脇の小さなテーブルの上にある携帯電話を見てやっと、電話がかかってきている事に気付いた。
慌てて携帯電話に駆け寄ると、了からかかって来ていた。急いで取ると、落としそうになった。
「…は、はいっ！」
『…？』
若干切れた息と、裏返り気味の声に、電話口の了が首を傾げる気配がした。
『どうした？』
「あ、ううん。何でもない。ちょっと、ぼうっとしてて…。」
心配そうに訊ねる了に、ユリは平静を装ってみせた。が、了にそんなものが通用する筈もない。了は暫く無言になったあと、溜め息を吐いた。
『まぁ、いい。後で聞く。
三笠、来たか？』
三笠の名で、心臓がどきりと波打った。

「う、うん。来た、みたい。
顔見てないから、解らない…。」
『そうか。』
「ねえ…。」
『ん？』
「…。」
聞きたい。何故、三笠の訪問を受けてはいけなかったのか。
だが…。
「…ごめん…。なんでもない…。」
…問えない。
『……。』
了はユリの様子に少しだけ戸惑って、何か言おうと息を吸ったようだった。だが、了も了で何も言わなかった。
『…今日、少し遅くなるから、先に休んでていいから。』
「…うん…。わかった…。」
『それと…。』
「うん。」
『悪いんだが、適当に何か作っといてくれ。』
「…え…？」
ユリは一瞬、言葉の意味を理解出来ず、直後に「ああ」と言った。
「晩ご飯？」
『そう。』
「いいけど…。」
『けど？』
聞き返す了に、ユリは見えないのにつんとして、「文句言うでしょ」と言った。そんな表情を声で悟ったのか、了が鼻で笑った。
『不味かったら容赦ないな。』
「…いいわ。びっくりして声も出ないくらいの作ってやるんだから。」
ユリがムキになると、了はふふと笑った。

『多分、〇時回る前には帰れるとは思う。』
「わかった。」
ユリが返事をすると、電話は切れた。
了は感付いていただろう。ユリが動揺している事に。だが、気を紛らわそうとしてくれたに違いない。
ユリは、三笠の事を一時脇に置き、ゆっくり深呼吸をし、めいっぱい伸びをすると、早速食事の支度に取り掛かる事にした。手の混んでいない、しかし味もバランスもよく、そして夜中でもすっと食べられるもの。
簡単なようだが、意外と手間のかかる料理が殆どだ。
冷蔵庫を漁って食材を確認し、ユリは鼻歌を歌いながらベランダで揺れる洗濯物を見る。
何だか変な気分だ。
昨日来たばかりだと言うのに、ふと無意識にここが既に自分の家のような気になってしまう事がある。
了に話したら、笑うだろうか。厭がるだろうか…。
…きっと、笑うだろう。そんな気がする。
だから言わない。
「大根があったから…。」
ユリは独り言を呟く。
大根があるなら、大根おろしがいいだろう。
そんな事を考えると、自然に思考が料理へ傾く。
きっと肉は欲しいはずだ。鶏腿肉があったから、少量をソテーしてみよう。生姜があったから、生姜で少し香りをつけてもいいかも知れない。
人参と牛蒡があったから、きんぴらが作れそうだ。付け合せは、そのくらいで十分だろう。葉物が足りないから、適当に浅漬けでも作ろう。
汁ものは、夜中だから要らないだろう…。
「なら、お米の支度はしとかないと…。」

キッチンを見回すとカウンター脇に、炊飯器を見付けた。妙に小さいのは、用がないからだろう。流石に適度に使い古されていた。米はその隣に袋のまま置いてある。よくよく見ると、カウンターには珈琲や紅茶などの嗜好品やら、パスタなどの乾物やらが雑多に並んでいた。

珈琲も紅茶も有名なブランド名が書かれた缶に入っている。パスタは既に袋から出してあるが、捩じれたものから幅広いものまで、ざっとみても八種類ほどが、それぞれ透明のパスタボトルに入って並んでいる。

「お米より、パスタの方がいいかしら…。」

夜中だから、腹持ちがいいよりは手早く食べられるものの方がよさそうだ。

ユリは先程頭の中で立てた献立をパスタを軸に置き換えた。

「鶏肉と生姜と、葉っぱを一緒に炒めて…。」

大根おろしを乗せるだけなら手早く出来るし、下準備も要らないだろう。ただ、これだと若干ボリューム不足な気もする。

「うーん…。どれだけお腹空かせて帰って来るかよね…。」

三ヶ月前、芳生家に食事に来た時の事を思い出す。あの時は、結構な量の飯を平らげていた。

「やっぱりお米の方がいいか。」

どうせ、大量に食うのだろう…。

時計を見るとそろそろ三時だった。そんなにあれこれ考え事をしていただろうか…。

了が帰って来るのは十一時を過ぎるのだろうから、急いで支度をする事もない。取り敢えず葉物だけを準備する事にし、冷蔵庫から小松菜を取り出すと、昼間使った鍋で軽く茹でて塩を振り、置いておいた。

序でにコンロ下などを覗き、調味料を家捜しする。棚の一つにまとめて並べられた調味料は、オリーブオイルから醤油、出汁など、適度に揃っていた。ただし、どれもユリが近所のスーパーで見かけ

るものとは違う。メーカーは聞いた事はあるが、高級百貨店や小洒落たショッピングモールの食料品売り場でしか見ないものだ。確か、長野の高原に本拠地を置く農業家が集まって作った団体だった。調味料のほか、ジャムやワインなども製造していて、ワインはフランスで賞を受賞している。

ユリは棚を閉め、立ち上がって溜め息を吐いた。

思考が三笠の元に戻って行く。

「…近所の独身のお兄ちゃんの世話してると思えばいいのよね…。」

先程の結論の通り、自分が割り込んでいるのではなく、致し方ない事なのだから、割り切る必要がある。

ベランダから、心地好い風が吹いた。窓を開け、外に出ると、洗濯物の間から景色を眺める。

しかし何故、こんなに三笠が気になるのだろう…。

きっと、自分が三笠の立場なら、とてつもなく厭な気分になるからだろうと思う。仕事とは言え、自分の相手の家に異性が寝泊りすれば、それは心地好い事ではない。況してや、居留守をせよなどと言われれば、腹を探りたくもなる。

ユリは風に溜め息を乗せて吐いた。

ふと、昨夜の了を思い出す。寝惚けた頭で少し恥ずかしい事を言った気がする。その自分を、了は優しく笑った。

照れくさかったのを覚えている。

優しく微笑まれる事がくすぐったくて、妙に心が揺れた。

そう言えば、あの後一体どこで寝たのだろうか。

起きた時、ユリはあのでかいベッドのど真ん中を陣取っていたから、恐らく了はベッドでは寝なかったはずだ。ソファだろうか。

だとしたら、疲れているだろう…。

「今日は、逆でもいいわよね。」

今日と言わず、ここにいなければならない限り、ソファで十分だった。

だが、そう思ったところで、了が素直に頷く訳がない。何か策で

も講じない限り、ユリがソファで寝る事は難しいと感じる。
どんな策がよいか…。
本やＤＶＤを観ながら、寝落ちなどどうだろう…。だが、これを毎晩やっていたら、それはそれで怒られるかも知れない。
寝床について真剣に悩むなど想定外であるが、ユリの中では了に対して引け目がある。せめて、一歩退けるところでは退いておきたい。
了にこれ以上負担がかかっては、自分自身が耐えられないのだ。

再会◆12

窓の外に目をやる。日が西へ傾く時間。部屋に差し込む日の光が、だいぶ軟らかくなった。

そろそろ洗濯物を取り込んでもよい時間だろう。ベランダに出、のんびりと洗濯物を片付け、竿を仕舞う。窓辺の床に座って洗濯物を畳みながら、自然と顔が綻んだので、何かと思って我に返ると、無意識に鼻歌を歌っている事に気付いた。

また歌ってしまった…。

家にいても、鼻歌を歌う事などほとんどない。

カナエがいるからという事もあるだろうが、何か別の理由に因るものだと言う事は、よく解る。

何だろう…。

胸がざわついた。

胸の中が自分のものではないような、もやもやとした何かに包まれているようだ。

気を紛らわせるために、わざと大きな音を立てて立ち上がり、バッグに洗濯物を詰め込む。ついでに洗ったタオル類をバスルームへ戻し、少し早いが夕食の準備を始める。音がないとまた歌を歌ってしまいそうだったので、テレビを点けた。いくつかチャンネルを回すが、下らない芸能ニュースばかりだった。もう少し待てば昔のドラマの再放送や子供向けのアニメが始まるが、どれにも興味はなかった。ケーブルテレビでも契約していないかと試しに回すと映ったので、クラシック音楽専用チャンネルに切り替えた。

詳しい訳ではないが、クラシックは好きなのだ。元は父が好きだったからだが、　父に連れられてコンサートなどに出向くうち、自分でも進んで聴く様になった。小さな頃から、試験勉強や特別気を落ち着かせたいときは、クラシック音楽を聴く様にしている。

テレビでは、先月行われた海外オーケストラのコンサート特集が

放映されていた。
数カ国の交響楽団による、日本公演の様子が流れていて、一団辺り一時間半ほどに編集されているようだった。
手軽に観られそうだったのでそのまま流しながら、料理を進める。
調理のスピードも曲のテンポにつられて早まったりゆっくりになったりしたが、それがいいアクセントになったのか、下準備の段階から何もかもが普段より格段に出来がよかった。
二団体ほどのＯＡが終わったところで支度もすっかり終わってしまい、ユリはそのままソファに座って見続ける事にした。
時折ちらりと窓の外を見ると、すっかり夜になっていて、街灯りがきらきらとしていた。
了は十一時くらいになると言っていたから、まだ時間はたっぷりある。先に寝る事は考えていなかったので、テレビに集中する。
番組も終盤に差し掛かり、ついに最後のドレスデン交響楽団のコンサートが始まった。喉が渇いたので紅茶を貰う事にし、一旦玄関に向かってチェーンを外したあと、ケトルで湯を沸かしながら、キッチンでコンサートを眺める。
五曲ほど演奏が終ったところで、ゲストとして呼ばれた日本出身のピアニストが登場した。ピアニストは七十を超える老女だが、力強い演奏と、リストを弾かせたら右に出る者はいないと言われるほどに定番のリストの楽曲を多数持っている事が魅力で、まさに今からそのリストの楽曲を数曲ソロ演奏するのだった。
ユリも、このピアニストは好きだった。常々コンサートには行きたいと思っていたが、チケットは発売と同時に即完売してしまう人気ぶりで、買えた例がなかった。
老女が客に一礼をする。少し珍しいデザインの衣装を身に纏い、太ったその体を優雅に進めながらピアノ前に座る。
一呼吸、二呼吸置いて指を鍵盤の上に静かに下ろすと、指を、体を躍らせる。
ピアノの音につられ、ユリの気分も一喜一憂する。

優しく、時に厳しいタッチはどの音を奏でても繊細で、聞えて来る音は耳に入った瞬間体中を駆け巡るような気がする。
二曲目、三曲目と曲は続き、ほんの束の間、老女の囁きが終わり、最終曲、老女がその実力を世界に知らしめた、今や彼女の定番ともなっている曲『ラ・カンパネラ』の演奏が始まった。
紅茶のティパックをゆらゆらと湯に潜らせていたユリの手が止まった。
テレビやCDなどで何度も何度も耳にするが、その都度、この曲だけは手が止まる。
不思議と聴き入り、思考まで止まってしまうのだ。音が優しいから静かに聴き入っているだけなのだが、終盤、心の中は怒涛の如く様々な感情が弾け、暴れる。こんなに情感を載せて演奏するピアニストを、少なくともユリは知らなかった。
初めて彼女のラ・カンパネラを聴き終えた時など、呆然と立ち尽くし、膝が震えていたほどだった。涙が込み上げ、何か言葉を吐き出したくて堪らないくらいに、感情の制御が出来なくなっていた。
その衝撃的な出会いから五年。ずっとファンだ。
前半の静かで哀しげな音。時折叩くように奏でる高音の音の素晴らしさ。中盤前後で徐々に盛り上がる雰囲気と彼女が入れ込む情感の強さに引き込まれ、そして終盤。
すべての感情を指先に乗せ、一見乱暴に、そして感情的に鍵盤を叩き、言葉のすべて、心のすべて、情景のすべてを乗せ、仕上げへと、正に雪崩れ込むように流れていく演奏に、ユリの息が詰まった。
込み上げる感情は、言葉では表せない。ただそこに、この音があればいい。それだけで胸満たされるのだ。
嵐の去る如く演奏が終わり、盛大な拍手によって老女が舞台から去る時になって、漸くユリの意識も戻った。気付けば涙が、頬ばかりか首まで伝って流れていた。
はぁ、と重たい溜め息を吐くと、「何だお前…」と突然声をかけられた。

「！！」
驚いて振り向くと、困惑気味な表情を浮かべて了が立っていた。
「え…、あれ！？」
時計を見ると、十一時をすっかり過ぎてしまっている。一時間半のコンサートを四団体観て、さらに一時間ほど経ったのだ、当然といえば当然の時間なのだが、ユリにとってはあっという間に経過した時間だったので、戸惑いを覚える。
「あ、ごめん。おかえり。」
「ただいま…。」
そう言いながら、未だ怪訝な顔でユリを見る了が、テレビをちらりと観た後、つかつかと棚に近付いて一枚のＣＤを取り出した。
ユリに差し出すので受け取ると、数年前に開催された、あの老女のとある演奏会を収録したＣＤだった。
了は着ていたジャケットを脱ぎ、ネクタイを解きながらソファに歩み寄り、再び始まった楽団の演奏を眺めながら話し始めた。
「オレもその人好きでさ。
たまたま暇潰しに観に行ったコンサートが、その人のソロコンサートだった。
その日からその人のコンサートは、時間があれば必ず行くくらい。
それを知った、アメリカの楽団にいる友達が送ってくれたんだ。元々日本に輸入される量が少なくて、しかも今はもう廃盤になって、手に入らないと思う。
欲しければ、やる。」
「え、でも…。」
乾きかけた頬の涙を拭きながらユリが言うと、了はジャケットとネクタイを丸めて持ち上げ、「聴きたくなったら生で聴きに行くし」と生意気な事を言って、隣の部屋へ行ってしまった。
ユリはＣＤを裏返し表返しにくるくるやりながら暫く眺めたあと、せっかくなので貰う事にした。
急いで夕飯の仕上げを始めると、了が戻ってきた。了は昨晩と同

じ白いシャツに丈が短めのパンツスタイルで、凡そ昼間のスーツ姿とはかけ離れただらしなさ具合を漂わせていた。
「ご飯食べるでしょ？」
「うん。」
ユリは返事を待たずにさっさと食器によそえるものから順に用意し、カウンターに並べていった。テレビから拍手と喝采が聞える。番組も終わったようだ。
了は昨夜と同じ席に着いた。カウンターの短い辺の方で、廊下を背にする位置だ。そこが低位置なのだろう。
ユリも食事をしていないので軽く自分の分も用意し、ベッドを背にする位置で、了と一つだけ椅子を空けて座った。大きなカウンターだが、それでも料理を並べると狭かった。
ユリが「どうぞ」と言うと、「いただきます」と律儀に言って手を合わせ、了が食事を始めた。
大飯食らいの腹を満たすのに十分な量か不安で暫く眺めるが、了は無言で次々と口に料理を運んで行くだけで、特に何も言わなかった。
「…どう…？」
何か何でもいいので感想が欲しくて堪らず、ユリが声をかけると、了は「ん？」と一瞬顔を上げたあと、口に入れたものを租借し終えるまで待って、ふふんと笑った。
「さすがカナエさんだな。よく教育したもんだ。」
その言葉に、ユリがむっとする。
「何よムカツク…。素直に美味しいって言ったら？」
不貞腐れて言うと、了はくすくすと笑った後、
「旨い。」
と素直に言った。
ユリも素直ではないので、面と向かって素直に言われると、還って照れくさい。
照れ隠しに、当然でしょうとも言いたげな顔でふんと笑い、食事

を始めた。
　皿が半分ほど空くまで無言で食事を進めたが、夜中とは言え無言の食事も味気なく、ユリがＣＤをくれた友人について訊ねた事から、了の友人についての話になった。
「あんた、友達いたのね。」
「失敬な。」
「だって、その性格でよく友達出来るわよね…。」
「俺だって別に、誰彼構わず愛想が悪い訳じゃないぞ…。」
「しかも海外の楽団に入れるような、すごい人が友達なんて。」
「他にも活躍してるヤツはいるぞ。
　ただ、大体が大学が同じヤツだから、自然に法曹関係者になるけどな。」
「弁護士さんとか？」
「ああ。検事が一人と、弁護士が五人…。あとは海外で弁護士をやってるのが二人と、法律マネージメントをしてるのが三人、だったっけな。」
「…エリートじゃないの…。」
「そうでもないだろ。言うほど身入りがいい訳じゃないしな、この職業。
　目立ちはするが…。
　あとは交響楽団に入ったのが一人と、映画制作会社でＣＧをやってたり。」
「みんな了みたいな性格な訳？」
「…お前ホント失礼だな。」
「失礼はお互い様じゃない。
　みんなとは仲いいの？」
「ん？　ああ、たまに集まって呑んだりはしてるけど。
　それぞれ忙しいしな。日本にいないヤツもいるし、年に一回とか、そのくらいのペースでしか会えないよ。でも、大学出てそろそろ十年、ずっとそんな付き合いだし、仲はいいんじゃないかな。」

「ふぅん。いいな。
私はそういうのないのよね…。」
「性格悪いからだろ？」
「失礼ね。
私はこんな自由に暮らしてるけど、大抵はみんな会社勤めだから、時間の余裕がないのよ。
マミコくらいよ、私と時間合うの。あの子も自由だから。」
「この間、一緒に食事してた子か？」
「うん。今カナダに住み込みのバイトに行ってるの。」
「何でまた…。」
「そういうのが好きなの。半年くらい住み込みで国内国外で仕事したあと、日本で遊んで過ごすのよ。」
「羨ましい暮らしだね…。」
「大学の頃からそうだったのよ。自由奔放で。」
「同級なのか。」
「うん。入学した時からずっと。」
「へぇ。」
「他にもいて、仲良しグループ五人で遊んでたんだけど、段々みんな落ち着いて来ちゃって…。」
「残るは二人って訳だ。」
「…そう。」
答えながら了の皿を見ると、いつの間にか綺麗に片付いていた。
一方で、ユリの皿の上には、まだこんもりと食事が残っている。
「食べるの早くない…？」
「お前が遅いだけ。喋ってて食べてなかっただろ。」
「う…うん…。」
指摘されると確かにそのとおりで、ユリが口篭った。そんなユリを横目に面白そうに見ながら、了が立ち上がってコーヒーを淹れ始めた。
「夜にカフェイン取ると、眠れなくなるわよ…。」

「お前は子供か。
昨日も飲んだろうが。」
「夜中、目、覚めちゃったわ。」
「やっぱり子供だったか…。」
残念そうな顔をする了を、ユリが睨んだ。了はお構いなしに手早くコーヒーを淹れたマグカップをユリの手前に置き、自身は啜りながらソファへ歩き出した。
「もういいの？　ご飯。」
「ん？　ああ。ご馳走様。」
「はい。」
などと妙に馴染んだやり取りをし、ユリもさっさと食事を済ませると、食器を洗い、カップを手にソファへ向かった。
了は何故かパンツのポケットに手を突っ込み、ソファにだらしなく座りながら、点けっ放しにしていたテレビを眺めていた。チャンネルは変えたらしく、海外のサイエンスドキュメンタリー番組が流れていた。
ユリはソファには腰掛けず、ソファとテーブルの間の了の足元に座って、テレビと了を見比べた。
ユリの視線に気付いた了が、「ん？」と言いながら首を傾げた。
「こういうの好き？」
「好き。」
間髪入れずに答えが返ってくる。余程好きなのだろう。
「天文学、量子力学、遺伝子工学に、宇宙開発。
こういうのが好きだから、これ契約（ケーブルテレビ）したんだもの。」
「…男の子よね…。」
ユリが悪気なく呟くと、了が苦笑した。
「”子”と来たか。」
「ああ、ごめん。別に悪い意味じゃなくて。」
「別にいいけど。
法律関係の学科に入れなかったら、滑り止めで遺伝子工学の勉強

が出来る大学受けてた。」
「そんなに好きなの…。」
「好きだね。面白いよ。
検事になって、法曹も面白いとは思うけど、別の面白味だな。」
「…。」
意気揚々と語る了を、ユリが無言で見つめた。
了が笑って、「おかしい？」と訊ねる。
「ううん。違うの。」
ユリが首を振った。
「意外な事ばっかりで。
了。初めて会った時、そんなものに興味なさそうだったし、あんなに性格悪そうだったのに。」
「性格は余計だろ…。」
「余計だから驚いてるのよ。」
そう言うと、ユリが溜め息を吐いた。
「…わかんなくなっちゃった…。」
「何が？」
「蕪木　了って人が。」
コーヒーを一口啜って、ソファに頬杖を突くと、了が笑った。
そして、テレビに視線を戻すと、ユリにも聞き取り辛いくらい小さな声で呟いた。
「普通の人だよ、蕪木　了は…。」
その声がとても寂しそうで、はっとしてユリが了を見上げると、穏やかな横顔が見えた。
ただ、穏やかさの中に、声のとおり寂しそうな、憂いが見える。
何か拙い事を言ってしまったかと焦ったが、訳も判らず謝罪したところで墓穴になりそうで、ユリはじっと了を見つめた。
そして一言、「そうね」と呟くと、テレビを眺めた。
了の好きなもの。
不思議だ。それが何であれ、とても大事に思えて来る。

それが、何であれ…。
各々、ぼんやりと何かを考えながら、テレビを観続けた。言葉を交わす事も、何故か突然躊躇う様になり、だが、これと言ってこれ以上何か口にするような言葉も思いつかず、ユリが、足が冷たくなったのでソファに腰掛けた以外は身動ぎもせず、ただじっと二人で、宇宙の星星の映るテレビ画面を眺めた。
部屋の明かりは元々少し暗く、テレビ画面は闇に美しい色の銀河が映るのみ。音声は、日本語字幕が付いているだけで英語のナレーションなので、うっかりしていると眠気を誘われてしまう。
昼間大して疲れるような事をしていない筈のユリだったが、番組の中盤頃にはうつらうつらとし始めた。
「眠いならベッドに…。」
「ううん。駄目。今日はここで寝るって決めたの。了がベッドで寝なきゃ駄目。」
必死に眠気と戦いながら言うユリに、了が苦笑した。
「何で？」
何故かは何となく解っていた。が、敢えて訊ねなければならなかった。そうしないと、ユリはこのままソファで寝てしまう。さすがに今日は色々と出て回ったので、ユリを抱きかかえてベッドへ連れて行くのは無理そうだった。
「了、昨日ソファで寝たでしょ？
絶対疲れてるでしょ。」
「疲れてないよ。」
「嘘。絶対疲れてる。
それとも、今日も寝ないの？　遅くまで仕事する？」
「…いや、今日は何もしないけど…。」
「じゃあやっぱり、今日は了がベッドで寝なきゃ。」
「…。」
了が溜め息を吐いた。眠いせいで頑固になっているのだろう。きっと何を言っても納得しないと思った了は、ユリに体を向けて、ソ

ファの背凭れに頬杖を突いた。ユリは横向きに座って、ぐったりと背凭れに体重のすべてを預けている。よほど眠いのだろう。思わず、親戚の子供を思い出して笑いそうになった。
「じゃあ…。」
了が、提案、という素振りでユリを指差した。
「ベッドで寝る。」
了が言うと、ユリは満足げに何度も頷いた。が、「ただし…」と了が続けると、ユリの首が止まった。
「ユリもベッドで寝る事。」
「…え…。」
ユリは驚いたが、体が寝に入っているため動かなかった。
了のベッドはキングサイズなので、確かに二人で寝ても窮屈ではないだろう。だが…。
「狭くない…？」
敢えてそう聞いてみる。
「お前が太ってなきゃな。」
「失礼ね…。」
相変わらず体が動かないので、何を言われても実質無抵抗だ。
「お前そんな眠いの？」
「うん…。なんでだろ。昼間特に何もしなかったんだけど…。」
背凭れに凭れたまま、顔だけ困惑するユリに、了が苦笑した。
「緊張して疲れが出たんだろ…。
その分だと風呂も無理だな。」
「あ…、そうか、入ってなかった…。」
「どうする？　がんばるか？」
「う…。」
一日中家にいたから、それほど汗は掻いていない。が、人様のベッドを借りている以上、なるべく綺麗な状態で寝るのが良いのではと思う。
「がんばる…。」

ユリが言うと、了が笑った。そして、手を出す。起き上がるのを手伝ってくれるようだ。その手を握ると、了は立ち上がって思い切りユリを引き上げた。
いつかも、こんな風に立ち上がった気がする。
勢いよく立ち上がったはいいが、足元はふらふらしていて覚束ない。
「…ありがと。」
そう言いながらバスルームへ向かうと、「風呂で寝るなよ」と言われた。
「…大丈夫…。」
そうは答えるが、自信がない。バスルームで服を脱ぎながら、シャワーだけにしようと決め、手早く支度をし、シャワーのお湯を頭からかけると、やっと意識がはっきりした。
計算がだいぶ違ってしまったが、どうにか了はベッドで眠ってくれるようだ。一緒に寝るのは不本意だが、この状況で良からぬ事をするような人間でもないだろうという信用はある。
問題なのは…。
「私の寝相よね…。」
ゆっくり眠って貰う筈が、自分の蹴りで眠りを阻害したのでは意味がない。
どうしよう…。
髪を洗い終わり、体も一通り洗い、足元の泡や塵を湯で流してシャワーを止めると、少し寒くなった。
そそくさとタオルで体を拭き、借りている部屋着を着直すと、髪の水気を拭きながら部屋へ戻る。
一声かけると、了がバスルームへと向かう。
ベッドに腰掛て、髪を拭き続ける。ユリが離れている間に、部屋はすっかり眠る準備をされていて、照明もほとんど落とされ、テレビのボリュームも小さくなっていた。
何もないと言っていたが、ソファを見ると書類が数枚広がってい

たので、仕事でもしていたのだろう。
半乾きになった髪を、今度はタオルで撫でながら、ふぅと溜め息を吐く。
さて、どう悪い寝相を抑えようか。やはりソファで…。
などと考えながらタオルをカウンターの椅子にかけ、ベッドの窓側半分に横になってみた。
シャワーで目が冴えた筈なのに、横になった途端、また眠気が襲って来た。
聞き取れないほど小さなテレビの音声が、いい子守唄になっている。
ユリは知らぬ間に、眠りに着いた。
…が、ふと意識が浮き上がり、体が回転した。寝返りを打ったのだろう。はっとして目を開けると、目の前に了の横顔があった。
ユリが息を呑む。
了は眠っているようで、規則正しく胸を上下させながら、小さな寝息を立てている。
仰向けだが、両手を腹の上で組み、見事なまでにこじんまりとしたスペースで寝ている。
寝返りを打った自分の体はベッドのど真ん中よりやや窓側にあるが、相手との距離を考えるとこれでもスペースを取り過ぎな気がした。
起こしてしまいそうだったので動く事はせず、そのまま了の横顔を眺める。
昼間の生意気な顔も、ふと見せる笑顔も、年相応かそれ以上の大人の顔だが、寝顔は違う。
照明が落ち、青白い月明かりが差し込む暗がりの中に見えるあどけない横顔は、可愛らしささえ帯びて、頬が緩む。
護りたい。
ふとユリの心を掠めたのは、そんな想いだった。

面影◆1

了のマンションで待機する日が、その後二日続いた。
先日膨張に出向いた裁判の再審準備やら、別件の裁判や捜査も入ったため、暫く調査室が無人になる事が多いためだった。
四日目ともなると家にも慣れてしまい、昼間は掃除や洗濯、簡単な片付けをし、あとは気ままにテレビを観ながら過ごし、夜は了の夕食の支度をしながら待つ。
了は帰り時間は区々だが、いずれも〇時に近かった。だが、ユリ自身は時間の工面など幾らでも出来るので、昼に寝るなどしながら食事は一緒に取れるようにした。
朝もユリは比較的普段より早起き出来るよう意識をしていたが、了はそれよりも早く起きてしまうため、結局毎度支度中に目が覚め、寝ぼけながら見送る事になった。
ただ、この部屋に来てから四日。そのうち二日ほど、朝、了がユリの顔を心配そうに覗き込んでいるのを目の前に目を覚ます事があった。
何かと問うと、特に何も言わないのだが、とにかく心配そうに覗き込んでいるのだった。
妙な寝言でも言っているのではないかと逆に心配になったが、そういう訳でもなさそうだった。
訳も解らぬまま、しかし普段はいつもどおりに接してくるので、特別気にする事は止め、ユリも普段どおりに振舞った。
そして五日後。
今日は、久しぶりに調査室へ同伴出勤する事になった。
調査室に着いた時には既に、高遠も渡部も日下部もいて、三笠のみが所用で出かけていなかった。
高遠と了が話しこんでいる間、ソファに座っていると、渡部と日下部が代わる代わる声をかけて構ってくれた。

気を遣わせるのも嫌だったので、何か読む本を探していると、暇潰しになるだろうと渡部が分厚いハードカバーのファンタジー書籍を貸してくれた。
黙って熱中していると、誰も声をかけて来なくなったので、ユリの気もやっと落ち着いた。
ソファにいると相変わらず、高遠と了の内緒話も聞えて来てしまう。
読書に集中しているつもりでも、ついつい耳がそちらに傾いてしまった。
が、完全に聞き取る事は難しく、「仕方がない」とか「暫く様子を見て」とか、そんな当たり障りのない会話しか理解が出来なかった。
了は高遠と話をしていない時は、自分のデスクの上に詰まれた書類をソファまで持って来て読んでいた。デスクにいるのは電話をするかメールチェックをする時くらいで、ねるべくソファにいるように気遣っている様子だった。
了の部屋で悩んでいた事を、ふと思い出した。
やはり、了の邪魔になっているのではないだろうか。
ここにいるのが致し方ないのなら、せめて何か手伝いが出来れば良かったのだが、素人のユリに何が出来るはずもなく、そんな声もかけられなかった。
昼食は、渡部と高遠がそれぞれ外出でいないというので、日下部と了と三人でカフェの隣にあったレストランへ向かい、食事をした。外装の豪華さにしてはリーズナブルな価格の料理と、スタッフの物腰も柔らかく、思っていたほど緊張せずに食事をする事が出来た。
調査室に戻ると、高遠が予定より早く帰って来ていて、了をデスクに呼んで小声で話し始めたので、ユリはエントランスのコーヒーメーカーの前でのそのそとコーヒーを入れ、そのまま窓辺でコーヒーを啜った。
一〇分ほど経ったか、すっかり冷めたコーヒーを揺らしながら、

そろそろソファに戻ろうと思っていると、了に呼ばれた。ソファまで戻ると、高遠がデスクまで来るよう手招きをするので、テーブルにカップを置き、了の隣に並んで立った。
「ユリちゃん、悪いんだけど、今日夕方過ぎに、とーるちゃんとある場所まで出かけて欲しいの。」
「え？　あ、はい。」
「ごめんね。のんびり出来るといいんだけど、ちょっととーるちゃんが直接出向かなきゃいけないところがあってね。
帰りは夜遅くになって戻れそうもないのと、ユリちゃんもこととーるちゃんの部屋だけじゃ退屈だろうから、ね。」
「え、そんな、大丈夫ですよ！　でも一緒に行った方がよければ、着いて行きます。」
「悪いね。とーるちゃん、これからちょっと出かけるので、帰って来てからすぐに出るようになるから。」
「はい。」
ユリが頷くと、高遠は了を見上げて、「じゃあ、よろしく」と言った。
了も頷いて、「では、行って来ます」と言い、調査室を出て行った。今日はスーツではないラフな格好なので、手荷物もほとんどないようだった。何故かいつもグレーを基調にしているが、好きなのだろうか。
ユリがそんな事を思いながら見送っていると、高遠が笑った。
「とーるちゃんが相手出来なくて、すまないね。」
「え！？」
ユリが驚いて振り返る。
「いえ。だって、お仕事ですから…。」
「そうなんだけどね…。」
そう言って、高遠がさびしそうに笑った。
「我々が不甲斐ないのもあるんだよ。早く犯人を捕まえられれば、ユリちゃんは普段どおり生活出来るんだからね。」

確かにそうであろう。だが、そんな事を言っていては切がない。高遠なりに気を遣ってくれたのだろうが、それは不要と言うものだ。そして勿論、わざわざ不要と言う必要もない。高遠はすべてを理解した上で、敢えて言っているのだ。

「…あの…。」

「ん？」

「私…、感謝してます。」

「感謝？」

高遠が、意外と言う顔をした。

「はい。

了とはもうあれきり会えないと思ってましたし、それに、色んな話が出来るようになったし…。

こんな事でもなければ、こんな風に知り合えなかっただろうなって。

それに…。」

「？」

「高遠さんにも会えたし。」

「ボクに…？」

「はい。だって、高遠さん、私の両親の事、ご存知でしょう？

三ヶ月前、高遠さんの事聞いて、凄く会いたいと思っていました。」

ユリが言うと、高遠の目が微かに潤んだ。

「…すまないね…。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8322u/

男爵は微笑う

2011年10月13日14時53分発行